

Title	多文化共生のための新しい国際交流会のシステムデザイン： 横浜市鶴見区における南米系外国人移住者と地元の人々を対象に
Sub Title	A new system design for international exchange meetings for multicultural understanding : focusing on South American immigrants and local residents of Tsurumi in Yokohama
Author	山本, 由佳(Yamamoto, Yuka) ヒジノ, ケン・ ビクター・ レオナード(Hijino, Ken Victor Leonard)
Publisher	慶應義塾大学大学院システムデザイン・ マネジメント研究科
Publication year	2012
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	塗りつぶし図あり 修士学位論文. 2012年度システムデザイン・ マネジメント学 第119号
Genre	Thesis or Dissertation
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40002001-00002012-0058

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

多文化共生のための新しい国際交流会
のシステムデザインー横浜市鶴見区に
おける南米系外国人移住者と地元の
人々を対象にー

山本 由佳

(学籍番号 : 81133627)

指導教員 准教授 ヒジノ ケン・ビクター・レオナード

2013 年 3 月

慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科

システムデザイン・マネジメント専攻

A New System Design for International
Exchange Meetings for
Multicultural Understanding - Focusing on
South American Immigrants and Local
Residents of Tsurumi in Yokohama-

Yamamoto Yuka

(Student ID Number : 81133627)

Supervisor Ken Victor Leonard Hijino

March 2013

Graduate School of System Design and Management,

Keio University

Major in System Design and Management

論 文 要 旨

学籍番号	81133627	氏 名	山本由佳
論文題目： 多文化共生のための新しい国際交流会のシステムデザイン—横浜市鶴見区における南米系外国人移住者と地元の人々を対象に—			
(内容の要旨) 日本には全国に国際交流・多文化共生活動の拠点として設立された「国際交流協会」があり、自治体、市民、そして外国人移住者をつなぐ役割を担い、その活動は多岐に渡っている。協会によって活動内容は異なるが、主に多言語の情報誌の発行、ボランティア通訳を介した生活相談窓口、日本語教室の開催、各種講座・交流会の実施を行っている。筆者は、日本人と外国人移住者がお互いの理解を深める機会としての「交流会」に大きな期待を寄せている。 筆者はフランス留学中に、フランスにおけるマグレブ系の移民（宗教・文化が異なり、フランス社会でもっとも同化が進んでおらず、フランス人が敵意を抱きやすいと言われているフランスの旧植民地諸国、アルジェリア・チュニジア・モロッコ出身の移民）を研究対象に多文化共生を考える研究を行っていた。パリの北側に代表されるように、フランスと言う国では、大都市の郊外に行けば、移民街（スラム街）を容易に見つけることができる。留学していたトゥールーズ市内ではアジア系の移民はアジア系の移民で固まり、アフリカ系はアフリカ系の居住地区が存在していたように異なる文化間での交流の少なさに問題意識を持っていた。筆者自身は Association Toulouse Midi-Pyrénées Japon（日仏協会トゥールーズ支部）という日仏間での交流を深める目的で設置された国際交流協会に毎週、参加することで、フランス人の知り合いをたくさん持つことができ、フランスでの生活になじむことができた。日本に帰国後、日本における「国際交流協会」を調べ、インタビュー調査を行っているうちに日本は政府の確固たる移民政策はないが、民間の国際交流協会が多文化共生に大きな貢献をしていることに気が付いた。 日本において外国人の割合は 1.63% ¹ と少ないが、外国人集住地区が存在し、その地域内で無視できない存在になっている。地域住民との間に交流を持ちにくいのは、文化や言語体系が全く異なる南米系外国人移住者である。筆者は 2 千人以上の南米系外国人が集住している横浜市鶴見区を対象に調査を行ってきた。地域住民と継続的な交流を生み出すうえで有効な国際交流会を実施し、南米系外国人移住者といかに地域で共存していくかについて考察していきたい。 結論としてはシステムデザインの手法を用い、デザインした交流会は外国人の日本語能力向上、地域住民の異文化理解に効果を発揮することがアンケートによる検証、有識者レビューによる妥当性確認により証明された。また、実際に交流会という小規模社会実験を行ったことで明らかになったのは、どうしてもこちらからアクセスできず、実態がつかめない移住者の存在である。「移民」の存在を認めない日本の現行の法律に対する矛盾を指摘すると同時に、それでもなお、交流会のような草の根の活動が「移民」と共存できる社会を実現するために非常に重要であるということを主張する。			
注 1) 法務省 HP「平成 23 年末現在における外国人登録者数について」 (http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04_00015.html 1 月 22 日アクセス)			
キーワード (5 語) 多文化共生、国際交流会、アソシエーション、移民、日系南米人			

SUMMARY OF MASTER'S DISSERTATION

Student Identification Number	81133627	Name	Yamamoto Yuka
<p>Title</p> <p style="text-align: center;">A New System Design for International Exchange Meetings for Multicultural Understanding - Focusing on South American Immigrants and Local Residents of Tsurumi in Yokohama-</p>			
<p>Abstract</p> <p>As globalization progresses, immigrants are increasing. European countries which have accepted a lot of immigrants historically are struggling with conflicts between native residents and immigrants. Although the foreign nationality rate in Japan is only 1.63%, many foreigners already live in some specific area in Japan and they are concentrated. Conflicts occur as well. I noticed that not only governments but also associations or NPOs are making effort to solve these problems and advance multicultural understanding by organizing international exchange meetings during my study abroad in Toulouse, France.</p> <p>To consider methods to help local residents to co-operate with immigrants and advance multicultural society in Japan, I researched what is happening in an area where many foreign people live. Tsurumi, Yokohama has more than 2,000 people come from South America (most of them are Japanese-South Americans). South American people, in general, are difficult to acquire Japanese and to communicate with Japanese people. I conducted interviews and international exchange meetings in Tsurumi by using System design methods and comparative approaches to realize Multicultural understanding with local residents and immigrants.</p>			
<p>Key Word(5 words)</p> <p>Multicultural Understanding, International Exchange Meetings, Association, Immigrants, Japanese-South Americans</p>			

序章	6
本論	
第一章 西欧諸国における「移民」の受け入れ状況と課題	
1.1 フランスにおける「移民」受け入れ状況と課題—一元主義の国、フランス—	8
1.2 フィールドワーカー移民受け入れ国、フランス・移民排出国、チュニジアにて	10
1.3 他のヨーロッパ諸国との比較—多文化主義のオランダ—	19
1.4 一元化主義・多文化主義の限界—“受け入れたくない移民”をどう対処するか—	20
第二章 日本社会における南米系外国人移住者の現状	
2.1 南米系外国人移住者の分布と各地域における現状	36
2.2 鶴見区における現地調査とインタビュー調査	40
2.3 教育現場—放課後教室でのボランティアから見えた課題	52
2.4 鶴見区での南米系外国人移住者へのインタビュー	61
2.5 鶴見区でのステークホルダーインタビュー（個人）	65
2.6 外国人移住者（南米系以外）のキーパーソンへのインタビュー	67
2.7 現地調査で見えた課題	69
第三章 新しい国際交流会のデザイン	
3.1 語学教育の重要性—日仏の比較—	84
3.2 横浜市鶴見区、各ステークホルダーの要求	86
3.3 既存の交流会の分析	91
3.4 交流会参加のインセンティブについて	95
3.5 地域ふれあいクイズ大会の提案	98
第四章 小規模社会実験と実験結果	
4.1 企画立案フェーズ—プロトタイプ作成—	105
4.2 企画立案フェーズ—広告・連絡—	108
4.3 企画立案フェーズ—資料作成—	115
4.4 企画立案フェーズ—会場・機器準備—	115
4.5 実施と分析 評価フェーズ—「地域ふれあいクイズ大会」実施—	116
4.6 小規模社会実験（交流会実施）の考察	124
4.7 実施と分析評価フェーズ—妥当性評価（有識者レビュー）—	126
結論	160
参考文献	162

序論

広辞苑によれば、「移民」とは、「他郷に移り住むこと。特に、労働に従事する目的で海外に移住すること」と示されている。一方、Webster Dictionary には *Immigrant: A person who comes to a country to take up permanent residence.* とあり、国際的な共通語での *Immigrant*、「移民」とは永久にその土地に住む人たちのことを指す。日本では、外国人が永住を目的として入国することが法律上で認められていないゆえ、「移民」が存在しないことになっている。

しかし、『「移民列島」ニッポン』で指摘されているように実態は異なる。すでに日本には 200 万人の外国人が住んでいる。単純労働者の入国は認めていないが、「留学生」、「研修生」、「定住者」などの身分で外国人を受け入れ、すでに一部の地方や一部の産業では彼らの労働力なしに存続し得なくなっている。特に 1990 年の入管法改正に伴い、「定住者」として「日系とその配偶者」に限り、入国を認めた南米系外国人は単純労働に従事し、自動車産業や電器産業長い間、支えてきた。出稼ぎとは広辞苑によれば「故郷を離れて一定の期間他郷に出向いて働くこと」であるが、受け入れてしまった「移民」の定住化は進んでいる。¹ 少子高齢化に向かう日本が、この問題にいかにして立ち向かっていくかという議論がされて久しい。厚生労働省の推計によれば日本の人口は 2060 年には 9 千万人を切る。

本研究では、グローバル化が進行し、国際的な人の流れがかつてないほど盛んになっている時代においていかに移民問題と向き合っていくべきかを取り上げていきたい。日本の人口減少が目に見える中でも治安維持の観点から移民を受け入れるべきではないという議論もある。しかしながら、すでに 200 万人の外国人を受け入れ、一部の地域は外国人集住地となり、共存の在り方が問われている。また、ジャック・アタリ氏は将来的に「優秀な外国人の争奪戦となるだろう」とし、優秀な外国人を日本に引きつけることが重要であると主張している。²

「日本では『移民』という言葉を使わないことを知っていますか？」横浜市国際交流協会 (YOKE) へインタビューをお願いするため電話をした時に言われた一言である。筆者はかねてより、フランス移民について研究していたため「移民」と言う言葉をほとんど意識しないで使っていた。行政は「移民」という言葉を使うことに対して非常に慎重である。そして、世論は「移民」を受け入れることに対し、保守的な姿勢を崩さない。

本研究の第一章ではすでに数百年と移民の受け入れを行っている西洋諸国の移民受け入れについてみていきたい。フランスで行った現地調査の結果をふまえながら日本が移民問題に対してどう立ち向かっていくべきかを考えていきたい。第二章は、日本で「移民」が

¹ 公益財団法人 宮崎県国際交流協会の K・T 氏の談話：「過疎化が進む地方では、労働力として、主に中国からの研修生を 3 年という期限付きのビザで受け入れている。彼らは日本人の働き手がほとんどいない食品加工工場などで働く場合が多く、海外研修生を受け入れなければもはや産業が成立しない」

² 毎日新聞 2012 年 7 月 1 日

増えると何が起こり得るかを考える外国人集住地区である横浜市鶴見区の実態を特に南米系外国人移住者に対象をあて調査した。第三章は四章で明らかにし外国人移住者と共生できていない状況を緩和し、多文化共生を進める一つの手段として、「国際交流会」を実施し、その結果について考察する。

海外においては、綿密なインタビューや現地調査に基づき、移民像を明らかにしていく研究は数多くされてきた。ミリュエル・ジョリヴェの『移民と現代フランス』(2003)はマグレブ系移民やサンパピエ(不法移民)などへのインタビューからフランスの郊外問題を浮かび上がらせ、内藤正典の『ヨーロッパとイスラーム』(2004)はドイツ、オランダ、フランスで筆者が行った綿密な現地調査をもとにヨーロッパ社会におけるムスリムの人々の姿を浮かび上がらせ、対立する文化の共存は可能であるかを問いかける。一方、日本においても数多くの出版がなされ、特に最近では、藤巻秀樹の『「移民列島」ニッポン』(2012)は500人を超えるインタビューと住み込み取材を通し、裏口から受け入れる移民の生活を明らかにした。南米系移住者の実態については、梶田孝道、丹野清人、樋口直人の『顔の見えない定住化』(2005)に詳しい。南米系外国人移住者(特に日系ブラジル人)の入国経緯と彼らの定住化が進んでいる様子を海外の移民研究で用いられる移民理論とデータから冷静に分析している。しかし、2008年のリーマンショック以降、南米系外国人移住者の置かれる状況は一変した。このような中で外国人移住者を単なる労働力として扱うのではなく、共生していかなければならないという議論がされるようになった。東京外国語大学多言語多文化教育センターで行われている取り組みはその典型的な例である。多文化共生を進めるための全国フォーラムが年に一回開催され、社会学者や言語学者だけではなく、日本各地の行政、国際交流協会で働き、最前線で外国人移住者と接する人たちが、原稿を寄稿し、現場の生の声を伝える。東京外国語大学多言語多文化教育センターで発行される「シリーズ多言語多文化協働実践研究」では、多文化共生のための実践から日本全国各地の外国人移住者の実情が見えてくる。

人の流れの全体を捉え、かつインタビューを通じて現地の問題を厳密に把握する「木も見て森も見る、森も見て木も見る」視点が移民研究に非常に必要であると思われる。問題分析を綿密に行っていくだけではなく、受け入れた移民といかに共存していくか具体的なソリューションをシステムデザイン・マネジメントの手法を用い提示していくことを本研究で目指したい。

第一章 西欧諸国における「移民」の受け入れ状況と課題

1.1 フランスにおける「移民」受け入れ状況と課題——一元主義の国、フランス——

フランスは、第二次世界大戦後の高度経済成長を受けて、労働力が不足した。とりわけ1960年代以降に、欧州隣国からの移民に加えて、旧植民地諸国であるマグレブ三国（モロッコ、チュニジア、アルジェリア）などとも二国間協定を結び、大量に外国人労働力を受け入れてきた。その結果、1975年には約389万人、総人口比7.4%に達した。

過去150年にわたり、移民を受け入れ、とりわけ、1945年以降、かつてないほどの大量の労働力を受け入れてきたフランスの移民政策へのスタンスは一貫して一元主義と言われるものである。一元主義とは、フランス革命によって作りあげられた共和国建国理念「自由・平等・友愛」への共感、ならびにフランス語理解を徹底することによって人々を一つに束ねて社会を形成しようという考え方である。理論上は出身、文化、宗教の違いに関わらず、共和国との間に「契約」を結び、フランス国民となった人であれば、移民でも平等の権利を得ることができる。しかし、実際は、依然として移民と非移民の間に社会格差・経済格差・教育格差が残っている。経済的に上昇しようとしても就職や社会参加の際に差別や偏見などあらゆる見えない困難に立ちふさがれ、貧しいままである移民が多く存在する。このような差別はフランス共和国の理念上では起こりえない。フランスの社会問題ではなく、差別的な思想を抱く個人の問題に帰され、社会問題として取り扱われにくい。（内藤2004 p.130.）しかし、低所得者や失業者として、貧しいままに留まる移民が集住する郊外問題や暴動問題はもはや無視できないフランスの大きな社会問題として浮かび上がっている。

フランスは国が主体となって、フランス移民の社会的統合を推し進めてきたが、現在多く移民問題を抱えている。なぜフランス人は移民に対して、ある種の偏見を抱き、移民はフランス社会になじむことができないのか。日本とフランスの外国人政策で最も異なることは、「移民」という存在を認めていない日本が、移民政策を打ち出せないのに対し、フランスは国が大きな決定権と責任を持って移民政策を行ってきたことであるとを感じる。また、共通していることは、様々な社会問題に取り組む地域に根ざしたアソシアシオン

（association:協会の意味。日本で言えばNPOに相当する。）が存在しているということである。アソシアシオンやNPO団体は、国・自治体と協力関係にあり、国家では手の届かない外国人の社会統合問題にコミットする役割が期待されている。「自由・平等・友愛」という理想を掲げながらも、フランスでは多くの移民問題が露呈している。しかしながら、長い移民受け入れの歴史の中でフランスが蓄積してきた経験や先進的な政策から学ぶことは意義のあることであるとを感じる。筆者はフランスで行った現地調査やインタビューをもとに日本がフランスから学ぶべきものは何かをこの章で考察していきたい。表1は過去2年

間で筆者が取り組んだフランスとフランスに多く移民を輩出しているチュニジアでの調査の一覧である。

表1 フランスおよびチュニジアでの現地調査

日程	場所	インタビュー	内容
2011年11月4日	トゥールーズ	K氏(移民が20%と言われるパリの中でも最も移民が多い18区に10年間在住)	移民コミュニティとコミュニティ間での争いについて
2011年12月20日～12月23日	チュニジア、CSMチュニジア支店	CSM社員11名	フランス・移民に対する意識調査アンケートおよびインタビュー
2012年1月5日～1月9日	トゥールーズ	フランス人8名	マグレブ系移民に対する意識調査アンケート
2012年1月20日	トゥールーズ	モロッコ人L・インドネシア人I(外国人留学生)	意識調査アンケートおよびインタビュー
2013年10月12日	トゥールーズ	トゥールーズ・ミディピレネー日仏協会(アソシアシオン) 代表 Vincent, スタッフ Moulard	
2013年10月26日	グルノーブル	Maison de l'international(グルノーブル市国際関係部) 職員 Pia Ricard氏	
2013年10月26日	グルノーブル	Confederation Syndicale des Famille (CSF) 職員 Abdeslam Boumaza氏	移民の住居支援を行う協会。

1.2 フィールドワーカー—移民受け入れ国、フランス・移民排出国、チュニジアにて

フランス全土には約 493 万人の「移民」がいる。この数値は外国生まれの外国人（約 296 万人）と外国生まれのフランス国籍取得のフランス人（約 197 万人）を合わせた数字である。また、外国人総数はフランス生まれの外国人約 55 万人と外国生まれの外国人を合わせた約 296 万人の約 351 万人である。ⁱ 生まれながらにしてフランス国籍者は 5,516 万人であるため人口の約 8.1%が移民である。日本における外国人移住者が全人口に占める割合は 1.74%ⁱⁱであり、フランス社会において移民の存在は大きい。移民の中でも最もフランス社会に同化できていない移民は北アフリカのマグレブ三国（チュニジア、モロッコ、アルジェリア）出身の移民であるとされている。これらの国はフランスの旧植民地であり、長きにわたりフランスの植民地支配を受けた。特に 1954 年から 1962 年のアルジェリア独立戦争で 100 万人におよぶ戦死者を出すなど、両国の間には歴史的な確執がある。アラビア語を公用語とするイスラム教徒の国であるが、フランス語を第二外国語とし、マグレブ三国のほぼ全土でフランス語が通じる。マグレブ系の移民はフランス全土に約 53 万人存在する。図 1 は 1993 年に取られた「各移民に対して何%のフランス人が敵意を持つか」というアンケート調査の結果である。ⁱⁱⁱ ジプシーの名で知られているロマと同様、36%、41%という高い数値を示しているのはマグレブ人とマグレブ系 2 世であった。

INSEE (L' Institut National de la Statistique et des Études Économiques;フランス国立統計経済研究所) の国税調査によればマグレブ系移民の貧困者は 27.3%であり、その数値はヨーロッパ系移民の 3 倍以上に跳ね上がっている。失業率に至ってはマグレブ系移民とヨーロッパ系の移民の間で 4 倍以上の差がある。(宮島、2009、p.54.)

筆者はマグレブ系移民が貧困や暴動の温床になっている郊外に集住し、フランス社会に同化できない理由についてするために、フランスとチュニジアで計 19 人にインタビューを中心としたアンケート調査を行った。(APPENDIX 1,2)



図 1 「各移民に対して何%のフランス人が敵意を持つか」(ドット、1999)を参照に筆者が作成。なお、マグレブ(英語)とマグレブ(フランス語)は同意語である。

a. フランスでの意識調査インタビュー

2012年1月、留学先のトゥールーズで4日間にわたり、Toulouse mid-Pyrenees Japon association（日仏交流協会）に集まったフランス人8人を対象にアンケート調査を行った。「フランス人はマグレブ系移民がとにかく大嫌い。文化が違うから？宗教が違うから？旧植民地だったから？違う。それは犯罪に関わっている人が多いから。」アンケートの「マグレブ」という言葉を見た時、大学で言語学を学ぶ20代のフランス人大学生はそういった。「僕は日本人もほかのアジア人も好きだし、移民には反対ではないけれど、マグレブ系移民はすぐ問題を起こす。だから、マグレブ系移民ともほとんど交流がない。」調査でチュニジアに行くと話すと「本当に危ない国だから気を付けて」マグレブ系移民に対して抱いている感情は複雑だった。

アンケート結果をみるとマグレブ系に対する差別の要因として一番多く挙げていたのは「宗教・文化」であった。次は「交流のなさ」である。（APPENDIX 1問7）

40代会社員のフランス人は「マグレブ系移民の問題は数と宗教に集約される。まず、マグレブ系移民はアフリカ系やアジア系と比較して人数が多い。中東戦争やイスラム教が絡むテロが起こるたびにフランス国内にいるアラブ人に対する反発感も強くなる。もちろん、全員が悪い人ではないのだけれど。」

フランスは「もはやアラブの国」という20代の会社員のフランス人も「マグレブ系移民はフランス文化を受け入れようとしな。フランス語を話さない。だから、同化が進まない。」「フランス人はもはやキリスト教に拘っていない。マグレブ系移民が同化できない理由を単なるキリスト教とイスラム教の宗教的な対立では説明できない。だだ、イスラム過激派のテロの影響でムスリムに対するイメージが悪くなる一方なのは確か。」彼女の家系を4代前まで遡ると北アフリカに行きつくと言っていた。それでも、マグレブ系移民にいいイメージを持っていない。

フランス人がマグレブ系移民に対して主に指摘していたことは主に以下の通りであった。

- ・フランス文化と言葉への関心のなさ
- ・フランス文化を受け入れてほしい
- ・犯罪に関わっている
- ・現地で雇用を増やす

「マグレブ系移民もフランス人と同等の教育を受け、仕事もするべきだ」と答えたフランス人は8人中8人であった。インタビューを通して、フランス人の多くはフランスと同化しようとする移民に関しては受け入れ、教育や雇用の恩恵もフランス人と平等に受けるべきであると考えているようである。

b. チュニジアでの意識調査インタビュー

フランスで生活している中で、フランス人がマグレブ系に対して抱く特殊な感情を少しずつ理解できた。一方、マグレブ系はフランス人にどのような印象を持っているのだろうか。2011年12月20日～12月23日、知り合いをたどってチュニジアに赴いた。

知り合いのチュニジア人はCSMという菓子原料を扱うインターナショナル企業のチュニジア支社のCEOを勤めている人物であり、彼の全面的な協力の下、CSMで働く20代から30代の社員11名にアンケートに答えてもらいながらインタビューをすることになった。

先に断わりをいれておくが、彼らはホワイトカラーであり、フランスに移住する可能性は低い。しかし、チュニジアからフランスに移住する人は依然と多く、歴史的にも経済的にも両国の関係は深い。チュニジア人がフランス人に持っている印象を知ることでフランスの移民問題を多角的に捉えることができるだろうと考えアンケートを行った。

(APPENDIX2はアンケート結果である。)

フランス人に対するイメージを聞いてみると4人がポジティブ、4人がネガティブ、2人がニュートラルであった。あくまでも予想だが、ブルーカラーであればもっとネガティブが増えるのではないかと思う。「フランス人はレイシストである」という言葉が幾度となく聞かれた。経済活動のことを考えるとフランスとは良きパートナーでありたいが、歴史的な確執や宗教的な対立があり、フランス人に対する感情は非常に複雑である。

フランス人がマグレブ系移民に差別や偏見を持っている理由としてチュニジア人が考えているものはフランス人用のアンケートと同様「文化・宗教」が最も多く挙げられた。「ムスリムに対する偏見を持っている」「フランス人にとってムスリムといっしょにいることは難しい」という声が聞こえた。次点は「就いている職業」であった。

チュニジア人の30代男性は「フランスに移住した友人を何人か知っている。同化できる人たちは留学生であったり、知的階級であったりする。普通の労働者がフランス社会になじむことは非常に難しい。」という。なぜ労働者はフランス社会に同化できないのかを尋ねると「フランス人はレイシストであるから」と答えた。

先に述べたようにフランス人の友人の一人から「チュニジアは本当に危ないところ」とさんざん言われていた。チュニジアに到着するまで本当にインタビューをすることができるか不安であったが、知り合いのチュニジア人(名前はHussanという)は「遠い国から、チュニジアに興味を持ってやってきた日本人」に非常に親切に対応してくれた。初日はHussanの妹とその恋人と友人と高級イタリア料理店で食事をした。翌日は膨大な敷地の中に佇むHussanの家で夕食をごちそうになった。食生活や家の作りがフランスと変わらないことに驚いた。郊外に行くにつれチャドルを身につけた女性が多くなる印象を受けたが、会社のオフィスの作りも会社で働く人の服装も日本や欧米諸国と似ていた。3日間という短い滞在でこの国に対するイメージが180℃変わった。筆者が話をしたチュニジア人は一握りの限られた人だと思ふ。しかしながら、筆者にとって「ハンニバル」と「サハラ砂

漠」と「アラブの春」のイメージしかなかったチュニジアは危ない国ではなく、太陽と湖に囲まれた美しい国であった。これは実際にチュニジアに行き、チュニジア人と話してみなければわからないことであった。

フランス人は移民であっても共和国の原則上、平等に扱おうと主張する。一方でチュニジア人はフランス人が差別をしていると主張している。差別の原因は単に文化・宗教の問題だけではなく、様々な要因が複合しているといえる。同化できないから差別されるのか、差別されるから同化できないのか、その答えは出ない。

フランスで筆者と同じ大学院に通っていたモロッコ人はフランスで仕事を探していたが、結局見つからなかった。「フランス社会で仕事を見つけるのは自分の主義(Principle)を捨てなければいけない。宗教的な差別は存在すると思う」と語っていた。同じく同級生であった中国系インドネシア人の学生も「非常にフランス社会に溶け込むことができる人と全く溶け込むことができない人がいる」フランス政府に望むことを聞いてみると「ナチ的な考えからの脱却すること」「確かにハンガリー系移民のサルコジは大統領になった。でも、非白人が政治の世界に出てくるのはまだ時間がかかると思う。」と語っていた。彼はパリでインターンシップ生として働いた後、「フランスはあまり好きではなかった」と言い残し、1年後、ノルウェーに移住した。

両国で行ったアンケートとインタビューから見てきたことは、「フランス社会において、同化できる移民とそうではない移民がいる。同化できた移民はフランス人と交流を持つが、同化できなかった移民は社会から疎外され、フランス人とほとんど交流を持たない」ということである。フランスでとったアンケートでもチュニジア人でとったアンケートでも半分以上が交流の必要性を感じている。

c. Toulouse mid-Pyrenees Japon association (日仏交流協会) 代表者へのインタビュー

筆者は Toulouse に留学中、日仏交流協会に参加することでフランス人と交流していた。知り合いができたことはもちろんのこと生活に必要な情報を得ることができ、フランスの生活に早くなじめることができた。民間レベルで行えるこのような交流会は、国を越えた語学・文化の交流を生み出し、外国人がその地になじむために非常に役に立つと実感した。日仏交流協会の代表を務める Vincent へのインタビューを通して、国際交流会について考えていきたい。

日仏交流協会はトゥールーズ市の中心地の狭い路地に面した建物の1室(3室中、1室は物置、2室を教室として使っている。収容人数は約30人)を借り、週2回、フランス人向けの日本語教室を開いている。また、フランス人の多くが仕事を早めに切り上げる毎週金

曜日夜 19:00 から soiree (夜の集い) と称して、主に日本人と日本語教室の生徒・日本に興味のあるフランス人が集まる。東日本大震災で苦しむ日本に鶴を折ろうという企画やフランスの郷土料理ラクレットを食べる企画やおにぎりを作るなど、テーマが決まっていることもあるが、何をするかは具体的に決まっていなかったりする場合の方が多い。お菓子や飲み物を飲みながらざっくばらんに話し、20 時半くらいから近くのレストランに食事をする。食事の後、バーなどでワインを飲むこともある。

参加者は日本に興味があるフランス人が多く、日本人の参加が少ないこともある。日本人留学生が多いトゥールーズ第二大学 (ミライユ大学) に通う大学生に来てほしいと Vincent は言うが、ミライユ大学にはミライユ大学の交流会があり、人を集めるのは大変である。しかし、特定の人に限らず、誰でも気軽に参加できる交流会を目指している。日本にあまり興味がなかったけど、友人に誘われて来て、日本人と交流ができて楽しかったという人もいる。まだフランスに来て間もない日本人がフランス人と知り合いになる機会にもなっている。

Vincent によれば、日仏協会は移民問題に対してはコミットしない。「日本人の移民は非常に数が少ない。働きに来ているマグレブ系や中国系と次元が全く違う。フランス社会でうまく同化できない移民は、コミュニティの中に入り、同じエスニシティの人たちだけで交流する移民である。そういう人たちはフランス社会にあまりなじむことはできないし、言葉もうまくなならない。そのコミュニティの中にフランス人は入っていくことはできない。そして、貧しい国から来ている移民は文化が違いすぎるのでフランス社会に溶け込むことは非常に難しい。」

「フランスの移民問題の二大問題は『マグレブ』と『ロマ』である。アフリカ系黒人の差別はかつて問題視されていたが、現在、法律上平等になっている。マグレブ系移民の問題は宗教的な要素が大きい。そして、数が多い。」と Vincent は言い切る。最後に日仏協会のような association が交流を促進し、移民と共存を促すことに役に立つかを聞いてみた。「日仏協会のようなアソシアシオンは、国の支援金が入らないので活動は小規模である。そして、なかなかその効果を計ることはできない。フランス全土で活動を広げるのは不可能でも地元の人々と外国人の交流を促進していくことに、非常に役に立つ日々の活動を通して感じる。」

d. グルノーブル市 Confederation Syndicale des Famille (CSF) 職員 Abdeslam Boumaza 氏

フランス移民になるためには、CAI (受入統合契約) を受ける義務がある。CAI はフランス国民としてフランス共和国の原則を学び、必要最低限のフランス語を身につけさせるためのプログラムであり、2007 年より導入された。フランス南東部の都市、グルノーブル市では、CAI (受入統合契約) に先駆け、地元のアソシアシオンが中心となって移民のための

フランス語教室を行っていた。法律上、移民が存在していないことになっている日本では CAI のような枠組みが存在しておらず、外国人が日本語を勉強するための日本語教室は地元の NPO や協会に任せている。(このことについては次章で説明する。) これらは市からの委託を受けていることが多く、グルノーブル市のアソシアシオンと日本語教室は非常によく似ていると感じ、グルノーブル市へインタビューすることを決意した。iv

グルノーブル市役所の隣の建物にある Maison de l' international(グルノーブル市国際関係部)で働く Pia 氏にインタビューしたところ Maison de l'international の活動は以下のとおりである。

- ・国際交流・国際理解の促進 (姉妹都市協定、留学資料提供)
- ・姉妹都市の講演会
- ・グルノーブル市内、全てのアソシアシオンをデータベース化
- ・Maison de l'international へ来た人にアソシアシオンを紹介
- ・移民へのフランス語講座の紹介

Pia 氏は市の職員であり、移民問題については現場を知っている訳ではないので、お話しできることは少ないとのことであった。マグレブ系移民について研究しているのであれば、特定の移民問題にコミットするグルノーブル市のアソシアシオンと話をした方がいいとアドバイスを受けた。事前アポイントはなかったが、CSF というアソシアシオンの代表者に直接会いに行き、インタビューの時間をもらえることになった。

代表の Boumaza 氏によれば CSF は移民の住居問題 (外国人入居拒否の差別の撤廃や移民街の居住環境の改善) に取り組むアソシアシオンである。グルノーブル市の中心街を歩いていて、移民が特別多いとは感じなかったが、グルノーブル駅北側は住民の 50%以上が移民で構成される移民街なのだそうだ。Boumaza 氏自身も 30 年前にアルジェリアから移住してきた移民であった。

Communautarism (共同体主義) という言葉がフランス語にあり、それが社会問題になっている事を教えてくれた。「フランス社会はフランス人として運命共同体となった人たちとそうでない孤立し人たちとで分かれる。後者は周辺に追いやられてしまう。経済格差や文化の違いもあるけれどフランス社会で Communautarism の考え方が充満していることで、スラム街化した移民街が生まれるのだと思う。」

フランスでマグレブ系移民が同化できない理由は、フランスのマスメディアに責任がある。「フランス人はアラブ人をすぐに犯罪と結びつけたがる。アラブ系移民が犯罪や暴動を起こすとそれは全面的に報道する。その一方、アラブ人の医師はたくさん存在するが、そういう人を全くメディアに出さない。政府関係者は白人ばかりであり、メディアに白人しか出さない。」

「フランス共和国の理念は『自由・平等・友愛』であるが、全く平等ではない。『自由』ではあるかもしれないが、非常に多くの失業者を抱えている。失業問題を解決するためには、誰もが職を得られる『平等』が必要とされている。」と移民問題の本質を説く。

最後にフランス人と社会の周辺に追いやられている移民が交流することは必要かどうかを聞いてみた。「失業しているとお金がないのでどうしても人との付き合いは憚られる。心の余裕もなくなる。」第一に改善すべき問題は失業問題であると言ったうえで「交流は根本的な問題を解決する特効薬ではないと思う。しかし、フランス人と移民が *Communitarism* の殻を打ち破り、少しずつ和解に向けて交流していくことは必要であると思う。」と意見を述べてくれた。

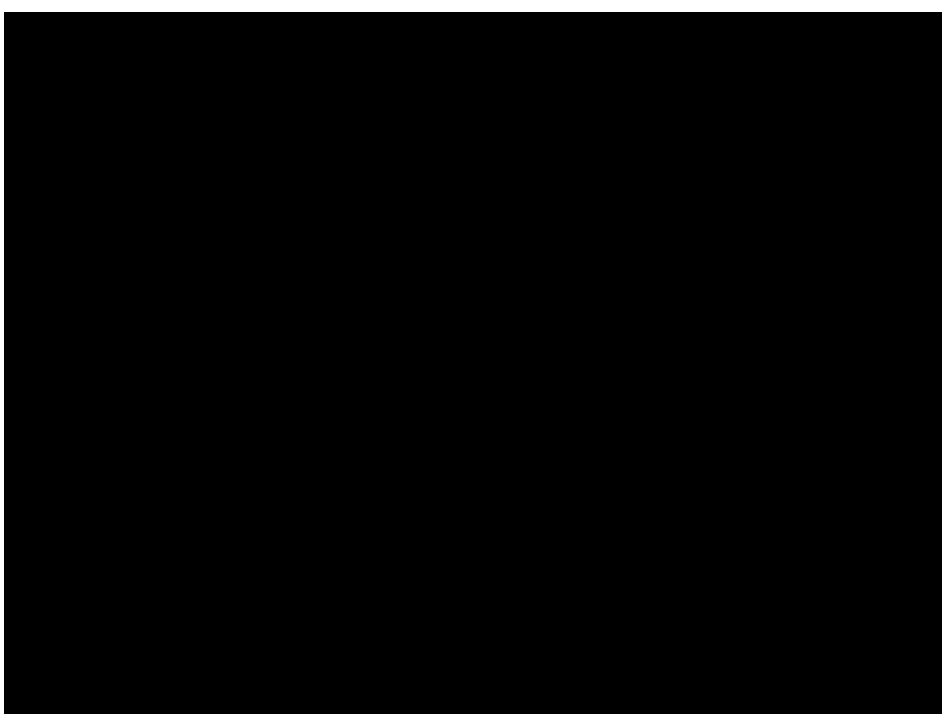


写真1 研究に協力してくれたチュニジア人の家族（筆者撮影）

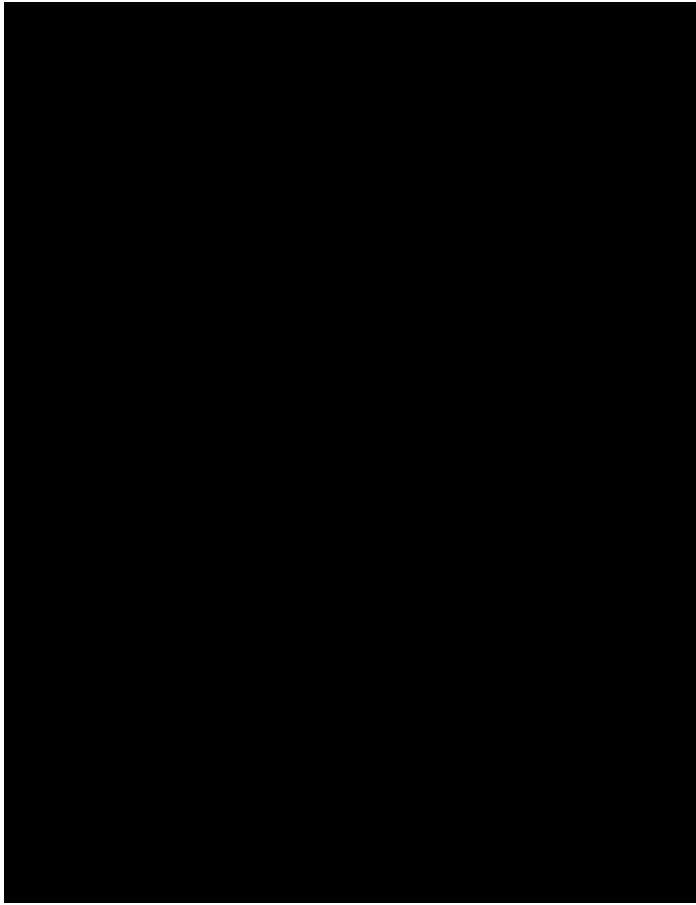


写真2 日仏交流協会の代表者へインタビュー（筆者撮影）



写真3 グルノーブル市 Maison de l'international（筆者撮影）



写真4 Maison de l'interational のオフィス 海外にまつわる様々な資料を閲覧できる
(筆者撮影)

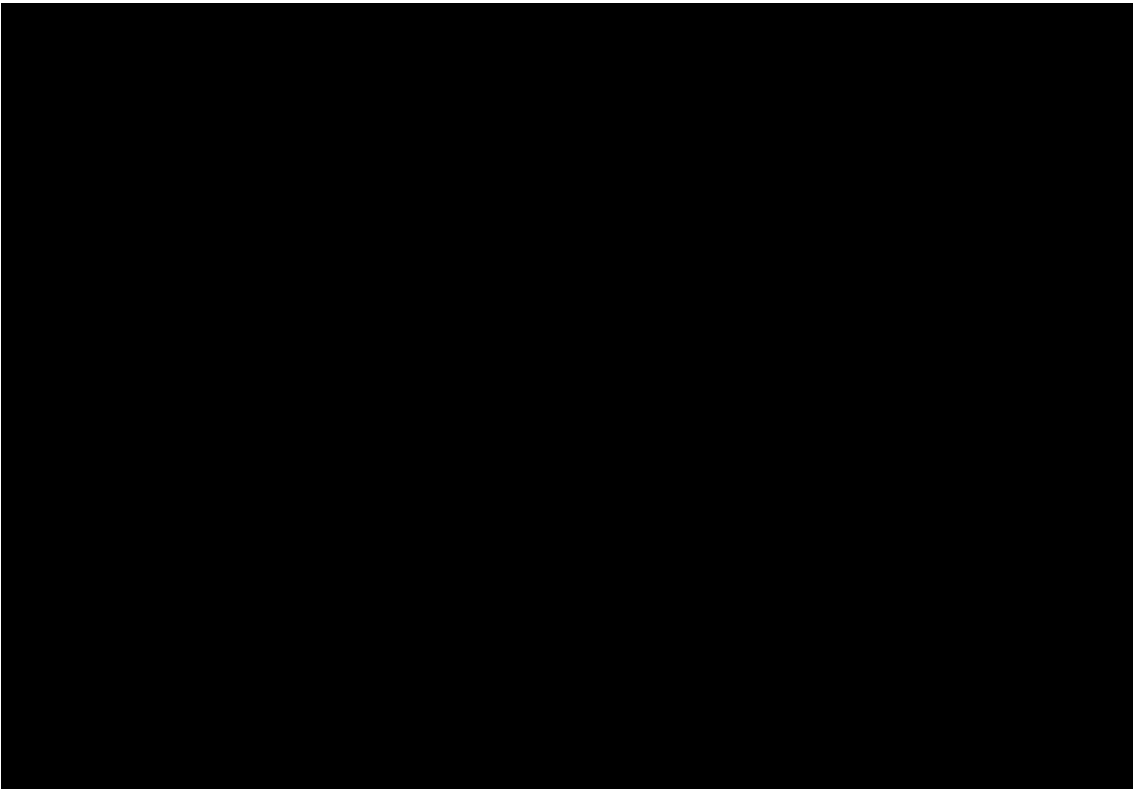


写真5 Maison de l'interational の代表者へのインタビュー (筆者撮影)

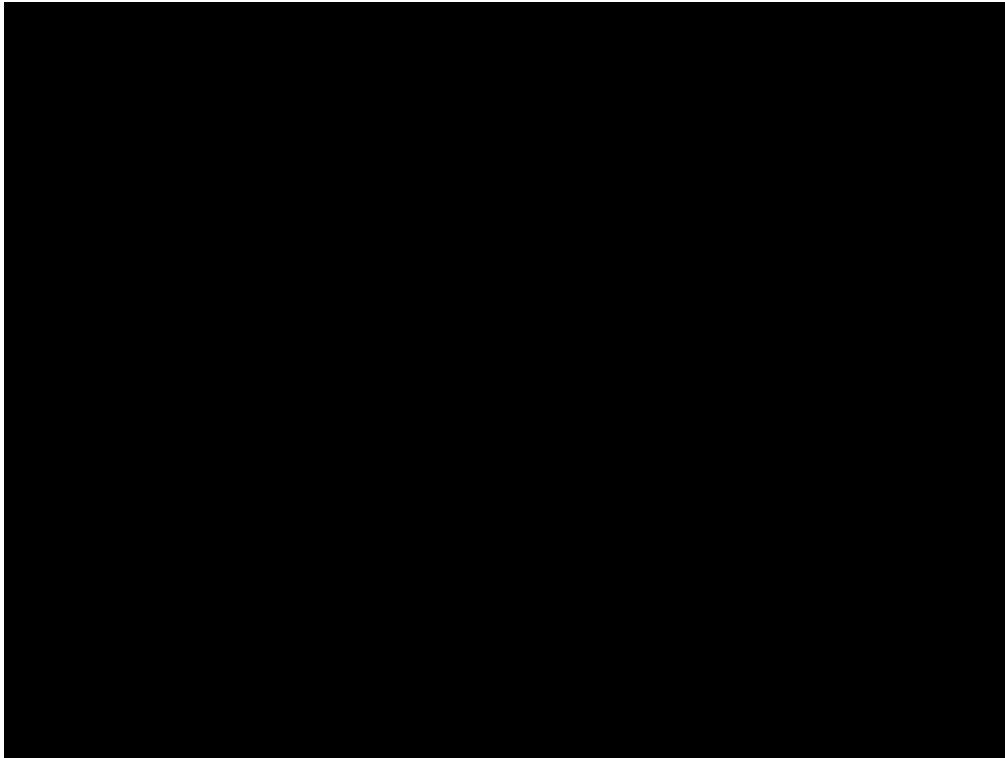


写真6 CSF 代表者へのインタビュー（筆者撮影）

1.3 他のヨーロッパ諸国との比較—多文化主義のオランダ—

フランスの移民政策は一元化主義であり、フランス市民全般も「フランス文化に従順である移民以外は受け入れたくない」というスタンスで一貫しているということがフランス人へのインタビューを通して伝わってきた。それと対局しているのが、イギリス、オランダ、ドイツなどの国が取っている多文化主義である。オランダを例に挙げ、多文化主義を概観していきたい。

日本の九州とほぼ同面積であり、人口約 1632 万オランダは、建国以来、思想・信条を理由として迫害された人々を受け入れることで繁栄してきたという歴史を持つ。その背景から、移民 3 世へのオランダの国籍付与、外国籍のままでも地方参政権を承認するなど、他国と比べて移民に対して「寛大」な権利を保障しているが、相互理解に基づく多文化共生を保障しているわけではない。対立やトラブルの原因になる異質な文化に真剣に向き合うのではなく、文化的な統合を排除し、異なった文化が柱のように存在する多元主義の国である。日本の総務省がその政策を打ち出し、地域社会で近年使われるようになった日本の「多文化共生」とは一線を画する。v文化的な統合を排除した「見ざる、言わざる、聞かざるに徹するルールを作り上げたと言ってもよい。」「オランダにおいてムスリムは、確かに、カ

トリックやプロテスタントと同じ形状化の権利を持った。だからといって、ムスリムが好かれているわけでもなければ、イスラームが理解されていないし、ムスリムは好かれていない」「オランダ人は見ざる、言わざる、聞かざるに基づくルールをつくりだしたと言ってもよい。そのルールを制度化するもとなったのが多文化主義である。」(内藤、2004 p.100)

筆者はオランダのデルフト工科大学の交換留学生として、デルフト市内で3か月生活した経験を持つ。フランスと決定的に違うと感じたのは、この多文化主義である。半年間、留学生として生活していたフランスのトゥールーズ市では、県庁や保健所に英語が話せる職員がおらず、電車・バスのアナウンスなどがすべてフランス語で書かれ、フランス語能力が低いと生活に支障をきたすのではないかと思う。

一方、オランダでは、国民のほとんどの人が英語を話すと言われ、ありとあらゆる生活に必要な書類が英語で書かれていた。自国の言語や文化あるいは価値観を他国から来た人に押し付けようとする姿勢がオランダ人には全くないと筆者は感じた。大学の授業や教科書は留学生のために英語で行われ、オランダ能力の有無を問われない。

約1億2,900万人の話者がいるフランス語と約2,100万人しか話者がいないオランダ語をそもそも比較することは不可能であるが、筆者は3か月の間にオランダ語の基礎を覚ようと意気込んでいたが、結局、オランダ語を話す機会はなく、習得できずに留学を終えてしまった。言葉や文化の違いによるトラブルは起きなかった。数カ月の滞在で多くのことは言えないが、少なくともフランスのような「共和国の原理を受け入れない移民は移民ではない」という考え方は存在しない。

ただし、オランダ政府は増加する移民に対して全く政策を取っていないわけではなく、移民に対してオランダ語講習、社会科講習、職業に関する一般講習の3つからなる「市民講習」を義務化し、オランダ移民になるために必要最低限の義務を課している。^{vi}

1.4 一元化主義・多文化主義の限界—“受け入れたくない移民”をどう対処するか—

近年、ドイツでは移民のドイツ語能力の低さは、多文化主義による「統合の失敗」としてメディアによって報じられ、政府に対する移民政策に不信感が募っている。2006年、メルケル首相は「多文化主義は完全に失敗であった」と述べている。(小林、2009 p.125)オランダ、ドイツ、イギリスをはじめとした国々は移民の社会統合の理念として、多文化主義を採用してきた。異なる言語、文化、価値観を寛容に受け入れる多文化主義は、グローバル時代に即した考え方のように思える。しかし、「平和国家」として移民受け入れに寛容な多文化主義を推進してきたノルウェーの連続テロ事件(2011年)や同じく多文化主義を採用するイギリスで起きたロンドン同時多発テロ事件(2005年)などからわかるよう同化できず社会の周辺として押しやられた移民が引き起こす問題が世界を震撼させている。

フランスでほとんどの書類がフランス語で書かれている理由についてフランス人の友人に聞いたことがある。その友人によれば「そうしなければフランスに大量に流入している

『移民』がフランス語を覚えられないから」フランス語で書かれているそうだ。フランスでロボット工学の分野にて博士号を取った彼は、日本の茨城県つくば市に半年間、滞在したことがあった。「フランスと比較して圧倒的に外国人が少ない東京で、ありとあらゆるものに英語のキャプションがあり驚いた」「それは日本語ができない自分にとっては非常に有難かったが、日本に住む外国人は日本語を覚えようとししないのではないか」と言われ、その私的に色々と考えさせられた。

フランスでは、ありとあらゆる機会において必要とされるフランス語を覚えざるを得ない環境であり、言語政策は一定の成功を収めている。しかし、フランスの一元化主義に基づく移民政策も郊外問題が深刻さを増すにつれ、理想的なモデルと言えないことが濃厚である。

ヨーロッパ諸国の移民政策の失敗から学べることは何であろうか。一元化主義、多文化主義に代わる第三の道として多文化共生が考えられるのではないかと思う。この多文化共生を促進していくためには、外国人コミュニティと元々の居住者コミュニティの間での「交流」が必要となる。次章で日本が置かれている移民事情についてみていきたい。

APPENDIX 1

アンケート 2012年1月実施 トゥールーズで実施

(フランス人用)

※アンケートはフランス語で行いました。(フランス語版は APPENDIX 3 へ)

このアンケートで知りたいこと

- ① マグレブ系に対する偏見の原因はどこにあるのか
- ② 既存のアンケート (マグレブ系移民に行った) 結果で、マグレブ系移民の感じている差別感の原因は「出身」が 80%以上とあったが、それは何を示しているのか。その要素は何か
- ③ フランス人はマグレブ系移民とほかの移民に対して抱く感情は違うのか
- ④ どうすればマグレブ系移民はフランス社会に受け入れるのか
- ⑤ フランスは政治界・経済界ともにグランゼコール出身者を大多数とした超エリートが大きな影響を持つ社会であるが、今後、移民 (特に文化も宗教も違うマグレブ系) がエリート階級に台頭する可能性はあるのか。また、フランス人にとってそれは許容できるのか

年齢・性別・日付

(移民全般に対する質問)

問 1 あなたはフランス人ですか

1. はい (問 2 へ) 2. いいえ

問 2 率直にあなたは移民受け入れに賛成ですか? 反対ですか?

1. 賛成 (問 9 へ) 2. 反対 (問 3 へ)

問 3 反対する理由に近いもの

1. 違う文化を受け入れることは難しい 2. 雇用を奪うから 3. フランス特有の文化が失われるから 4. (移民の) 政治的な影響が強くなるから 5. 治安が悪化するから 6. フランス人の税金をもとに賄われる福祉制度の恩恵をうけているから 7. その他

問4 特に受け入れたくない移民は？（複数回答）

- 1.アジア系
- 2.マグレブ系
- 3.アフリカ系
- 4.東欧（ハンガリーなどのキリスト教圏に限る）
- 5.東欧（トルコ（イスラム圏）を含めた東欧全体）南欧（スペイン・イタリア・ポルトガル）
- 6.その他

問5 あなたは移民がフランス社会に同化するために移民が自国の文化を捨てることを望みますか

問6 移民もフランス人と同様の教育を受け、同等の職を得るべきだ

- 1.はい
- 2.いいえ

（理由

）

（マグレブ系移民に対する質問）

問7 残念なことに、フランス社会ではマグレブ系移民に対する偏見がいまだに残っているといわれていますが、もし、差別感があるとしたらその原因と思われるものは？（複数回答）

- 1.見た目
- 2.言語
- 3.宗教・文化的違い
- 4.旧植民地（といった経済的な格差）
- 5.低賃金の仕事についている
- 6.その他（ ）

問8 移民政策についてフランス政府に期待することは？

問9 マグレブ系移民に期待すること

問10 マグレブ系以外の移民に期待すること

問 11 グランゼコールに移民の割合が少ないと言われている。移民層がエリート層に食い込むことはここ数十年であり得ると思うか。(学歴の差は埋まると思うか)

1.あり得る 2.あり得ない

理由 ()

問 12 サルコジ大統領はハンガリー系移民の二世であるが、将来、マグレブ系の大統領が登場する可能性はあると思うか。

1.あり得る 2.あり得ない

問 13 マグレブ系移民との交流は多いと思いますか。(それはどんな交流ですか) また、交流や対話によって文化の違いを越えて、移民問題の確執が取り除かれると思いますか。そう思わない場合は理由もお願いします。

1. 交流あり/交流によって理解しあえると思う 2.交流あり/交流によって理解できるとは思わない

(どんな交流ですか? 1.学校/職場 2.サークル/アソシアシオン(その名前:) 3. 商店 4.その他)

3. ほとんど交流なし/交流によって理解しあえると思う 4. ほとんど交流なし/交流によって理解できるとは思わない

交流・対話によって理解しあえないと考える理由 ()

自由欄 (フランス社会にうまく同化しているマグレブ系移民を知っていますか?)

アンケート結果 8人 (すべてフランス生まれ、フランス国籍)

年齢

20代	6
30代	1
40代	1

性別

男性	4
女性	4

職業

学生	2
社会人	6

問1 あなたはフランス人ですか。

はい 8人

問2 移民に賛成か反対か

賛成	5
反対	1
中立	2

理由「移民が多すぎる」、「働いていない」、「フランス語やフランス文化を学ぼうとしない」
「文化が違いすぎる」

問3 移民に反対する理由（複数回答）

文化の違い	1
雇用を奪う	1(将来的にフランス人の職がなくなる)
政治的影響	0
安全面	1
税金の無駄遣い	2
その他	1 (フランス文化を学ぼうとしないから)

問4 特に受け入れたくない移民は

アジア系	0
マグレブ系	3
アフリカ系	1
東欧（トルコを含む）	1
東欧（トルコを含まない）	1
南欧	1
特になし	4
その他	1 (フランス文化に興味がない移民すべて)

問5 移民はフランス社会に同化するために自国の文化を捨てるべきである。

はい	4
いいえ	4

問6 移民は教育と雇用をフランス人と平等に受けるべき

はい	8
いいえ	0

問7 マグレブ系移民が差別される理由

見た目	1
言葉	1
宗教・文化	7
歴史	2
仕事	0
交流のなさ	3
なし	0

問8 フランス政府に期待すること

- ・移民の規制（移民が多すぎる）
- ・移民に仕事をさせ、フランス文化に興味を持たせる
- ・統合の推進
- ・イスラム過激派のテロに対する対策
- ・雇用を創出する
- ・ディプローム（資格）を持った外国人にフランスで働くことを許可する

問9 マグレブ移民に期待すること

- ・現地で雇用を増やす
- ・フランス文化と言葉への関心のなさ
- ・犯罪に関わっている
- ・フランス文化を受け入れてほしい
- ・もっと心を開く (*etre plus ouvert d'esprit*)
- ・文化を捨てるべきだとは思わないが、もう少しフランス文化と言葉に興味を持つとよくなる。

問10 マグレブ系以外の移民に期待すること
記述なし

問11 移民がグランゼコールに入ることが少ない。将来的に教育の差は縮まると思うか。

はい	4
いいえ	4

問12 マグレブ移民が大統領になる可能性はあるか

ある	1
ない	7 (今は無理だけどいつか1人)

問13

・マグレブ系移民と交流することは多いか。

多い	4
ふつう	1
少し	3
なし	0

・交流によって確執が取り除かれるか。

そう思う	7 (真剣なディスカッションが必要である 1人)
思わない	1

・どこで交流しますか。

学校や仕事場	6
アソシエーション	4
店	1
その他	1(友達)

(自由記述、フランス社会にうまく同化しているマグレブ系移民を知っていますか?)

- ・彼氏がアルジェリアとチュニジアにルーツを持っている (女性・26歳)
- ・文化はそこまで違いがないと思う (女性・26歳)
- ・知っているがあまり多くない (男性・38歳)
- ・エンジニアの学校にはたくさんいる (男性・22歳)
- ・はい。10人くらい。(男性・26歳)

APPENDIX 2

アンケート 2011年12月実施 チュニスで実施

(チュニジア人用)

※アンケートはフランス語で行いました。

年齢・性別・日付

問1 フランス、もしくはフランス人についてどう思いますか。どんな印象を持っていますか。ポジティブですか、ネガティブですか。

1. ポジティブ 2. ネガティブ 3. 中立

問2 フランスに移住したいと思ったことはありますか。

- 1、はい 2、いいえ

問3 チュニジア人はフランス社会で確執なく、同化することはできると思いますか。

- 1、はい 2、いいえ

問4 チュニジアではフランス人移民に対して偏見や差別があると思いますか。

- 1、はい 2、いいえ

問5 フランス社会でマグレブ系移民に偏見や差別があるのであればその原因は何ですか。

1. 見た目 2. 言語 3. 宗教・文化的違い 4. 旧植民地 (といった経済的な格差) 5. 低賃金の仕事についている 6. その他 ()

問6 文化交流や話し合いなどの交流が移民問題の確執を解決すると思いますか。

- 1、はい 2、いいえ 理由 ()

問7 フランス政府に望んでいることはありますか。またそれは何ですか？

- 1、はい 2、いいえ
()

問8 サルコジ大統領はハンガリー系移民の二世であるが、将来、マグレブ系の大統領が登場する可能性はあると思うか。

1. あり得る 2. あり得ない

自由記述欄 (フランス社会にうまく同化しているマグレブ系移民を知っていますか?)

アンケート結果 11人（すべてチュニジア国籍）

年齢

20代	4
30代	7

性別

男性	5
女性	6

問1 フランス人の印象

ポジティブ	4
ネガティブ	4
中立	3

理由

- ・経済的なパートナーである。
- ・大きな歴史を持った国であるけれど、フランス人は傲慢(arrogant)である。
- ・フランス人はレイシストである。(4人)

問2 フランスに移住したいか

はい	1
いいえ	10

問3 チュニジア人はフランス社会でうまく溶け込むことができると思うか

はい	7
いいえ	3
その他	1 (状況による)

理由

はい

- ・フランスとチュニジアは文化が似ているから。チュニジア人はフランス文化を受け入れているから。
- ・チュニジア人は非常にオープンだから
- ・チュニジア人は一般的に社交的だから
- ・文化が同じ、とりわけ言葉が同じ
- ・チュニジア人は多文化を受け入れるから

いいえ

- ・特にチュニジアで育った人（移民1世）は文化・気質が違い過ぎて、それが争いを生んでいる。
- ・フランス人にとってチュニジア人（アラブ人）といることはかなり難しい。そのため同化は効果的に進まない。

問4 チュニジアではフランス移民に対する偏見や差別があるか

はい	5
いいえ	6

理由

- ・通常はフランス人を歓迎している。
- ・チュニジア人はチュニジアにいるフランス人をただ仕事のために来ている人たちと思っているから。

問5 フランスではマグレブ系移民に対する偏見や差別はあると言われていたが、その理由は何だと思うか。

見た目	1
文化・宗教	8
歴史	1
仕事	3
交流のなさ	1
特になし	1

- ・ムスリムというのが主な理由

問6 交流や対話が偏見や移民問題を解決するのに役立つか

はい	9
いいえ	2

理由

はい

- ・交流はフランス人に別の文化への理解をもっと高め、別の文化に対する悪い考えを取り除くことに役に立つから

いいえ

- ・すでに偏見が存在するから。それは歴史に起因している。
- ・話し合いだけが解決方法ではない

問7 フランス政府に望むこと

- ・チュニジアへの観光客を増やす。上流階級者の消費をもっと増やす。
- ・もっと柔軟に
- ・留学生や移民をもっと受け入れてほしい
- ・ビザ取得の緩和
- ・移民受け入れの緩和

問8 マグレブ移民はフランス大統領になれるか

はい	2
いいえ	9

はい

- ・フランスメディアが移民に対しての関心を高める役割を果たしているから
- ・フランスにマグレブ系移民は増えている。マグレブとフランスのハーフも増えている。マグレブ諸国にルーツを持つフランス人であれば十分大統領になれると思う。

いいえ

- ・アラブ人に対する悪い考え方がフランスにあるから
- ・フランス人はとてもレイシストだから
- ・チュニジアはアフリカだから。
- ・チュニジアはヨーロッパではないから。
- ・極右政党 FN（国民戦線）がフランス人とマグレブ人の共生を阻止している。これがあ
る限り、マグレブ系移民は大統領になれない。

自由記述（フランス社会にうまく同化しているマグレブ系移民を知っていますか？）

- ・はい。でもそれは学生である。仕事の分野での同化は難しいように思える。
- ・はい。大学でのプロジェクトで成功をおさめたチュニジア人を知っている。彼は非常にフランス社会になじめていた。
- ・はい。弟と従妹。マルセイユのレストランで働いている。
- ・はい。でも、難しいと思う。
- ・歌手や俳優
- ・フランスに住んでいる友達が何人かいる。彼らはとても同化している。なぜなら知的階級で、ある程度のレベルの人であるからである。彼らはフランスの職業分野において特殊な技能（生物学や情報工学）を持っている。このことからフランスが移民を選んでいると言える。しかし、同時にチュニジア人の労働力もフランスが必要としているのは否定できない。彼らを同化させる方法も見つけなければならない。

6. Europe du Sud (Italiens, Espagnols, Portugais)
7. Rien

Question 4 : Est-il selon vous nécessaire que les immigrants abandonnent leur culture d'origine pour pouvoir s'intégrer à la société française?

1. Oui
2. Non

Question 5 : Faut-il garantir aux étrangers arrivant en France un emploi et une éducation équivalente à celle des Français?

1. Oui
2. Non

(Concernant l'immigration maghrébine)

Question 6 :

Les immigrants d'origine maghrébine sont-ils victimes de discrimination en France? Pour quelle raison?

1. Apparence
2. Langue
3. Religion
4. Culture
5. Poids de l'histoire (certains pays arabes aillant été colonisés par la France)
6. Travail
7. Manque d'échange et de communication
8. Il n'y a pas de discrimination

Question 7 :

Espérez-vous que le gouvernement français change sa politique vis-à-vis de l'immigration? Sur quel point?

Question 8 :

Espérez-vous que les immigrants d'origine maghrébine changent de comportement sur un point particulier?

Question 9 :

À l'exception des étrangers d'origine maghrébine, espérez-vous que les immigrants changent de comportement sur un point particulier? Lequel?

Question 10 :

On dit qu'il y a peu d'immigrés dans les grandes écoles. Pensez-vous que l'écart entre les français et les immigrés diminuera dans le futur?

1. Oui
2. Non

Question 11 :

Le père du président de la République, Nicolas Sarkozy, est Hongrois . Pensez-vous qu'il sera, à l'avenir, d'élire un français possédant des origines maghrébines président de la République?

1. Oui
2. Non

Question 12 :

Peut-on résoudre les conflits liés à l'immigration par le dialogue ou les échanges culturels?

1. Oui
2. Non

Pourquoi?

Question 13 :

Côtez-vous habituellement des étrangers?

1. Oui (beaucoup)
2. Oui (normal)
3. Oui (peu)
4. Non

Pourquoi?

Dans quel contexte?

1. Scolaire ou professionnel
2. Associatif (quelle association?)
3. À l'extérieur (magasin)
4. Autre ()

Commentaire libre : (connaissez-vous des Maghrébins aillant réussi leur intégration au sein de la société française? etc.)

Merci beaucoup !

ⁱINSEE, “Enquêtes annuelles de recensement 2004 et 2005,”

http://www.insee.fr/fr/themes/document.asp?ref_id=IP1098&page=graph (2013年1月21日アクセス)

ⁱⁱ法務省 HP 「平成20年末現在における外国人登録者統計について

http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/press_090710-1_090710-1.html (2013年1月21日アクセス)

ⁱⁱⁱ少々、古いデータであるため、近年に取られたデータを探そうと努めた。トゥールーズ・ミディピレネー日仏協会の代表 (Vincent) へのインタビュー時に質問したところ、このような移民蔑視につながるアンケート調査に対する風当たりが年々、厳しくなる傾向にあり、フランス政府が今後、このような調査を行う可能性は低いそうだ。敵意や差別観は10年程度では変化しないと仮定する。また、筆者はフランス、トゥールーズ市でインタビューとアンケート調査を行ったが、受け入れたくない移民についてマグレブ系が多く上がった。

^{iv}グルノーブル市の取り組みについては (島田, 2011 p.116) に詳しい。

^v総務省では外国住民人口が200万人に達した翌年の2006年3月に「多文化共生の推進に関する研究会報告書」を公表し、その中で地域における仁保人と外国人との間の多文化共生の推進を奨励した。その報告書内での多文化共生は「国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的ちがいを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」と定義されている。

^{vi}「市民化講習」については、新海英史「オランダ・アムステルダム市における移民行政の取り組みとその課題」(2007)に詳しく記述されている。

^{vii}小林薫「ドイツ移民政策における「統合の失敗」」『ヨーロッパ研究』第8号 2009年、p.125.

第二章 日本社会における南米系外国人移住者の現状

2.1 南米系外国人移住者^{vii}の分布と各地域における現状

a. 入国の経緯—ニューカマーとしての日系人

日本に在住する外国人の中で中国、韓国・朝鮮に次いで3番目に多いのは1990年の入管法改正で定住者の資格として来日が認められた日系ブラジル人である。もともとは日本から南米に渡った1世やその子ども(2世)であり、入管法では日系3世までが来日することができる。見た目は日本人と変わらない人も多いが、ポルトガル語を母国語とし、ブラジルの文化を継承した人々である。ペルー、ボリビア、チリ等の出身者もいるが、彼らはスペイン語を母国語としている。各国、独自の文化・産業・価値観を持っているため、「南米系」と一括りにはできない。もちろんそれは留意すべきことだが、入国の経緯は共通している。ポルトガル語もしくはスペイン語を母国語としているゆえ、南米系外国人移住者は、漢字圏の中国や文法体系が日本語と近い韓国・朝鮮出身者よりも日本語習得が困難である。しかしながら、英語に秀でているというわけでもないで、日本で生活するうえで言語の壁は非常に高い。言語をめぐる問題は本章第7節、「2.7 現地調査で見えた課題」で考察したい。当初は一時的な滞在を目的としながらも、出稼ぎ目的で来日した南米系外国人のうち、6割近くが現実的に長期化・定住化している。(森、2009 p.90.)

人の流れは、送り出す側の国と受け入れる側の国の法律、経済、社会情勢に左右され、「移民」問題の取り巻きも常に変化する。『顔の見えない定住化』(樋口、2005 pp.5-11)によれば、ブラジル人の移住過程は、

- 第一期 (1980~84) の「一世の隠れた帰国」
- 第二期 (1985年~88年) 「デカセギ斡旋の制度化」
- 第三期 (1989~1992年) 「入管法改正と増加のピーク」
- 第四期 (1993年~96年) 「不況下でのブラジル人労働力の浸透」
- 第五期 (1997年~99年) 「三世と子どもの増加」
- 第六期 (2000年~) 『「ブラジル人問題」の政治化』

に区別されると説明されている。1980年代、高度経済成長に湧く、日本に帰国したブラジル人(主に戦後、ブラジルに移住した日系1世)が人目を忍ぶ形で就労し、貯蓄を得た。その後、ブラジルに戻った一世は、日本への就労を促すようになり、デカセギ斡旋は制度化する。当時、日本は好景気であり、80年代後半から労働力不足は深刻化していた。1990年には改正入管法の施行があり、それによって「定住者」の資格として日系3世までが日本で合法的に就労が可能となった。第三期の1989年から1991年の間に年間10万人以上のブラジル人が新たに就労している。(梶田、丹野、樋口、2005 p.7.) まず、神奈川県を中心とする関東の工場地帯にブラジル人が集まるようになり、1992年から96年までは、

主に愛知・静岡そしてその周辺にある長野、岐阜、三重などの中部地方の工業地帯に集まり、自動車や電機産業の請負業者で働くようになった。時代はバブル経済崩壊を経て経済低迷期に移るが、自動車・電器産業界において、下請け、孫請けといったコスト削減のためのアウトソース化が進むようになった。安価な労働力はむしろ需要を高め、ブラジル人を中心とする南米系移住者を一時的な都合のいい労働力として、「非正規雇用」として大量に雇うこととなる。

「日本は労働力としてブラジル人を雇った。ただ入ってきたのは『人間』だった。」筆者はブラジル人集住地である鶴見に幾度となく足を運び、日系ブラジル人の方からこのような言葉を聞いた。鶴見区役所に聞き取り調査を行った際、「基本的に日本は外国人を受け入れない国であるが、1980年以降、労働力を必要とした。日系人なら摩擦が起きない、大丈夫だという根拠のもと受け入れたが、それは完全な誤算であった。見た目は日本人のようでも言葉も文化も違う『外国人』である。」と担当者が言っていたように、外国人移住者をめぐる問題は90年代以降、顕在化している。その問題については本章全体で詳しく見ていきたい。

b.南米系外国人移住者を扱う重要性

『顔の見えない定住化』(梶田、丹野、樋口 2005)は、2005年までについては非常に詳しく考察されているが、本研究では2008年のリーマンショック以降、南米系外国人移住者が置かれる環境は大きく変わったことについて、言及しなくてはならない。2011年度の調査によれば、日本に住んでいるブラジル人の総数は210,032人であった。ピーク時は2007年度の316,967人であり、約10万人が減った。(総務省入国管理局HP「平成23年末現在における外国人登録者数について」<http://www.moj.go.jp/content/000098590.pdf> 2013年1月24日アクセス)この背景には、リーマンショックによる景気悪化、派遣切りの憂き目にあい日本国内で多くの人が失業したことが挙げられる。浜松国際交流会(HICE)はこの時について、「リーマンショック直後、自動車などの向上で非正規雇用として働いていたブラジル人失業者で事務所があふれて、対処しきれなかった。」と語る。

2009年3月31日厚生労働省は「日系人離職者に対する帰国支援事業の実施について」を発表する。

「現下の社会・経済情勢の下、派遣・請負等の不安定な雇用形態にある日系人労働者については、日本語能力の不足や我が国の雇用慣行に不案内であることに加え、我が国における職務経験も十分ではないことから、一旦離職した場合には再就職が極めて厳しい状況におかれることとなります。

こうした中、母国に帰国の上で再就職を行うということも現実的な選択肢となりつつある状況です。(……)」

(厚生労働省 HP <http://www.mhlw.go.jp/houdou/2009/03/h0331-10.htm> 2013年1月24日アクセス)

これは帰国費用を持たない日系人の帰国を促すもので、再度日本に入国しないことを条件に1人あたり30万円の渡航費を与えた。国際社会から非難されたことから、後に入国制限は緩和される。(小内、2010 p.2.) この制度は南米系外国人移住者の帰国を促すうえで一定の効果を発揮した。しかし、日系人を受け入れずでに20年以上が経過し、一時的なデカセギを目的として、入国したものの定住化が進んでいた。何十年と日本で暮らしてきた人は帰国が難しく、母国に戻って生活できる保証はなかった。確かにリーマンショック後に南米系外国人移住者は減った。しかし、定住する者、永住権を取得する者は、近年、増える傾向にある。

製造業の職場では日本語ができなくても全く問題はなかったが、リーマンショック以降、日本語ができるか否かで再就職できるかのキーになった。「これまで日本語ができなくても工場の仕事なら、いくらでもあった。それゆえ、日本語を勉強しようとするブラジル人はほとんどいなかった。第一、仕事が忙し過ぎて勉強する余裕もなかったのである。」(藤巻、2012 p.114) 写真1、2はEMPREGOSというポルトガル語で書かれたブラジル人向けの新聞兼、求人広報であり、鶴見のブラジル料理屋・食料品店などブラジル人が集まるところや区役所で手に入れることができる。EMPREGOSとはポルトガル語でJobのことである。1面は日本とブラジルのニュース(2012年12月1日号はTPPの話題であった)が載っているが、その他2~16面すべてが求人広告である。神奈川国際交流財団のF氏によれば「リーマンショックの前は、もう少しいい自給で求人が出ていた。自給1200~1400円が多かったが、現在は自給900円程度で日本人がやりたがらない3Kの仕事をしている。」リーマンショック後、製造業で働けなくなった南米系外国人移住者が、少なからず介護ヘルパーの仕事を求めるようになった。介護ヘルパーの資格を取るためには日本語能力が必要だ。東日本大震災後には原発作業員の求人広告も出たそうだ。

横浜市鶴見区で現地調査を行っていた際にブラジル人の中でこのようなうわさがある、ということを知見国際交流ラウンジのスタッフに教えてもらった。

「今、日本に残っているブラジル人に“まとも”な人はほとんど残っていない。“まとも”は人であればとくにブラジルに帰国したはずである。今、日本に残っている人は日本でもブラジルでもまともな仕事を得ることができない人である。」

これは少し偏重しているかもしれない。外国人のインタビューを通して、「日本は本当に安全で住みやすい」という言葉も聞かれた。ただ、「移民」がよりよい環境を求めて移動するのは当然のことである。30年前と現在とでは、外国人移住者を取り巻く環境が全く違うことを留意しなければならない。1980年以降、南米全域はハイパーインフレにおそわれ、

経済は壊滅状態にあった。そのような状況から一変、現在、ブラジルは BRICs の一員として経済発展が著しい。ブラジルをはじめとする南米諸国と協調していくことが日本においても重要になる。

筆者は、自ら現地調査を行う中で、外国人の子どもに対して「外国人」と呼ばないことが付いた。この理由は、外国籍でも母国に行ったことがなかったり、日本国籍であっても日本で暮らした経験がなかったりと「外国人」と一括りにできないからである。その代わりに「外国につながる子どもたち」もしくは略して「つながる子」と呼ぶ。「つながる子」は将来、日本と外国をつなげる役割を担うことができる貴重な人材であると感じる。もちろん、子どもだけではなく、日本で暮らした経験を持つ親世代もそうである。そういう人々をいつまでも単なる「労働力」として扱い、必要がなくなれば祖国に送り返す、を繰り返していいのだろうか。

少子高齢化が進み、国力が弱まる日本が、国際社会で生き残るための大きなキーとして、他国と良い関係を築き、維持していくことが必須であると感じる。それは特定の国に限った事ではないが、言語や文化・習慣が違うことで日本の地域社会に溶け込むことが難しい南米系外国人移住者と共存する方法について考えていきたい。

なお、本章で登場する子どもの名前はすべて仮名とする。



写真1 「EMPREGOS 2012年12月1日発行」1面の3分の2だけがニュース。16面すべてが求人広告にあてられている。(筆者撮影)

TE
I

Venha trabalhar com a nossa equipe. Precisamos da sua dedicação e força de vontade!!!

GRANDE CONTRATAÇÃO HELPER Sunny Life

SHIZUOKA / AICHI / GUNMA

Funcionário efetivo

¥160.000/mês (sem certificado, mas com experiência)

¥170.000/mês ~ (com certificado Helper nível 2)

Horário (sistema shift)
① 7h30 - 16h30 ② 8h30 - 17h30 ③ 10h30 - 19h30 ④ 16h - 9h

Folgas: 8 - 9 dias por mês

- Necessário compreensão do idioma Japonês (Hiragana e Katakana)
- Não aceitamos pessoas com tatuagem
- Adicional noturno

<http://www.sunnylife-group.co.jp>

Atendimento em Japonês

HAMAMATSU 053-448-3600 (Noguchi) Hamamatsu-shi Nishi-ku Irino-cho 9908-1	TOYOHASHI 0532-55-3600 (Kudo) Toyohashi-shi Mukaiyama-cho Shichimen 80-8
FUJI 0545-52-0360 (Chiba) Fuji-shi Hinode-cho 123-1	NAGOYA 0561-63-0090 (Yoshino) Nagakute-shi Gogouike 2205
NUMAZU 055-962-3600 (Nakajima) Numazu-shi Shirogane-cho 2-1	GUNMA 0276-55-3600 (Sato) Ota-shi Takahayashiminami-cho 808-6

写真2 「EMPREGOS 2012年12月1日発行」介護ヘルパーの求人広告も目立つ
「Necessario compreensao do idioma Japonês (Hiragana Katakana) 日本語のイディオムの理解が必要 (平仮名、片仮名)」とある。(筆者撮影)

2.2 鶴見区における現地調査とインタビュー調査

今回、修士研究を進めるにあたり、横浜市鶴見区に焦点を当てて、聞き取り調査・アンケート・実験を行った。鶴見に焦点をあてた理由は以下の4点である。

1、南米系外国人移住者の集住地区であること。愛知県豊田市や静岡県浜松市と比較すると相対的な人数は少ないが、約2000人(ブラジル人だけでは1182名)の南米人が鶴見区、その中でも大半が臨海部の潮田地区に集住し、それは無視できない数値であること。

2、神奈川県、とくに南米系が集住している鶴見区は工場、電設業、サービス業などが盛んであり、各種産業の集合体であること。ブラジル系外国人移住者が最も多い愛知県、2番目に多い静岡県は自動車工場、3位の三重県が半導体工場に従事する南米系外国人移住者の大多数であるのと比較し、鶴見区在住の南米系外国人移住者は就いている職業が多様である。一つの産業が落ち込んだときに、失業のリスクを回避しやすい。リーマンショックで大打撃を受けた自動車工場で働いている南米系外国人は、真っ先に派遣切りの対象になった。その時、失業した南米系外国人の一部は、仕事を求め、鶴見に移住してきた。

3、アンケートよりもインタビューの重要性を感じた。鶴見や他の地域で現地調査を行う中で外国人に伝達される情報が限定されている事、および外国人（特に南米系）の読み書き能力が相対的に低く、アンケートに答えられない人が大多数であるという事実が発覚した。そのため、外国人移住者の声を直接聞くためにはインタビューあるいは面談が重要であることが判明し、距離的に近くアクセスがしやすい鶴見を選んだ。鶴見に現地調査のために訪れた回数は20回を優に越す。その間、34人の各種ステークホルダーにインタビューを、人によっては複数回行った。

4、横浜市、および鶴見区は行政レベル、NPOレベルともに外国人移住者に対する先進的な支援を行っていて、将来、他の地域に向けてモデルとなる外国人の支援システムを検討するのに最適であると考えた。

筆者は自動車産業を中心とする工場地帯であり、国内屈指のブラジル人集住地である浜松市でも現地調査を行った。浜松市と浜松国際交流協会（HICE）で行ったインタビューは本論では割愛し、APPENDIX1,2とした。なお、浜松市は、外国人都市集住会議を発足した市であり、全国の外国人集住地に呼びかけ、多文化共生に関わる枠組みづくりに奔走している。本格的な南米系外国人移住者の意識調査アンケートを行っており、浜松市でのインタビュー・現地調査とともにアンケートデータも本論文で大いに参照した。

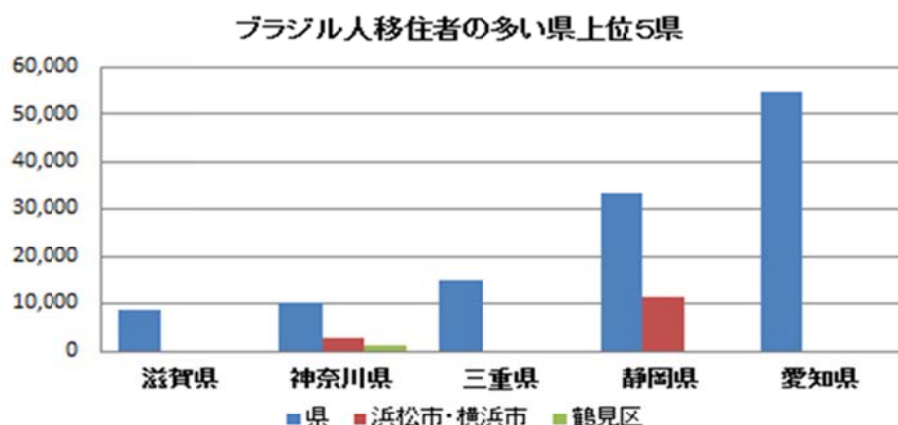


図 1 「都道府県別年齢・男女別外国人登録者（その3 ブラジル）」（法務省 HP <http://www.moj.go.jp/> 2013年1月24日アクセス）を参照に筆者が作成

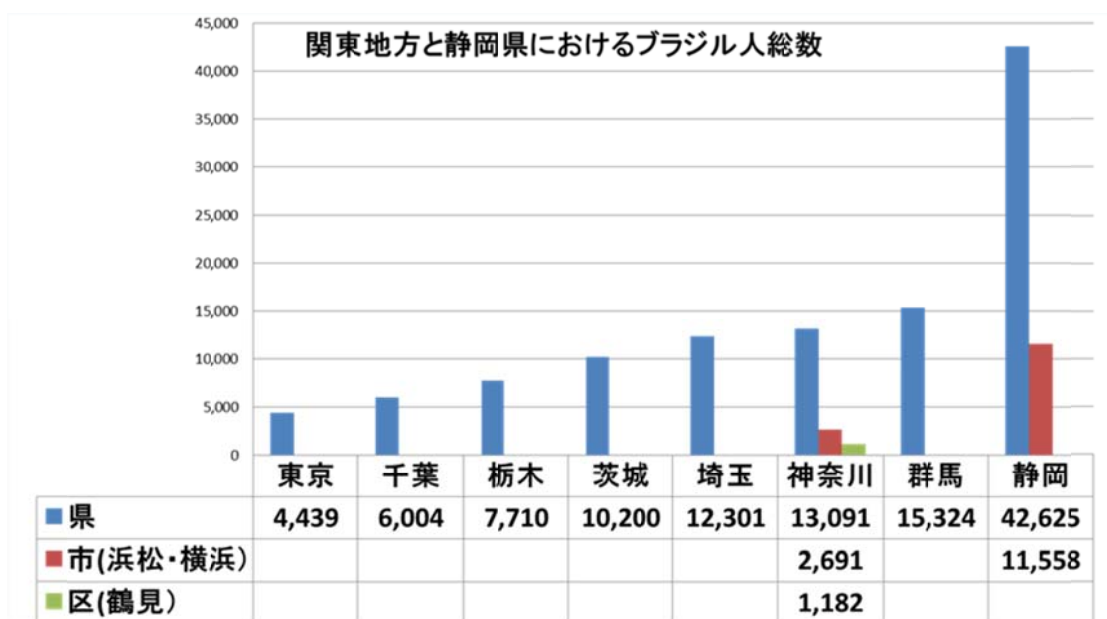


図 2 「都道府県別年齢・男女別外国人登録者（その 3 ブラジル）」（法務省 HP <http://www.moj.go.jp/> 2013 年 1 月 24 日アクセス）を参照に筆者が作成

a. 鶴見区に外国人移住者が多い背景

横浜市の北東部に位置する鶴見区は人口 27 万 6 千人のうち、外国人登録者数は 9712 人、28 人に 1 人が外国人である。横浜市の中では、横浜中華街がある中区（外国人登録者数 15633 人）に次いで 2 番目に多い。内鶴見区は南米出身者の割合が高いことが特徴的であり、横浜市全体の外国人登録者のうち南米系の割合が 7%であるのに対し、鶴見区内の外国人登録者のうち、南米系が 22%と高い。（最も多い外国人が中国で 34%、2 位は韓国・北朝鮮で 19%、3 位には南米系の中核であるブラジルが 14%と続く。）南米系外国人が多い背景は「鶴見区における多文化共生のまちづくり」（平成 24 年 6 月 15 日鶴見区役所）によれば「京浜工場地帯の労働力として、沖縄や朝鮮半島出身者が移り住むようになり、郷友会が作られる（大正時代～）※特に戦後の高度経済成長期には、沖縄から集団就職などにより多くの人に移り住み、県人会などを中心にコミュニティを形成。沖縄では、米国統治下の琉球政府の政策としてポリビアへの計画移住など、中南米への移住が行われる。1990 年、入管法の改定により、外国人（日系 3 世まで）が就労の制限なく日本に滞在できるように 沖縄出身者が多かった鶴見には、沖縄から南米に渡った 2 世、3 世が、鶴見に住む親類を頼って多く住むようになる」このような流れで沖縄出身者や南米出身者が多い。」

鶴見駅周辺には中国、韓国・朝鮮や南米出身者が多いのに対し、臨海部の潮田地区には、南米出身者が集住している。（図 3 参照）

b. 鶴見区役所の認識と取り組み

(総務部 区政推進課企画調整係 N氏 インタビューをもとに作成)

鶴見は京浜工業地帯であることからブラジル系など南米系の移住者が多いことが特徴である。工場労働や電設業で働く人だけではなく、なかには飲食店を経営している人たちもいる。鶴見区が抱えている最も大きな課題は「子どもの学習支援」と「区民の意識啓発」の二つである。移住者の子どもは言葉のハンデもあり、なかなか普通科の高校に進学できないのが現状である。中国・韓国からの移住者は子どもの教育に熱心な人が多いが、南米系はそうではない。普通科への進学率が非常に低い。南米諸国では小学校の段階から成績が悪いと留年する制度をとっている学校が多い。それに対して、日本の学校は、中学校3年生までエスカレーターで進学できるため、高校受験の時に進学のための学力が足りていないと気づき、手遅れの状況になっていることがよくある。日本で生まれ、日本語で日常会話が出来て、言葉に問題がないように見えても、授業が理解できるようになることは大きな壁になっている。南米系は言葉や習慣、家族の意識(住宅購入やローンのプランなど)の違いでアジア系の移住者よりも苦勞する場合が多い。基本的に「今を楽しむ気質」なため、ステップを踏んで何かを計画することが苦手である。このような状況を打破するために「子どもの学習支援」が重要であると考えている。

外国人に対する差別はあるかといえば、昔から外国人を受け入れてきた土地柄ゆえにあまりないのではないかと思われる。実際にはそうではないのに、ゴミに対するルールを守っていないと思われたり、犯罪者のように扱われたりしてしまうことがあるが、昔から見ればかなりそのような偏見はなくなった。目に見えるような大きな差別や軋轢なく、自然体で外国人と接している感じではある。小学校などで普通に外国人の子どもを見かけるので、学校でも自然に外国人と接する機会がある。外国人の子どものいじめが指摘されることもあるが、住居を断られたりするなどの差別はないと思われる。リーマンショック後の派遣切りに対しては、そこまで失業率が高くなかった。工場労働者よりも、自営業や電設業、ヘルパー(とくに女性の場合、ヘルパー資格を取る人が多い)に携わる人が多い。逆に派遣切りにあった、南米系の移住者が鶴見に移住してきた。言葉のハンデがあるのでできる仕事は限られている。

近所に住む外国人に対して、鶴見区の住民は差別意識をあまり持っていないようだが、それと同時に多文化共生にあまり関心を持っておらず、交流のない、棲み分け状態が進んでいる。そのため、区としては「区民の意識啓発」を進めなければいけないと思っている。

90年代以降、入国管理法改定を受けて、たくさんの日系南米人を受け入れた。国として日系人なら摩擦が起きない、大丈夫だという根拠のもと受け入れたが、それは間違いで、見た目は日本人のようでも言葉も文化も違う。国は受け入れたが、その後のフォローができていなかった。それが、特に「子どもの教育問題」等に顕著に表れている。

また、鶴見区が抱える今後の課題について伺った。

・問題を抱えている（うまくなじめていない）移住者は、埋もれてしまい、なかなか見つけ出すことが出来ない。表に出てこない。それが本当に課題である。区役所や国際交流ラウンジに来ている人は「つながろう」という思いのある人。ない人に対してはこちらからアクセスが出来ない。住民票を取りに来たときに転入者キットを渡すようになった。これはイベントなど（国際交流ラウンジ等で実施されている）のお知らせなどを含めた紙などを渡して、区が取り組んでいることを知ってもらいために行われている。しかし、紙ものは読まれない傾向にあり、実際どれくらいの人たちに読まれているのかは不明である。

・全員に平等に接しなければいけないのはもちろん前提となっているが、「キーパーソン」（概念としては「意識の高い人たち」）を上手に動かすことが、埋もれている人たちを救い出すことにつながる。

・生活に必要な日本語講座の必要性を感じている。リーマンショック後はかなり日本語を勉強する機運が高まった。日本語検定は生活に対する語彙を増やすのに最適ではない。生活に密着した日本語を習得することができる別の枠組みが必要である。

c. 鶴見区でのステークホルダー（団体）

① 神奈川国際交流財団

HPによれば「世界に開かれた神奈川、世界と結ぶ神奈川を目ざして、人と人、地域と地域の国際交流及び国際協力の積極的な推進、多文化共生社会の実現、国際的な人材の育成並びに学術・文化交流を通じ地域文化の向上を図り、もって県民の福祉の向上と世界の平和と発展に寄与することを目的として設立」設立は1977年。

② 公益財団法人横浜市国際交流協会（YOKE）

HPによれば「横浜市国際交流協会は1981年に設立し、当初、海外との経済・技術交流をはじめとし、市民の国際交流、国際協力活動の支援を業務の中心としていましたが、その後、市内の外国人市民や留学生の支援、国際機関の支援など、「地域の国際化」を協会業務の柱に加え、業務の範囲を拡大してきました。現在は、横浜の国際化の進展の中、「多文化共生のまちづくり」を中心にすえ、市民と協力して、情報提供、相談、通訳派遣、日本語教室など、外国人市民への生活支援のための具体的な事業を展開しています。また、「人材の育成・市民活動の支援」、「国際協力の推進」、「国際交流情報の提供」の事業を進めています。」

③ 鶴見区役所

2008年、区長の名義で区独自の「鶴見区多文化共生まちづくり宣言」^{viii}を發布するなど、多文化共生に先進的である。区役所のHPも英語、中国語、韓国語、ポルトガル語、スペイン語、タガログ語、やさしい日本語で展開している。

④ 鶴見国際交流ラウンジ

外国人支援の中間組織にして中心組織。横浜市の方針に基づき、市内に10カ所の国際交流ラウンジが設置される。YOKE 昭和61年、青葉 平成1年、保土ヶ谷 平成3年、港南 平成9年、港北 平成12年の5つの市では外国人は少ないが、比較的早い段階で設置された。その理由は、商社や大手メーカーに勤め、海外経験が豊かな人や比較的豊かな人が多く住んでいるエリアであり、海外と交流をしたいという住民の要望が多かったためである。その一方、金沢 平成19年、都筑 平成19年、中 平成20年、南 平成22年、鶴見 平成22年は、外国人の増加を受け、発足した。金沢区と都筑区は外国人がそれほど多くないが、中区、鶴見区、南区は横浜市内で外国人登録者数が多い上位3区である。

鶴見国際交流ラウンジはJR鶴見駅から徒歩1分の再開発ビル内にあり、多文化共生の中心的な役割を担っている。ラウンジの主な事業内容は①多言語による情報提供②日本語学習の支援・子どもたちの学習の支援③外国人住民と日本人住民との交流支援④母国で経験のない地震などの防災支援等を行っている。平成23年度は1800件の相談を受けた。

駅前という立地はいいが、「存在を知らない人が多いのではないか」（神奈川国際交流財団T氏）という問題が指摘されている。再開発ビルの外観には英語表記がなく、居酒屋やカラオケ店が同居している。各種国際交流イベントや日本語教室が開かれ、ラウンジは国際交流に興味がある日本人、日本語を勉強したい外国人が情報を集めに行き来できる非常にオープンなスペースである。活動内容が素晴らしいだけにもったいない印象を受ける。

(写真2～4参照)

⑤ 横浜市国際学生会館（潮田地区センター上）

1994年に横浜市によって建てられた留学生、研究者等の宿泊施設である。外国人の留学生と研究者、また日本人、合わせて135人が住んでいる。（ブラジル人は3組）外国人が講師になって自分の文化を伝える交流会などが定期的に行われる。

⑥ NPO法人ABCジャパン

NPO法人ABCジャパンのHP <http://www.abcjapan.org/> (2013年1月22日アクセス) には、設立の経緯や活動内容がこう説明されている。「NPO法人ABCジャパンは、横浜市鶴見区在住のブラジル人によって2000年に設立された団体で(2004年に法人格取得)、地域のブラジル人や南米出身者向けの生活相談や日本語教室、子どものための教育活動、地域社会との交流活動等を行なっています。また、2009年に全国のブラジル人コミュニティと連携して、NNBJ(在日ブラジル人全国ネットワーク)を立ち上げ、ブラジル政府や日系

人団体との連絡調整も行っていきます。」鶴見駅から徒歩5分、細く暗い路地を曲がった先にある建物の5階の一室にABCジャパンの事務所がある。(写真5)日本語教室とは別に南米系の不就学児童への学習支援を行っている。

⑦ IAPE (外国人児童生徒保護者交流会)

1993年、発足。現在は潮田小学校を拠点にスペイン語・ポルトガル語教室、サッカー教室を開き、年に2回、交流会としてキャンプとクリスマス会を開いている(日本人の参加はなし)。IAPEの目的は実にシンプルである。「日本で生まれ育つ南米の子どもたちの居場所づくりを目指しています。」設立当初は移住してきた子どもたちが母語を忘れないように、南米系の母親が率先して子どもにスペイン語・ポルトガル語を教える教室中心であったが、今は南米系の母親のなかでボランティアとして教えてくれる人がいない。そのため、学習支援(学校の補講などを行う)が中心になっている。助成金をもらっていないため、ABCジャパンより活動はかなり小規模である。

⑧ 横浜市立潮田小学校

鶴見川を越えた埋立地「潮田地区」は、南米系外国人移住者(特に日系人)の集束地である。その潮田地区にある潮田中学校は2012年現在71人の「外国につながる子ども」を抱えている。その8割がブラジルやペルーなど南米につながる子どもである。家で日本語に接する機会が少ない彼らのために日本語や授業の補習をサポートする国際教室を設けている。

⑨ 神奈川県立鶴見総合高校

潮田小学校から徒歩5分県内の「潮田地区」にある高校。外国人のための特別入試枠を県内で最大の15人設けるが、実際にその枠で入学できる南米系の子どもたちは1~2人である。このことから南米につながる子どもが高校に進学できていないかと想定することができる。教諭のM氏によれば「鶴見総合高校には、現在(2008年現在)、78名の外国につながる生徒が在籍している(そのうち45名が在県外国人特別募集枠で入学した生徒である)。」学習の面では「日本語による学習が困難な生徒に対しては(最長3年次まで)、国語、歴史地理、公民、保健の授業に関しては、別室において個別対応授業(「取り出し授業」)を行っている」

⑩ 本町通商店街

潮田地区の商店街の一つ。沖縄特産品店や沖縄料理店が立地する仲通商店街同様、南米系外国人が多く住むエリア。もともとは沖縄から移住してきた人が多かった。地元の人によると本町通商店街は「かつての商店街の姿を失い、いまやブラジル人街になってしまった」商店街。複数の南米料理屋や食料品店が並ぶ。

⑪本町通商店街のモスバーガー

南米系外国人が情報交換をするたまり場になっているというモスバーガー。情報を地元の人から聞き、2012年12月27日（木曜日）17:00~18:00の間、視察することにした。禁煙と喫煙が分かれており、筆者は禁煙に座ったが、ポルトガル語は聞こえてこなかった。客もすべて日本人のようだった。ただ、30代くらいの男性と20代くらいの女性の二人組の客は言葉を選ぶように非常にゆっくりとしたスピードの日本語で会話をしていた。あくまでも推測であるが、女性は日系南米人、男性は女性に日本語を教えていたのではないかと。もしくは2人とも外国人であったか。2013年1月6日（日曜日）の夕方17時にモスバーガーを訪れた際は、少し日本人の趣味とは違う派手な髪形と服装をした女性3人組が喫煙席に座ってポルトガル語で話していた。外国人に慣れていない日本人は、このように外国語を話す人たちが集まっているのを見ると少し威圧感を感じるかもしれない。



図3 鶴見区周辺の地図（筆者作成）



写真1 JR 鶴見駅 多言語表示が進む鶴見であるが、駅の表示はすべて日本語である。(筆者撮影)



写真2 鶴見国際交流ラウンジ 駅右側の開発ビルの中にあるが、他施設と同居しており、外から見て非常にわかりにくい。(筆者撮影)



写真3 国際ラウンジの入り口 多言語のお知らせが充実している (筆者撮影)

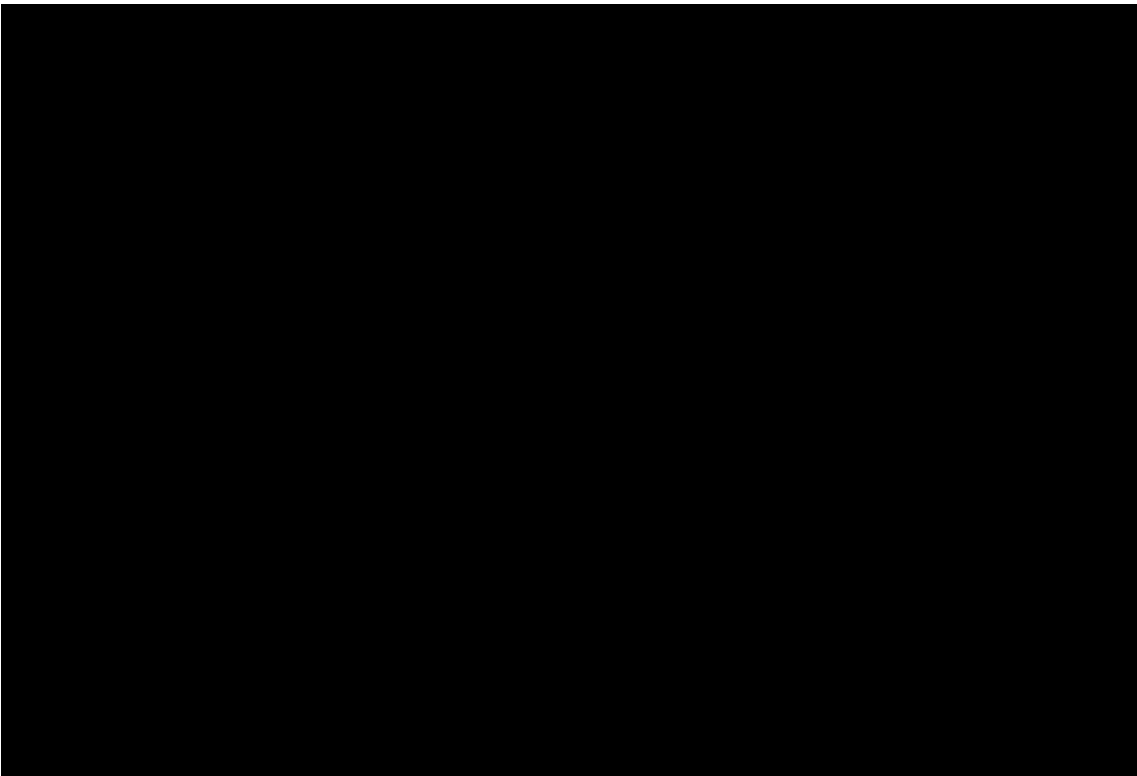


写真4 鶴見国際交流ラウンジ館長 S 氏へのインタビュー (筆者撮影)



写真5 ABC ジャパン事務所 入るのに少し勇気が必要である。(筆者撮影)



写真6 ブラジル食料品店が並ぶ本町通商店街 (筆者撮影)



写真7 本町通商店街のブラジル食料品店の前にはポルトガル語の情報誌が並ぶ（筆者撮影）

2.3 教育現場—放課後教室でのボランティアから見えた課題

表1 鶴見および周辺地域における現地調査

1	2012年12月4日	川崎市川崎区「ふれあい館」	フィリピン人の中学生、ペルー人の中学生に学習支援（学校の補講）
2	12月8日	横浜「鶴見国際交流ラウンジ」	外国につながる高校生への学習支援
3	12月19日	横浜市立潮田小学校	放課後教室「つるみ〜によ」にてブラジル人の子どもへ学習支援
4	12月22日	潮田地区センター	慶應義塾大学法学部塩原ゼミ主催交流会「外国につながる子どもたちのためのクリスマス会」（ピザをつくり）
5	2013年1月5日	潮田地区センター	慶應義塾大学法学部塩原ゼミ主催交流会「外国につながる子どもたちのための新年会」（初詣、書初め）
6	1月9日	潮田小学校	放課後教室「つるみ〜によ」ブラジルにつながる子ども、ペルーにつながる子どもの学習支援

※「ふれあい館」とはHPによれば「日本と在日外国人が市民として、子どもからお年寄りまで相互のふれあい交流を進める場所」として、川崎市により設置され、社会福祉法人青丘社が市より委託を受けて運営している。

※本論で登場する子どもの名前はすべて仮名である。

① 潮田小学校放課後教室

横浜市では外国につながる子どもが5人集まると教員を一人多く派遣し、国際教室をつくるのが義務付けられている。潮田小では主に日本語を教える国際教室とは別に学校での授業についていくための補講教室として「つるみ〜によ」が設置されている。教育委員へ追加予算申請を経て、「母語による学習支援推進校」に指定されている。ここまで手をかけている学校は市内でもおそらく他にはない。したがって、外国につながる子どもは潮田小学校に集まりがちである。今後、多文化共生の「モデル校」として役割が期待されている。以下は筆者がボランティアとして潮田小学校で子どもたちに勉強を教えた時の様子である。

2012年12月19日

鶴見駅から徒歩25分、臨海部の埋め立て地である潮田地区にある潮田小学校で、「外国につながる子どもたち」のための学習支援が毎週水曜日、国際教育担当教諭とボランティア

アを中心として行われている。NPO 法人 ABC ジャパンが共催である。潮田地区は南米系の外国人移住者の集住地区であり、潮田小学校には、「外国につながる子どもたち」はブラジル 32 人中国 1 人フィリピン 11 人ペルー 7 人エクアドル 1 人ボリビア 7 人アルゼンチン 2 人スペイン 1 人イタリア 1 人パラグアイ 2 人コロンビア 1 人ウルグアイ 1 人タイ 2 人韓国 2 人の計 71 人いる。「外国人」ではなく「外国につながる」という表現を使っている理由は必ずしも子どもたちが外国で生まれた外国籍でないためからである。家庭によって様々なケースがある。外国で生まれ、親の都合で日本に来た場合、親が外国人や日系人で子どもは日本で生まれである場合もある。また、家での母語も日本語の場合もあれば外国語の場合もある。(ブラジルにつながる子どもの場合、家では家族との会話はポルトガル語しか使わないケースが多い) 例えば小学校 1 年生のマナミちゃんとアントニオくんの母親は出産のためにブラジルに戻っただけで、子どもにブラジルでの生活経験はない。家では日本語を使っているにもかかわらず、マナミちゃんの日本語力はそれほど高くない(担任の K 先生談)。その理由は日系人の親が流暢な日本語を話すことが出来ないからと考えられる。小学校 1 年生のレナちゃんは 5 歳で日本に来たが、親が教育熱心でほかの外国につながる子どもに比べて日本語が上手である。アリサちゃんは母親がフィリピン人、父親は日本育ちのペルー人であるため、家では日本語を使っている。日系ブラジル人の両親を持ち、日本で生まれたエミリちゃんは就学前、家では日本語を使っていたが、親せきがブラジルから鶴見に引っ越してきたことを機に、家での会話はポルトガル語になった。このように日本語の能力もさまざまであり、外国籍か日本籍か否は日本語の上手さに必ずしも相関していない。

筆者は漢字と音読と算数(学年相当)などの学校で習ったことの補習を行うボランティアとして、小学校 1 年生と 3 年生の児童を担当したが、日常会話にはまったく問題がないように思えた。こちらが言っていることも理解していたが、担任の教員は「日本人の他の生徒に比べると学力が低い」と口をそろえる。特に音読が苦手で、やるのも嫌がる。1 年生であっても日本人の生徒とかなり差がついている。親が音読や読み聞かせに関して手伝いが出来ない。担当した 3 年生のミリちゃんは親にサインをしてもらって「音読カード」に自分で名前を書いていた。後に聞いたところ日系ブラジル人であるミリちゃんの両親は日本語が一言も話せないそうだ。小学校で日本語が中途半端、かつ学力が低いと中学・高校では修正することが厳しい。受験が必要な普通科の高校への進学は大きな壁である。小学校のうちから予防線をひかなければならないと教諭やボランティアの人は感じている。

2013 年 1 月 9 日

1 年生のアリサちゃん(既出:母親フィリピン・父親ペルー出身の日本育ち、家では日本語を使っているらしい)・マナミちゃん(既出:日系ブラジル人の両親を持ち、家では日本

語だが、「ブラジル育ちの親の日本語」(ABC ジャパン W 氏談)。マナミちゃんはブラジル生まれだが、出産のための帰国であり、ブラジルでの生活経験はない。小学校3年生のナミちゃんとアイちゃん(二人とも日系ペルー人の両親を持ち、ペルー生まれ。)を担当した。前回の放課後教室で担任の先生が「マナミちゃんの日本語能力はあまり高くない」とコメントしていたが、放課後教室では頑張って勉強していた。確かに日本語に関しては、日本人の生徒に比べると劣るかもしれないが、マナミちゃんは学習意欲が高いように見えた。宿題となっていた足し算のプリントを1人で自主的に解き終えた後、音読を練習した。1年生の国語の「日づけとよう日」という詩の音読が宿題になっていたので、2回、練習した。1回目は「月曜日」「木曜日」「六日」「七日」を読むことができなかったが、2回目は上手く音読ができた。そのあとは、「プリントやりたい!」ということだったので、1年生の漢字のプリントをいっしょにやった。「習ってないけど知ってるー」とかなり積極的に問題に取り掛かっていた。だだ、「はな(花)」、「あめ(雨)」、「した(下)」などは読めるにもかかわらず、「はなび(花火)」「あまやどり(雨やどり)」「下る(おりする)」など少し応用になるとなかなか解けなかった。「音楽(おんがく)」は読めたが、「虫の音」は「むしのこえ」と呼んでしまった。漢字というよりも文章の前後関係でなんて読むのか考えている様子もあった。プリントでは、適当に並んでいるカタカナを並び替え、料理の名前に直すという問題があったのだが、「カレーライス」を「ライスカレーかな?」という発言など、日本人の子どもにはあり得ないミスをした。(ライスカレーも存在するかもしれないが)また、「クリームシチュー」という言葉を知らなかった。食生活が日本と違い、家で食べたことがないのかもしれないと思った。「マナミ(真奈美)」って漢字で書けるよ!」など、読めない漢字もあるものの、漢字に対する抵抗感はあまりないようだった。その一方、同じ1年生のアリサちゃんは、マナミちゃんが算数・音読・漢字をやる間に、算数のプリントを1枚しか終わらすことができなかった。時計の模型や計算用のおはじきをさわってしまうなど、注意してもなかなか集中できていない様子だった。「日づけとよう日」の音読も「漢字が読めない」と取り掛かるまでにかかなりの時間がかかった。また、自分で読むことができず、ひらがなが読めるかも少し疑わしい状況であった。(読めるのだろうが、文字を読むことに抵抗感があるような感じだった)最終的に、筆者が1行ずつ朗読して、それについて読んでもらった。同じ1年生だが、1年間でマナミちゃんとアリサちゃんの学力は差がついてしまっているようだった。

1年生は国語の教科書の音読が宿題になっている。「おんどくカード」というものがあり、「日付」「回数」、「はっきり読めた」「スラスラ読めた」「おうちの人のサイン」「先生のサイン」という項目があり、「おうちの人」は、「はっきり読めた」「スラスラ読めた」を「◎よくできた○できた△もう少し」のいずれかを書き入れ、サインをする。マナミちゃんの音読カードには、明らかにマナミちゃんの自筆で「おうちに人のサイン」に母親の名前を書いていた。以前、学習支援を担当した3年生のミリちゃんも同様であった。アリサちゃんは日付のみを記述していて、空欄だった。「お母さんが働いているから」書けなかったと

言っていた。音読カードや音読の宿題は、おそらくどの小学校にも存在している。(筆者の小学校でもあった)「音読(漢字を含む)の達成度」を先生や親が確認し、子どもに対してフィードバックする音読カードだが、日本人の間では成立している仕組みでも、外国人にはまったく意味のないものである。日本育ちの子どもの方が親より日本語が上手であり、日本語ができない外国人の親は音読を聞いてあげることができない。全員が音読カードで音読の練習をする決まりになっているので、外国人の子どもにも音読カードを与えていると予測される。

3年生のアイちゃん、ナミちゃんはともに日系ペルー人の親を持つ。宿題になっていた漢字の書き取りを指導した。二人とも漢字を書くことはできるが、でたらめな書き順で書いている。指摘しても、その書き順に慣れているせいかなかなか直すことができない。また、「こっちの方が書きやすいから」と鉛筆を正しく持つことができない。2人はいつも放課後教室にいっしょに来ているらしく、お互い話しかけたり、ちょっかいを出し合ったりとなかなか集中できない。1時間で、ノート1ページ分しか終わらず、「残りは家でやる」と言っていたが、はたして本当にやるのか疑問に思った。教室が終わった後、2人の語学力がどれくらいであるのか気になり話をした。家ではスペイン語なのかと問うと、二人とも親が日本語を話せないのでスペイン語で話しているという。ただ「スペイン語だとむずかしいことはいえないの」と言っていた。また、ペルーには何回か行ったことがあるのかを聞くと休みの時は戻ることがあるそうだ。「夏休みにペルーに行っている間に漢字を全部忘れちゃった。」

家でもペルーの親戚の家でも、スペイン語で話しているというアイちゃんとナミちゃんであるが、終始、二人の会話は日本語である。つまり、ごく簡単な表現を聞き取り、家族と基本的なやりとりを行える程度のスペイン語能力であると思われる。むしろ会話に関しては日本語の方が得意だが、読み書き・漢字になると理解力がほかの子どもに比べて、低い。母語も日本語も中途半端で、複雑な思考ができないダブル・リミテッドの兆候が見られた。

「つるみ〜によ」後の教諭・国際教室担当教諭・ボランティアを交えた反省会では、今年度の振り返りと来年度の活動について話し合った。ボランティアの一人が「来年度は何人の外国につながる子どもが入ってきますか」と尋ねると、学校側は「わかりません」と答えた。曰く、外国籍の子どもは何人いるか学校側も把握しているそうだが、日本生まれ、名前が日本人であるが、親が外国籍である子ども(つまり、「外国につながる子ども」)を把握しようがないそうだ。ただ「年々増えているので、今年度同様、20人くらいかそれ以上ではないか」というほとんど根拠のない予想しかできていないのが現状であった。ボランティアも生徒の人数に対して、かなり不足しているので、ボランティアをどう確保して

いくつかについても議論になった。



写真 8 潮田小学校国際教室 (筆者撮影)

②中・高校生への学習支援

鶴見国際交流ラウンジでは慶應義塾大学の生徒がボランティアとして「外国につながる子ども」に授業の補講を土曜日の放課後に行っている。現在、高校受験を控えた中学生 5~6 人、高校生 3 人程度が勉強しに来ている。勉強の補講とは別に「まなぶ」「つながる」「ひろがる」をコンセプトに「高校生の居場所プロジェクト」を鶴見区役所助成のもと開いている。両親が日本語を話せないことや、経済的にも恵まれていないことで、行動が狭まりがちな高校生が非行に走らないよう交流を促進するイベントを月に一回開いている。

2012 年 12 月 8 日、鶴見国際交流ラウンジにて、高校生に学習支援をすることになった時、高校レベルの数学を教えることができるか、不安になったが、実際に指導したのは小学校レベルの漢字と中学生 1 年生レベルの数学であった。大学生のボランティア 5 人に対して、来てくれた高校生は 2 人であった。高校生 2 人は勉強しに来ているというよりは、大学生と話したくて来ているようであった。そのため、勉強開始までに時間がかかった。工業高校の 1 年生、フィリピンと日本人のハーフ、5 年前に家族と共に日本に来たマイケルと南米にルーツを持つ定時制高校の 1 年生のユウタは、日常会話ができているが、漢字が非常に苦手である。小学校 3 年生の漢字ドリルのテストに半分以上答えられないような状況である。小学生用の漢字ドリルのプリントを渡し、練習してもらおうが、このやり方で覚えられるか疑問に思った。普通、日本人が漢字を覚える際は、小学校・中学校でかなりの

時間を割き、ノートに書きとって覚えるまで練習する。小学校では毎週、单元ごとに漢字テストがあった。日本の常用漢字は約 2 千字と言われ、そのうち小学校 6 年間で習う 1006 字である。漢字に対する知識がゼロであると高校 1 年から高校卒業までに 1 年で 700 字を覚えさせないと、日本人に追い付けない。しかし、これは不可能に近いと思われる。「外国につながる子どもたち」や日本で生活経験の少ない外国人に、漢字をどこまで覚えさせればいいのかを定める必要があるように思った。毎回、漢字のプリントを配って、練習してもらう程度では、「焼け石に水」状態である。どのように覚えさせるか、どこまでの理解度を目標にするのか、現段階では日本人と全く同じカリキュラムで学習しているが、これを解消し、「外国につながる子ども」のための学習カリキュラムが必要であるように思えた。小学校にしても中学校にしても勉強を教えるボランティアが果たしている役割は非常に大きい。しかし、その子どもの学力と受験などに求められている学力にかなりの差があり、中学校、小学校とさかのぼって教えなければいけない場合、どこからはじめればいいのか教え方がわからない。ボランティアが自己流で教えざるを得ない状況にあると感じる。外国につながる子どものための学習メソッドやカリキュラムが必要であるように学習支援を通して感じた。

慶應義塾大学法学部の S 氏は『「高校生居場所づくりプロジェクト」』というプロジェクト名ですが、来てくれる子は居場所があるのではないかと思います。」という。「本当に難しいことは、埋もれている子どもをラウンジに呼び込むことだと思います。」S 氏ら大学生のプロジェクトは参加者の顔ぶれが似たような感じであり、高校生よりもボランティアの大学生が多いという。新規で来てくれる高校生を増やそうと鶴見総合高校で 100 枚程のビラを配ったが、イベントに 1 人も来てくれなかったという。高校生はバイトなどで忙しいという事情があるらしいが、人を集めるのには苦勞している様子だった。最初の方は来てくれた子でも、強制力がないので、途中で来なくなってしまう子どもも多いそうだ。以下は、川崎市川崎区、「ふれあい館」『「高校生居場所づくりプロジェクト」』で出会った「外国につながる」高校生たちである。

エミリ：川崎市内の中学校 1 年生。両親はフィリピン人で、フィリピンのマニラ生まれ、来日 5 年目。日本語の日常会話は問題がないように思えた。英語を教えたが、すでに習っている助動詞 Do と Be 動詞の使い分けが理解できていないなど、英語はいちからやり直さなければいけないような状況であった。ただ、まだ中学校 1 年生なので、本人の努力や周りの支援次第で追いつけるのではないかと思います。手遅れにならないように早めの措置が必要ではないだろうか。動詞、形容詞、副詞の説明をするものの筆者の説明が上手くなかったせいなのか、エミリが日本語を 100%理解できていないせいなのか不明だが、文法の説明を理解するのは難しそうだった。基礎的な英単語もすべて日本語で覚えなければいけないことに苦勞している様子だった。例えば Favorite の日本語訳が「お気に入り」であるときは理解できず、より簡単な日本語「好きな」と置き換えれば理解することができた。並び

替え問題はすべて適当にやっていた。フィリピン人である両親は英語がほぼ完璧に話せるようだ。エミリの英語に関しては親の協力を得たいと思った。

クリス チャン：川崎市内の中学校 2 年生。両親はペルー人（日系なのかは不明）で、本人もペルー生まれ。来日 1 年たっていないが、基本的な日本語は話せる。ただ、授業についていくことは難しいのではないかと思う。

マイケル：工業高校の 1 年生、フィリピンと日本人のハーフ、5 年前に家族と共に日本に来る。漢字が非常に苦手。小学校 3 年生のドリルでいっしょに勉強する。アイドル好きで、アイドルの名前で漢字を覚えている。九九を覚えていないので、数学も小学校のレベルから教えている。

ユウタ：定時制高校の 1 年生。マイケルと仲がよく、いつもいっしょにいる。ペルー、ボリビア、スペイン、日本（日系人）の血が入っている。顔立ちも背丈もやや日本人離れしている。日常会話は問題がないが、勉強嫌いで、マイケル同様、小学校 3, 4 年生の教材で漢字を勉強する。

タケシ：鶴見区内の高校 2 年生。ペルー生まれ、3 歳で鶴見に家族と共に移住。家ではスペイン語だが、タケシはスペイン語よりも日本語の方がずっと得意。「親は全く日本語が話せません。でも、ぼくはもうスペイン語があまり話せなくなりました。」割と真面目で大学進学を目指し、今から受験の心配をしていた。顔立ちも話し方も服装も日本人と全く変わらない。しかし、「もっと外国の文化を日本人に理解してもらいたいな」「文化の違いで、近所の人とトラブルが起きたことがあった」とつぶやいたことがあった。

一時はラウンジにも顔を見せなくなったが、「今まで勉強教えてくれたり、遊んでくれたりしていた大学生が来年に就職して、会えなくなっちゃうから行かなきゃと思って」ラウンジに勉強しに来るようになった。慶應生とタケシくんらは出会って 2 年である。2 年間で得た絆は大きい。

エリナ：鶴見区内の高校 1 年生。ペルー生まれ。幼い時に日本に来た。勉強は教えたことはないが、話している限り、日本語に全く問題はない。

ナミエ：鶴見区内の高校 1 年生。ペルー生まれ。幼い時に日本に来た。最近「忙しくなった」ため、放課後教室になかなか顔を出せなくなってしまったが、メールで呼び出されたので、クリスマス会や書初め大会に参加した。タケシとは遠い親戚である。最近、塾に通い始めた。

学習ボランティアとしてともに活動した大学生に話を聞くと外国につながる子どもたちには「夢がない」という。もちろん、将来の夢は「コンビニの店長」や「焼き肉店でアルバイト」なのだそう。慶應義塾大学法学部塩原良和教授によれば日本の進学システム（特に高校受験）における日本語のハードルが非常に高く、「日本語ができないと将来が限られ

ることにはうすうす気が付く外国人もいる」。中学生の時点で日本語能力や「どうせ自分はダメだ」と思いこんでしまう傾向にあるようだ。意識をどう変えていくかが今後の課題となっている。

筆者の印象としては、確かに学力は十分ではないが、補習に来ている子どもたちはまだましなのではないかと思う。学校に通い、勉強する意思があり、同級生やボランティアの人たちと人間関係を築こうとしているが、学校側方も行政側からも見えず、呼びかけにも応じない子どもたちが存在している。ABC ジャパンによれば、このような不就学の子どもたちが、「把握できないが、山のようにいる」のだそうだ。鶴見国際交流ラウンジの S 氏によれば、学習支援教室に来ている中学生の高校進学率はほぼ 100% だそうだ。(全日制か定時制かはわからない) ただし、現在、ラウンジに来ている中学生と高校生は合わせて 10 人程度であり、鶴見区には 9670 人の外国人登録者数がある中、外国につながる中学生・高校生全体の代表であるとは言えない。勉強を見てくれる人や受験の情報を得ることができる場所があるだけで、高校受験は有利になる。定員割れしている高校であれば、多少、学力が足りていなくても入学できるという事情があり、行ける高校はあっても行きたい高校にいけないかはわからない。それでもなお、外国につながる子どもの大学進学は依然、厳しく、高校の授業についていけないことで中退してしまうケースは多いようだ。ただ、全日制の高校進学できるか否かはその後の職業選択における大きな分かれ道であり、南米の子どもたちにとって依然としてハードルが高いことは事実である。

小学校の国際教室や鶴見国際交流ラウンジでは、学校の宿題や授業の補習を行うが、筆者が接した「外国につながる子ども」のほとんどが、学年相当の学力がついていなかった。小学校であればまだそれほど差はついていないのだが、高校生・中学生が漢字や九九でつまづいているということが珍しくない。どこまで遡って教えればいいのか非常に困った。ボランティアは非常に意欲的に教えている。その日に教えたことについて記録を残しているのだが、月間、年間単位で学習のスケジュールを管理していない。(学校の先生や塾の先生ではないので、細かいカリキュラムを作ることが時間的な制約などで厳しい) その時に、学習を担当したボランティアが、何を教えるか決めるようでは、学年相当の学力になかなか追いつかないのではないかと思う。

さらに小学生であっても 1 年生のアリサちゃん、マナミちゃんの例にも挙げたように学力の差がついてしまっている。それは誰の目から見ても明らかなのだが、追いつけるようにするにはどうしたらいいのか、誰も具体案を提示することはできない。

日本の小学校・中学校の場合、日本語の読み書き、漢字にかなりの学習時間を割く。特に小学校時代の音読練習は親が指導できるか否かでかなりの差がついてしまう。

鶴見国際交流ラウンジ、スペイン語担当の N 氏は、学校で子どもがもってくるプリントなどがすべて日本語で書かれているため、親はそれが全く読めず、情報が行き届いていないことを指摘していた。学校からもってくるプリントをラウンジに持ってきて、翻訳

を頼む親もいるそうだが、全てを翻訳できるわけではない。「音読カード」や学校のプリントで日本語ができない親を持つ子どもにとって、無意味なものになっていないだろうか。ix

③把握できない不就学の子どもたち—日本語教師 Y 氏へのインタビュー—

潮田小学校の目と鼻の先にある鶴見総合高校で日本語教師をしている Y 氏とお話をした。

鶴見総合高校では、もとは主に南米系の子どもたちが進学できるよう、外国人枠を 15 設けた。この枠は、神奈川県立で入試に外国人枠を設けている 10 つの学校のうち一番多い。実際に入学する 20 人程度の外国人のうち 8 割が中国人、2 割がフィリピン人であり、南米系はせめて 1 人、2 人と言う状況であり、Y 氏は様子を見てくるよう、高校から頼まれ、派遣されているようだ。中国は一般的に教育熱心であり、漢字圏と言うことで日本語の漢字を習得しやすい。フィリピンは英語圏であり、英語の試験で高得点をマークできる子どもが多い。Y 氏の話では南米系の子どもたちは、はじめから普通科への進学の意志がなく、定時制高校に行く子どもがほとんどであるという。南米系の親は、自分たちが話せない日本語ができていて安心してしまうという。なかなか、普通科の高校へ進学できる学力を携えることは難しい。鶴見総合高校のホームページを見たところ、英語・中国語・韓国語・ポルトガル語の入学案内にアクセスすることができたが、ホームページ全体で得られる情報と比較するとかなり限られている。「外国人の方へ」というページもあり、ふり仮名をふった優しい日本語で説明が書かれているが、日本育ちの子どものレベルならともかく、おそらく親はこれを読むことができない。そもそも「外国人枠」の存在がどれほど知られているのが疑問である。神奈川県教育委員会+NPO 法人多文化共生教育ネットワークかながわ (Me-net) が発行している「神奈川県の「公立高校入学のためのガイドブック」^xという冊子は右が日本語の説明、左が外国語の説明になった全 19 ページ (38 ページ) で、神奈川県の公立高校の入試制度が説明されている。ただし、かながわ国際交流財団の F 氏の話によれば「この冊子がどれくらい外国人に読まれているか疑問である」日本では高校を卒業しないと将来がかなり限られてしまう。Y 氏の話では南米系の男の子は高校を卒業せず、電設業に勤める。女の子は同じく南米系の人と結婚して、日本と南米を行き来するような不安定な生活を続ける人が多く、就ける仕事と言えば、アルバイトくらいしかないようだ。Y 氏は「こういう事実があることを頭の片隅に留めておいてほしい」と筆者に語った。

潮田小の「外国につながる子ども」の 71 人うち、53 人が南米系で、11 人がフィリピン、中国は 1 人である。もちろん、近くに別の小学校もあるのだが、この地区の外国人移住者の中でマジョリティである南米系の子どもが高校になるとマイノリティになっているという事実は特記すべきである。南米系の子どもの高校進学率を鶴見区役所に問い合わせたところ「南米系の子どもの高校進学率、不就学児の統計については、鶴見区役所ではデータを持っていない状況です」という回答であった。また、NPO 法人多文化共生教育ネットワークかながわ (Me-net) にも問い合わせたところ「把握していない」との回答であった。

ただ、不就学の子どもや高校進学ができない「外国につながる子ども」が多く存在しているのは確かである。

2.4 鶴見区での南米系外国人移住者へのインタビュー

a. 日系ブラジル人母親世代

M氏

I氏

S氏

A氏

2012年12月22日、11時～13時半、NPO法人ABCジャパン事務所にて、食べ物をみんなで持ち寄り、忘年会が開かれた。小学校でのボランティア活動を通じ、ABCジャパンの方と知り合いになり、この忘年会の存在を知った。決してオープンな会ではなかった。筆者は「招かれざる客」であったが、この時以外にブラジル人が集まり、話を聞ける機会はないと思い、このチャンスにかけていた。半ば無理やり参加してしまった感じは否めない。しかし、ここまでしなければ外国人と接触することは不可能なのだ。大量の軽食やお菓子を差し入れとして持っていき、事務所に最後の一人が残るまで現場に残り、できる限り多くの情報を集めた。鶴見で現地調査を開始し、2か月が経過していたが、親世代の南米系外国人移住者のコミュニティの中に入り込めたのは初めてだった。

忘年会の参加者は約20人程度でABCジャパンの活動に関わる日本人やABCジャパンで日本語を習っている日系ブラジル人（主に30代から40代で、鶴見地区に住む、小学生の子どもを持つ母親）が集まった。ブラジルの揚げ物やパン（ポンデケージョ）が並び、ポルトガル語が飛び交っていた。

見た目では日系人なのか日本人なのかわからない。日本の苗字と名前を持つと同時に「ルシアナ」や「イルネ」などのミドルネームを持つ。日本人と会話する時は日本語であり、多少、なまりや細かい文法の間違いはあるもののコミュニケーションは日常会話程度であれば問題なくとれる。日系ブラジル人同士が集まれば会話は完全にポルトガル語になる。彼女たちの子どもは日本生まれで、潮田小学校や鶴見地区の小学校に通っているのだが、本人たちは20年程前に日本にやってきたブラジル生まれであり、入国当初は日本語が全くできなかったという。A氏（推定：40代）だけが、日本に来てまだ数年であり、簡単な日本語しか話せず、筆者と話す時は他の方が間に入り、通訳をした。A氏の子どももブラジル生まれであり、日本語の教育が必要な生徒として、鶴見区の小学校で通訳ボランティアに授業のサポートをしてもらいながら勉強している。

ごはんやケーキを食べながらブラジル人のお母様方と話し、ラテン系特有の非常にオープンで明るい性格を持っている彼女たちとすぐ打ち解けることができ、アンケートに答えてほしいとお願いすると快く承諾してくれた。しかし、日本語で書かれたアンケートを見るなり、「日本語だ」と、表情が少し曇った。「話すことはできるから、聞きたいことがあれば話しますけど、読むのと書くのは外国人にとってかなり難しいです」「外国人に見せる時は、ローマ字かカタカナで書いてくれないと絶対に読めない。ポルトガル語、もしくはスペイン語で書かれているのが望ましい」などのコメントをもらった。筆者は極力漢字を使わず、やさしい日本語でアンケートを作成したつもりであった。漢字にはふりがなをふり、文字を大きくするなど考慮していたつもりだったので、「これなら読めるだろう。むしろ簡単な日本語すぎて失礼なのではないか」とまで思っていたが、それは完全な認識違いであった。日本語でかかれた文章は、読む気にもならない様子だったが、アンケートの答えられる箇所を一生懸命、記述していた。

浜松市の調査^{xi}や様々な文献・報告書が指摘しているよう日常会話が問題なくできても、読み書きができるか否かは別次元である。特に外国人が日本語を勉強する場合、ひらがなやカタカナは簡単に習得できても、漢字を「ほぼ完全にできる」ようになることは難しい。(浜松市の調査では、漢字が完全にできると答えた南米系外国人はわずか5.5%である。)学校教育の場でも同様である。日本で生まれ、日本の教育を受けて育ったりしている「外国につながる子ども」は日常会話ができるゆえに見過ごされがちだが、家庭で日本語を使用しないために、他の日本人生徒に比べ、日本語能力が低く、授業についていけないケースが非常に多い。そのことを教育の現場はもとより、日本における多文化共生の実現に向けて、認識されるべきことである。^{xii} ブラジル人のお母様方と話し、自分の認識違いやデータだけではなかなか見えてこない言語の問題を実感することができた。

今回インタビューに答えてくれた5人の日系ブラジル人の母親たち5人全員が、「日本で暮らすうえで最も苦勞すること」という質問に対し、「日本語という言語が非常に難しく、1番苦勞するのは絶対に日本語である」と断言していた。日本語の難しさは、漢字の習得が非常に困難であることが挙げられ、来日20年目のS氏は「普段の友達と使う日本語とお店の人が使う日本語が全く違うなど使言う相手によって変化する日本語の幅の広さに苦勞している。今でも仕事関係の丁寧なメールを送るときは非常に時間がかかる」と日本語の敬語の使い分けのむずかしさを指摘していた。JR 鶴見駅の路線図にはローマ字表記がなく、1番安い切符を購入して、目的地で清算しているようだ。鶴見は区を挙げて多文化共生を打ち出し、区役所のHPは7か国語+やさしい日本語+ルビ付きで見ることができたり、鶴見国際交流ラウンジは7か国語の生活情報誌を発行したりしているが、「もっとポルトガル語の表記が増えるといい」という意見が上がった。「言葉の壁が大きく、自治会や子育て会にも入れない」という声も聞かれ、言語の問題は深刻であることが分かった。

日系ブラジル人の母親世代と他愛もない会話をするときの日本語は問題がないが、「日本で暮らすうえで困った事」「日系ブラジル人と日本人が共生するためには何が必要か」など、少し複雑な質問になると会話が少しずつ度切れる。「英語で話してもいいか」と言われたので、英語でインタビューをすることになったが、英語は決して上手ではなかった。結局、日本語に戻った。筆者もできる限り、わかりやすい日本語でゆっくりと話し、相手の言っていることに耳を傾けた。比較的話せる人が多い英語が母国語であるならともかく、日本でほとんど使われないポルトガル語・スペイン語しか話せない場合、生活に支障をきたすと思う。答えてくれたアンケートの中には時々、「estacion」「hostital」「capoeira ivento」ポルトガル語の単語が見られた。「駅」、「病院」、「カポエラのイベント」と言うことはできても、読み書きへのハードルが非常に高い。

b. 日系ブラジル人 中学校世代

R (潮田中学校三年生・ブラジル人)

- ・ブラジル生まれ。日本在住 14 年。ただし、日本とブラジルを行き来している。
- ・潮田小学校卒業後、すぐとなりの潮田中学校に進学した。
- ・家ではポルトガル語。自分はバイリンガル。バイリンガルになるまでは 2 つの言葉を使わなければいけないことに混乱し、習得するまでに苦労した。両親は全く日本語が話せないなので、通訳になる。
- ・潮田地区に住んでいるため、JR 鶴見駅近くの鶴見国際交流ラウンジまで徒歩 30 分以上かかる。「もう少し、ラウンジが近ければなあ」と言う。
- ・高校進学を目指して、ラウンジの補習教室に通い、ボランティアの大学生から受験現況を教えてもらっている。学校の授業にはついていけない。
- ・R は「英語と数学はなんとか。日本語は関係ない科目だから割と得意。」「国語や漢字はとも苦手だけど、日本語は問題ない。」という。
- ・漢字テストでは「本日」を「にほん」、「元日」を「げんじつ」と読んでしまった。
- ・日本人と外国人が共生するうえでの課題を問うと「1 番の問題は言葉だと思う。言葉が通じないから、近所のトラブルがあった時、ブラジル人は誤解される。」
- ・「ブラジル人は身振り手振りが大きい。話し声も大きい。日本人は逆。「あ、どうも」と小さくお辞儀をするかんじ。全然そういうところが違う。」「言葉が通じないときに、ブラジル人はジェスチャーで伝える。日本はあまりそういうのがない。ジェスチャーとか声大きいと変な人に思われる。ただ、文化が違うだけなのに。なかなか日本人はわかってくれない。」

c. ABCジャパン A氏（日系ブラジル人）

- ・在日通算 20 年で大学生の子どもがいる。
- ・日本にいても「未来がない」と思う。私と家族はいずれブラジルに帰る予定である。ただ、家族全員が帰るとなると渡航費が 100 万円以上かかる。ブラジルに帰りたくても帰れない人がたくさん存在している。
- ・「日本政府がブラジル人を受け入れた時、“人”ではなく“労働力”としか見ていなかった。でも、実際に来たのは“人”であった。」
- ・ブラジル人の子どもは義務教育の対象ではないので、「埋もれている不就学の子ども」を把握することが出来ない。学校教育も言語教育も十分に受けられていない子どもが「目には見えない」かたちで数多く存在している。10 年後、その子どもが大人になった時に大変な国際問題に発展するだろう。
- ・20 年前、来日した当初、ブラジル人たちは死ぬほど働いていた。（毎日残業 4 時間）そのため、子どもを教育している余裕がなかった。（その日暮らして精一杯）
- ・（ボランティアなど草の根の部分）は活発に活動していて非常に助かっているが、上（政府）が動かない。
- ・国（政府）がこの問題に対して動き、法律が変わらなければ、何も変わらない。

d. ブラジル食料品店 R（営業中のためインタビューは断念したが、その様子について）

小規模社会実験（後述）の宣伝のためにポスターを貼らせてもらった時、本町通商店街にある日系ブラジル人が経営している食料品店に目をつけたお店がある。ブラジルの国旗やサッカー選手の写真が大きく飾ってあり、ラテン系の音楽がかかっている日本の食料品店と違う、日本人から見てやや入りにくいお店である。外にはポルトガル語の各種広告（ダンスパーティや他のイベント）が貼ってあり、ラックにはブラジル人用向けの無料雑誌（フリーペーパー）や鶴見交際交流ラウンジのイベント広告が置かれていた。

顔立ちは日本人のようだが、原色の服を着た日本人の小学生とは少し違う風貌の子どもたちが店内に座っていた。店内には南米系のスパイスや日本では見かけない食材が並んでいた。時折、スマートフォンとパソコンを見ながら働いていたレジにいる若い女の人にポスターを貼れないか頼むことにした。「ふーん……たすけあいの感じですか？」反応は少し鈍かった。「多文化共生」や「外国人に対するサポート」という鶴見区やボランティアの方々が進めようとしていることに対して、少し飽き飽きしているのではないかと感じた。彼女は「社長（おそらくこの店の経営者）に聞かなければわからない」ということだったので、社長が返ってくるという 1 時間後にまた店に来てほしいと言われた。

1 時間後、レジには 40 代くらいの女の人がレジを担当していた。「社長」と思われる。事情を説明したところポスターを貼っても構わないとのことだった。日本語は最初に出てきた若い女性に比べてあまりわからないようだった。話してみた感じだと、簡単な日本語を使ったりすれば意思疎通ができるが、とっさのコミュニケーションは少し難しい様子だっ

た。後にこのお店について調べたところ、オーナーは20年以上、鶴見で生活をしているそう
うだ。

2.5 鶴見区でのステークホルダーインタビュー（個人）

日本人

a. 地域住民 U 氏

50代女性

・「すぐわかりますよ。あの人、ブラジル人だって……。」（U氏が働いている）潮田地区センターで遊んでいるのは子どものみだが、親が迎えに来ることがある。ただ、親は地区センターに入ってくるときに、日本人は会釈くらいするが南米人の人は黙って入ってくるので、見た目は日本人と同じでもすぐわかる。親も挨拶をしないから、子ども地区センターに入るときに挨拶をしない傾向にある。挨拶をしない理由は、言葉ができないからなのか、消極的なのか、挨拶やお辞儀をする文化が向こうにはないのか、わからないが、気になる点である。

・親は全く日本語がしゃべれないようだ。ただ、子どもは上手に話す。

・親は子どもへのポルトガル語（スペイン語）教育には非常に熱心である。

・鶴見のこの辺りは、もともと沖縄から出稼ぎに来る人が多かった。沖縄などから南米に移民するために、いったん横浜港を経由した際に、南米に渡れなかった人が住み着いたケースも多い。

・地区センター近くのモスバーガーは南米人のたまり場になっている。モスバーガーには普通いないようなおじさん（40~50代くらい）が来ているので、はたから見て異様に見える。（駅前のモスバーガーでは見られない光景）どうやら集まって、情報交換をしているらしい。

・年々、南米人は増えているように思える。商店街にブラジル専門店ができるなど、商店街も昔の商店街と変わってしまった。「本町通商店街もここ10年ですっかり変わってしまいましたね。もはや“商店街”ではないですよ。ブラジルのお店ばかりになってしまいましたね。この商店街のエリアの半分くらいはブラジル人じゃないかねえ。本当にこのあたりは多いです。」

b. 地域住民 Y 氏

60代女性「ずっとこの辺りに住んでいますので、何でも聞いてください」

・近所にたくさん外国人がいるので、こちらから「こんにちは」とあいさつするようにしている。ご近所なので外国人であろうがなかろうが挨拶するのは当然だと思う。相手は会

積するような感じ。ただ、慣れるまでは大変だった。やっと、挨拶程度の付き合いができるようになった感じである。

- ・挨拶以上の付き合いはしていない。言葉が通じないのでできないのではないかな。言葉が通じればいいと思う。

- ・夜道を歩いていて、ポルトガル語が聞こえてくることがある。見た目は日本人に見えるから驚くことがよくある。

- ・10年前くらいから、どんどん増加している印象。

- ・見た目ではわからない。買うもの（食料品・肉類）が違うようだ。やはり、文化が違うなと思う。

- ・親は近所に溶け込んでいないように見えるが、子どもたちは日本人・南米人関係なく遊んでいるように見える。日本語も非常に上手である。スポーツをやりに多くの小学生が地区センターに来ているが、南米の子も交じっていっしょに遊んでいる。日本に来たばかりでポルトガル語（スペイン語）しかできない子どももいる。そういう子どもには先に来日した子どもが通訳をしている。

- ・（「近所でのトラブルはありますか？」）夜遅くまで騒ぐ、窓を開けて大音量で音楽をかけてうるさいということがあった。その時は、町内会経由でその苦情が伝わり、改善された。

- ・あるマンションに一人ブラジル人が来て、アパートに空きが出ると仲間（親戚）を呼ぶ。いつのまにかマンションがブラジル人ばかりという状況になっている。

- ・（「鶴見国際交流ラウンジに行ったことはありますか？」）行ったことはない。ラウンジのイベントはハードルが高いような気がする。言葉が通じないので、「南米の歌を歌おう」とか「南米のダンスを踊ろう」とかは行く気になれない。学生会館（地区センター上）が主催となっている外国の料理をつくろうというイベントは興味がある。年配の方も参加しているようだ。

- ・南米人の親は日本語がまったく話せない。子どもは非常に上手に話す。子どもが親の通訳をしている光景をよく見る。

日本語が上手な子どもは同級生と付き合うことができるが、言葉がほとんどできない大人は近所づきあいをするのができない。文化・習慣の違い以上に言葉が話せないことが、挨拶以上の付き合いができない根本的な要因である。地域住民のU氏もY氏も「南米系の母親は日本語を全く話すことができない」その一方で、「子どもたちは日本語を上手に話す」と言っていた。しかし、教育の現場に行くと「日本の生徒に比べ、日本語能力が低い」との声が上がる。日常会話については問題がないように見えてしまうゆえに、外国人とあまり接触したことのない人は、外国につながる子どもたちの読み書き能力の欠如が見逃されがちである。

また、U氏が「ブラジル人が多い」と言っていた本町通商店街は、一部のお店は、シャッターが下り、活気があるとはいえない。調べてみたところ、ブラジルの食料品店が1軒、

ブラジル料理店が1軒、ペルー料理店が1軒、実際に南米のお店は3軒しかなかった。ただし、これらのお店は大きな国旗が飾ってあったり、ポルトガル語・スペイン語のポスターが貼ってあったりしていて、日本人がなかなか行きづらいような雰囲気があり、目に留まりやすく、インパクトも強い。商店街や町内会において「日本語ができない」南米系外国人移住者の共生はなかなか進まないように思えた。

鶴見区役所のN氏によれば、「外国人と共生する」という意味で町内会は、最前線であり、「外国人が町内会に入り、行動できれば日本人社会になじめたといってもいいでしょう」。ただ、南米に近所づきあいする習慣はないし、自治会費を払いたくないと思うのがふつうであり、外国人が町内会に入ることはかなりハードルが高い。^{xiii}なかなか入り込めない社会です。南米に近所づきあいする習慣はないし、自治会費を払いたくないと思うのがふつう。回覧板などはすべて日本語（漢字）で書かれている。

2.6 外国人移住者（南米系以外）のキーパーソンへのインタビュー

a. 鶴見国際交流ラウンジ中国語担当 K氏（中国籍）

（国際交流ラウンジに勤めている立場からお答えいただきました。）

「日本語を教えるボランティアは昔からあり、昔はただの善意で行っていても問題はなかったが、今やボランティアは責任のある存在となるべきで、ボランティアが外国人に対して指導要領なしに自由に日本語を教えたり、一方的に日本語を押し付けたりする時代ではない。全体をマネジメントできるコーディネーターが今後必ず必要になる。」「個人の情報を平気で流すボランティアや自分のやり方を押し通すマナーの悪いボランティアもいるのは事実である。ただ、ボランティアという存在なので「来ないでください」ということはできない。ボランティアが外国人に対する日本語力向上に欠かせない存在であるのは疑いがなく、鶴見では日本語を教えるボランティアになりたいと手を挙げる人は多く、助かっているが、ボランティアをマネジメントするシステムが必須である。行政の人がマネジメントするべきだが、予算が厳しく、結局はボランティアがすべてをやっている状況になっている。ラウンジのスタッフは自活していくだけの収入を得ることができないため入れ替えが激しく、多文化共生に対して継続した政策を考えられない。窓口相談への対応に追われ、日本語教室のカリキュラムや交流イベントを考える時間がほとんどない。新しいこと（新たな交流イベント）をやりたい気持ちはあるが、言ってしまえば仕事が増えるので言わない傾向にある。行政は成果を出しても出さなくてもほとんど給料に影響しないので、本気で多文化共生を促進するために現場で取り組んでいる人（おそらく、ボランティアの一部やNPO団体、外国人の相談を受け持ち、最前線で外国人と接するラウンジのスタッフなど）が報われない体制はよくない。

b. 鶴見区母語サポートボランティア Y氏 (中国籍 在日 16年)

「横浜市の国際交流イベントに昔はよく行っていた。とにかく日本を知りたくて、日本の外国人に対して厳しい社会になじむためには自分から行動しなければいけないと思った」
「行動しなければ何も変わらないし、日本で暮らすうえで1番の壁である日本語の上達にもつながらないそのため、交流会参加したり、近くの日本人と積極的に交流を持とうとしたりと努力したりした。1人に断られても10人に話しかければそのうち1人くらいは返してくれるはず。」「1番苦労したのは言葉であり、初めの方は相手の言っていることはわかるのに自分が思っていることがなかなか言えず、悔しい思いをしていた。それでも自分なりに努力して、今は日本社会になじむことができたと感じている。」「外国人の中には積極的に行動しない人もいる。交流会に行かない人は時間のない人だが、やはり自ら動かなければ社会になじむことはできない。」

南米系以外の外国人移住者として、中国籍のK氏、Y氏に意見を伺った。彼女たちは積極的に地域社会に参加している「キーパーソン」と呼ばれている人に相当する人である。

筆者が「なじめている人といない人の差は何でしょうか？」と鶴見区役所でインタビューで訊いたことがある。「『覚悟』の差ではないでしょうか。日本で生きていくしか道がないという覚悟を持たた人は語学の習得もがんばる。いつか国に戻るかもと日本に軸足を移せていない人は10年、20年住んでいてもなじめない。つながろうとしている思いのある人とないひとでは大きく差がある。」K氏とY氏のインタビューを通して区役所のN氏のこの回答を思い出した。多文化共生は日本人からの一方的な支援では成立し得ないのである。

3.7 現地調査で見えた課題

a.南米系外国人子弟の教育問題

日本国内における外国につながる子どもは公立学校か外国人学校（挑戦、韓国、ブラジル、ペルー、フィンランド、ロシア、インド、インドネシア、ドイツ、フランス、イギリス、アメリカ、カナダなど特定の国名を付した学校がある）で、教育を受けることになる。2008年の時点、国内にはブラジル人子弟らが通うブラジル人学校が大小合わせて100校が集住都市を中心にあり、そのうち、52校がブラジル政府の認可を得、取得した単位がブラジル国内の教育機関等と同様に扱われる。（森、2008 p.90.）ブラジルに帰ることを前提としているため、授業はポルトガル語で行う。経営母体がブラジル私立学校の分校、ブラジル人・日本人、派遣会社などによる個人事業であるため、主な経営資源が生徒の月謝である。授業料は、送迎のスクールバス代込みで月額約5万円と高額であり、日本の高等学校への進学率も低く、本国に帰らなかった場合、ほとんどメリットがない。リーマンショックの影響で生徒数が激減し、廃校に追い込まれる学校が増加すると同時に授業料を支払うことができず、多くの生徒が日本の公立学校へ進学する。日本の教育行政は、中央に文部科学省があり、国レベルでの学校行政を統括しているが、これまで外国人児童・生徒は視野になかった。前節でみてきたとおり、公立小中学校に流入する外国人の子どもに対して各行政は通訳を派遣するなど応急対策を取っている状況である。しかし、日本語能力が学習内容についていけないことによるドロップアウトや文化・見た目の違いなどに起因するいじめの問題などで不登校になる例が多い。「就学期にあるブラジル人子弟約3万人のうち1万人はブラジル人学校、1万人が日本の公立学校に就学しているが、残り1万人は不就学・不登校と推定される。」（森、2008 p.90.）というように不就学・不登校が問題視されて久しい。

浜松市役所にインタビューした際、南米系の子どもたちの高校進学率はどれくらいなのか聞いたところ約80%という情報をいただいた。しかし、鶴見のNPO法人ABCジャパンで南米系の子どもたちの高校進学率について伺った際、8割という数値は現場に携わっている人間から見てもあり得ない数値だという。不就学の南米につながる子どもに対して、言語や勉強を教える支援を行うなど、最前線で活動するABCジャパンのA氏によれば不就学率は50%に達するのではないかという。自治体などが出している高校進学率や不就学率は、サンプルが誰であるかによって大きな偏りが出る。外国人登録と住民登録の間にずれがあり、不就学・不登校の児童の数を正確に把握できない状況である。つまり、「見えている」外国人を対象に調査を行っているため、「見えない」外国人を含めた正確なデータにはならないことが問題の根本としてある。

b.言語問題

来日当初は、短期滞在の予定であった南米系外国人移住者の定住化が進んでいる。入管法が改正されたのが1990年であり、1世だけではなく、日本生まれ・日本育ちの2世・3世が出てきている。

鶴見区内に住むブラジル生まれ・ブラジル育ちの母親世代（30~50代）にインタビューをしてみたところ、当然ながら母語であるポルトガル語のほうが日本語よりもはるかに上手である。来日20年以上の外国人と会話をしている限り問題のなさそうな人であっても日本語の読み書き・漢字が十分にできないケースが非常に多い。

浜松市企画部国際課「浜松市における南米系外国人及び日本人の実態調査結果 2010年度」によれば、日本語の会話能力について「まあまあできる」「わりとできる」「ほぼ完全にできる」と答えた人が9割近くに対して、「漢字」や「日本語を書く」ことについてはその割合が大幅に下がる。漢字が全くできない人は27.6%、日本語を書くことが全くできない人も19.7%いることにも注目したい。ただし、これは18歳以上の大人を対象としたアンケートなので、日本で教育を受けた子ども世代であれば、違う結果になっていただろう。さらに注目したいのは、同調査の「現在日本語を勉強しているか」という質問に対して77.9%が「いいえ」と回答し、「はい」と答えたのはわずか21.3%であった。（n=380で無回答が0.8%）このように言語の問題が地域住民と移住者との間の交流を妨げているのは間違いない。鶴見国際交流ラウンジや他の横浜市の国際交流ラウンジで聞いた話によると日本語を勉強している人たちは比較的生活に余裕のある人たちであり、時間とお金に余裕がなければ日本語を勉強することもできないということだった。来日当初に直面する問題はお金を稼ぐことができるか、または労働条件などの問題であり、言葉は生活に余裕が出た時点ではじめる。いつか祖国に帰るつもりで来日した人が多いため、なかなか日本語の学習に取り組めない。同調査で「今後、日本語を学習したいと思いますか」という質問に対しては「機会があれば学習したい」46.4%、「学習したい」32.7%が全体（n=388）の8割に迫り、「学習したくない」は1.8%とわずかであった。学習したいが実際は学習していないという状況であろう。公益財団法人浜松国際交流協会（HICE）のK氏に理由を尋ねたところ「働いているため、日本語を勉強する時間がありません。ただ、理由は時間的な制約以外にも存在しています。浜松市にはすべての区役所に通訳がいます。通訳の人の活躍は、日本人コミュニティとブラジル人コミュニティの間を仲介し、様々な誤解を減らすことに貢献しているのですが、ブラジル人が日本語を覚えないという『甘え』を生んでいるようにも思います。また、自動車工場などでブラジル人が働く場合、『日本語ができなくてもいい』という条件で派遣会社は雇っています。そのため、日本語を勉強するモチベーションがないのです。2008年のリーマンショックで派遣労働者が失業し、アパートを追い出され、HICEにあふれました。2008年以降、日本語を勉強する人が増えました。日本語ができなければ仕事が見つからないことに気付いたのです。」

鶴見区のABCジャパンでは1ヶ月2000円、鶴見国際交流ラウンジで行われる特別非営利活動法人「こんにちは・国際交流の会」では10回2500円、「にほんごきょうしつ なかま」も10回2500円、「日本語で楽しむ会」は週1回、3か月3000円という破格の値段で日本語のレッスンを受けられる。働いている人向けに夜のクラスもある。当然ながら、日本語を勉強することは本人の意志によるところが大きく、強制力はない。ABCジャパンのA氏は学校で日本語を覚えることができる子どもよりも、学習の機会がない成人の日本語教育が課題ではないかと話す。永住を目的とした「移民」を法律で認めていない日本では、移民の日本語教育に対する指針を国家で打ち出すことはできない。他方、ヨーロッパ人の入植以来、「移民国家」「英語を話す国」を二大理念として掲げてきたオーストリアでは、1948年にAMEP(The Adult migrant English Program)をはじめ、成人移民に対する英語教育を徹底させている。また、フランスでは統合契約(CAI)が移民の条件となっており、国家との間にCAIを結んだ移民は共和国の諸原則や生活する上で最低限必要なフランス語を学ぶことが義務づけられている。保土ヶ谷国際交流の会のM氏は「男性の場合、例えば仕事で日本語を使っていなくても、何かしら日本人と接点があり、働くことを通して、日本語を覚えるが、主婦は日本語ができないと近所の人と接点を持つことが難しく、家にこもりがちである。」「何かしらラウンジにSOSを発信してくればこちらは対応できるが、外国人から動いてくれないとこちらから助けることはできない。助けが必要なのに社会とかかわりを持たず、埋もれている人の存在が1番深刻な問題である。」として子育て中の母親が孤立しないように子育てのために必要最低限の日本語を学ぶことや子育ての悩みを他の誰かと共有できるイベント等が必須であるという。

浜松市南米系外国人の日本語能力 (n=380)

	全くできない	あまりできない	まあまあできる	わりとできる	ほぼ完全にできる
会話	2.1%	9.7%	30.3%	38.7%	17.6%
ひらがな・カタカナ	8.2%	7.9%	17.6%	21.3%	42.4%
漢字	27.6%	25.8%	24.5%	8.9%	5.5%
日本語を書く	19.7%	23.2%	31.6%	13.4%	6.1%

「現在日本語を勉強していますか」はい 21.3%、いいえ 77.9%

浜松市企画国際課「浜松市における南米系外国人及び日本人の実態調査 2010年度」

図3 南米系外国人移住者の日本語能力「浜松市における南米系外国人及び日本人の実態調査アンケート」を参照に筆者が作成

c. ダブル・リミテッドの子どもたち

母親の日本語能力の低さは、本人の生活範囲を狭めるだけでなく、子どもの教育にも影響を及ぼす。筆者が今まで接してきた南米につながる小学生・中学生・高校生のほとんどが、生まれは外国でも日本で育ったために母語よりも日本語が上手であった。ポルトガル語で授業を行うブラジル人学校に通わず、日本の公立学校で学ぶ場合、日本語の方が得意になる。ただし、(森、2009 p.75.)などで指摘されているように「日常会話など認知的な負担が小さい場面でのコミュニケーションは滞り1~2年でほとんど問題がなくなっても、抽象的思考を支える言語の習得は5年から7年かかると言われている。抽象的に用いる言語の基盤が出来ていない場合、教科の学習活動への十全な参加は難しい。」そのため、日常的な簡単な対話に問題がないように見えても、学校の授業を理解できないという現象が起こる。少なくとも南米生まれ・南米育ちの親世代は、母語としてポルトガル語ないし、スペイン語で複雑な思考をすることができる。日本社会で交流を持つためには日本語は必須であるが、外国人コミュニティの中でコミュニケーションを取ることができるし、祖国に帰れば言語で困ることはない。しかし、2世・3世である子どもは、家ではポルトガル語・スペイン語を使い、学校では日本語を話すという中途半端な語学教育となり、いわゆる「ダブル・リミテッド」(母語も日本語も不十分)になる可能性が高い。横浜市立潮田小学校のS教諭は『『外国につながる子ども』は相対的に学力が低い傾向にあり、高校受験の時には手遅れの状態になることが多い。家ではポルトガル語、スペイン語の家庭がほとんどであるため、日常会話は問題がなくても授業についていくことが難しく、音読や漢字が極端に苦手なケースが多い。小学校低学年のうちから対策を取らないとどんどん遅れてしまう。』とインタビューで語っていた。

公益財団法人浜松国際交流協会(HICE)のK氏によれば、「ブラジル人(南米系すべてに共通している)は、将来の計画を立てたり、将来のために貯蓄したりすることがもともと苦手な民族である。子どもの進学などもあまり真剣に考えないため、不就学児童が多い。」鶴見区役所でも「今を楽しむ気質なため、受験のようなステップを踏んで何か計画を立てることが苦手である」その一方、来日20年の日系ブラジル人A氏は、毎日残業し、その日暮らしで精一杯で、子どもを教育している余裕がなかったと主張していた。中学校1年生のエミリちゃんのように親はフィリピン出身で英語に秀でていても、本人は英語ができないという例があるように、経済状況など家庭環境も子どもの学力に大きく関係する。^{xiv}これは日本人も同様である。

現・日本語教育ボランティアとして鶴見国際交流ラウンジで働き、潮田小学校の教師をされていたA氏は「ダブル・リミテッド子どもたちは、考える力と自分の思っていることを発する力がないので、教師をしていた時、外国につながる生徒との面談などで彼らは何も発言できず、ただボロボロ泣いてしまうということが良くあった。「なぜ泣いているのか」という問いに対して、何かを言いたそうなのに、伝えられるだけの日本語能力がない。「うれしい」とか「かなしい」とかは言葉にできるけれど、それ以上の複雑な気持ちを相手に

言葉で伝えることができない。それは見ていてかわいそうだった。両方とも中途半端な言語力は非常に問題であると思う」と言う。

日本では外国人子弟の日本語教育をどう行うのか明確な方針が定められていないが、各地域で対策が取られている。横浜市では「日本語書記指導が必要な外国人児童」が5名以上で「日本語教育、教科指導、生活適応指導等」を行う国際教室と国際教室担当の教員を1名設置することが義務づけられている。2012年の時点で小中学校合わせて64校に国際教室がある。また、別の指導体制として「日本語書記指導が必要な外国人児童」に対し、1年間の集中教室と派遣指導が行われる場合がある。前者は児童の通級型であり、後者は日本語指導の資格を持った講師の派遣型である。集中教室では国際教室が配置されているか否かによって変わるのだが、されていない場合小学校で40~60回程度、講師派遣は30~35回程度である。2012年度、横浜市全体で外国につながる子どもたちは6465名いる。そのうち、日本語指導が必要な子どもは1180名いるとされ、2012年度に集中教室、および派遣指導を利用した生徒の数は150名であった。(つづき MY プラザ「平成24年度 多文化共生シンポジウム 知ることから始まる外国につながる子どもたち 報告書」より) 何を基準に「指導が必要な外国人児童」とされているのかは不明であるが、おそらく、義務教育中に来日し、日本の小中学校に転入しなければならなくなった児童であり、日本生まれで日本語が話せる児童は含まれていない。(武田、2007 p.57.) はこの制度について「支援の必要性を判断する客観的な基準がなく、支援をうけるかどうかは担当教員、保護者、児童生徒の意向で決められる。」そのため、実際に支援が必要な生徒に日本語指導が行き渡っていない可能性が高い。また、支援が受けられる時間・回数も限られているので、日本語指導で精一杯であり、学習支援までには至っていない。「日本の教育制度には年少者日本語教育という科目がないため、まず入学時に日本語をインテンシブに教えるシステムが出来上がっていない。(……) それでも、集住都市の場合には通学人数が多いため、国際学級、取り出し学級、プレスクールなど地方行政や地域社会が応急処置で対応しているが、大半の公立学校は外国人子弟が5名以下であり(約5000校) その対策もなされないまま放置されているのが実態である。」(森、2009 p.91.) いずれにせよ、支援を受けるか否かは主体性に左右され、生徒の日本語能力が十分になったところではなく、時間や回数で支援を打ち切ってしまうことに日本語指導システムの欠点ではないだろうか。しかし、「要日本語支援児童生徒10人以上が継続3年程度在籍」で国際教室が設けられる東京都と比較し、神奈川県は外国人児童の支援は進んでいる。すでに記述したが、神奈川県は県立高校には外国人特別入試枠が全日制9校に設けられているが、東京の都立高校でそれを設けているのは国際高校の1校である。いずれも来日3年未満を条件としている。「抽象的思考を支える言語の習得は5年から7年かかる」とされている中、この条件はあまりにも厳しくはないだろうか。横浜市最大の南米コミュニティのある潮田地区にある鶴見総合高校は外国人特別入試枠があるにも関わらず、南米につながる子どもたちはその恩恵をほとんど受けていない。

d. 交流の少なさ

鶴見区役所の N 氏は「日本人と主に潮田地区に住んでいる南米系外国人移住者の棲み分けが進んでいる。日本人住民は当たらず、触らずの状況である。日常生活で接することのない（だけれど、存在している）移住者の存在を区民に知ってもらうことを区として取り組んでいる。」と言っていたが、現地調査をした結果、筆者も同じことを感じた。インタビューに応じてくれた鶴見の潮田地区、地域住民の Y 氏は外国人が増えることに対して、ネガティブなことを、少なくともインタビューの中では言わなかった。「(日本人、外国人にかかわらず) 近所の人だから、こちらから挨拶をします」という Y 氏ですら、挨拶以上の付き合いをすることは言葉の制約上、無理ではないかといっていた。同じく潮田地区、地域住民の U 氏も、外国人に対する差別意識はなさそうであったが、ここ 10 年で急激に増えた文化や言葉が違う南米系外国人移住者とどう付き合っていけばいいか、少し戸惑っている様子だった。

浜松市の浜松市企画部国際課「浜松市における南米系外国人及び日本人の実態調査結果 2010 年度」によれば、調査では日本人を対象としたアンケートで「近隣の外国籍住民との付き合いはありますか？」という質問に対して、ほとんどない・まったくないが 70% 以上。「近所づきあいが希薄な理由」という質問に対して、言葉 47%、文化習慣 48.9%、出会う機会がない 36.6%、特に問題になることはない 9.9% となっている。一方、南米系の外国人を対象とした同アンケートでは、「近所づきあいが希薄な理由」に対して、親しく付き合っている 31.8%、挨拶程度 56.3%、ほとんどない・まったくない 10% という結果であり、「近所づきあいが希薄な理由」は「近くに日本人がいない」7.1% (1人) はともかく「日本語が出来ない」100% (14人) 「付き合いきっかけがない」35.7% 「日本文化習慣がわからないから」7.1% (1人)、「日本人に理解してもらえないと思うから」35.7% 「必要と感ぜないから」71.4% という結果が出た。(図 5)

確かに言葉が通じなければ交流することは不可能に思える。言葉ができないから日本人と交流しないし、交流しないから言葉ができるようにならないという悪循環が生まれている。言葉・文化・習慣が違うから込み入った付き合いがしづらいというのは当然のことであるが、両者とも「出会う機会がない」が高い数値をだしていることに注目したい。交流する機会を創出することで、付き合いが「まったくない」状況を改善できるのではないかと考える。

南米系外国人と日本人、「付き合い」の現状

	日本人(南米人)	南米人(対日本人)
挨拶程度	27%	56.3%
親しく付き合っている	3%	31.8%
ほとんどない	32.1%	6.8%
まったくない	38%	3.7%

浜松市企画部国際課「浜松市における南米系外国人及び日本人の実態調査 2010年度をもとに作成」

「付き合いが希薄な理由は何ですか。」

- ・言葉の問題 100% (14人中14人)
- ・自己の文化や習慣が受け入れられない 35.7%
- ・つきあうきっかけがない 35.7%
- ・つきあう必要性を感じない 71.4%



図5 南米系外国人移住者との付き合いについて「浜松市における南米系外国人及び日本人の実態調査 2010年」を参照に筆者が作成

APPENDIX 1

2012年8月6日 浜松市国際課 T.D氏 インタビュー

「浜松市の移民事情について」

- ・2011年2月末のデータだと市の人口819517人のうち外国人登録者数は26912人であり総人口の3.28%を占めている。その半数が日系ブラジル人を中心とした南米系外国人である。リーマンショック以後、南米系外国人は減り、相対的にアジア系（中国・フィリピン）が増えてきている。（参考資料 浜松市における南米系外国人および日本人の実態調査結果）
- ・特徴としては80%以上が定住化している。
- ・静岡、愛知、三重など県で連携を取り、「外国人集住都市会議」（「平成24年度浜松市の国際化施策とその概要」9ページ参照）が開かれる2012年7月から変更した「在留カード」の住民貴重台帳はその成果である。

「浜松市国際課の役割」

- ・4校の外国人学校に市から補助金を出している
- ・クレーム（日本人と外国人との間の諍い）に対応 月に1件程度（自治体は苦勞している）
- ・新しい取り組みとして「インターカルチュラル政策」を模索している（イギリスで行われている政策でアートセンターを設立し、移民の祖国の文化発信と雇用を生み出すもの）
- ・浜松市外国人市民共生審議議会 平成20年度設立
- ・「地域共生についての浜松宣言」：「外国人移住者は重要なパートナーである」
- ・浜松市多文化共生都市ビジョン策定に向けて 「課題」・外国人の生活基盤の安定・外国人市民の地域の一員としての参画・将来の浜松を担う次世代の育成・支援から多様性を生かした取り組みへ 「目指す方向性」・日本人市民と外国人市民がともに構築する地域・多様性を都市の活力の源泉として発展していく地域・誰もが安心して暮らしていくことが出来る地域
- ・日韓欧多文化共生都市サミットを2012年10月に浜松で開催予定

「浜松市が抱えている問題は？」

- ・雇用（非正規雇用で働く）の不安定さ 間接雇用は46.5%（2006年は76.4%で大幅に少なくなっている）、直雇用（臨時雇用・パート・アルバイト）は27.7%、直接雇用（正社員）は19.2%
- ・生活の基盤の不安定さにより子どもの将来を考えられない

- ・進学率 高校 83% (そのほとんどが定時制高校)
- ・健康保険未加入 19%、年金未加入 38%、定期健康診断未受験 28% 自治会への加入率 36.1% (南米の文化にはない習慣)
- ・高齢化が少しずつ進展
- ・不登校児童 対策「不就学ゼロ作戦」

APPENDIX 2

2012年8月6日 HICE (公益財団法人浜松国際交流協会) 多文化共生コーディネーター R.K氏

「HICEの活動内容について」

- ・市からの委託により成立
- ・1番の役割としては相談窓口
- ・生活相談は年間約600件 (⇔市役所 約1ヶ月1件) 4人の相談員
- ・語学講座
- ・多文化共生講座 (多文化共生社会人材育成、ほとんど日本語で行われる)・イベントの主催 ex.「ブラジルの魅力」(ブラジル総領事館が国立公園や大アマゾンを紹介)「ポルトガル語スピーチコンテスト」「多文化体験講座 インドの朝食」(インドで一般的な朝食をインド人夫人が紹介)、「国際理解教育ワークショップ」(①国際協力②人権③異文化理解についてのワークショップで楽しく学ぼう!)「地域を支える“優しい日本語”」(①やさしい日本語の作成ルールを学びます②学校のお便りをやさしい日本語に置き換えるワークショップ)
- ・近年は語学講座よりも多文化共生講座に力を入れている
- ・やはり参加者は外国に興味がある人。さまざまな国籍の人が参加。

「上記の講座の参加者が“コミュニティリーダー”ということでしたが、コミュニティリーダーとは？」

- ・定義は「他のブラジル人に信頼され、相談される人」例えば、ハローワークで働く人、HICEなどの団体や相談窓口で働く人、通訳があげられる。ブラジル人住居区にリーダーとなる人がいるわけではない。日本人と違い近所つきあいを重んじない、個人主義的なブラジル人は気が合う人とだけ交流を持ち、家が近いから等理由で親交を深めない。
- ・浜松市は大田区のブラジル人町とは違い、点在して住んでいる。

・ブラジル人が集まる場所、コミュニティといえば「カトリックの宗教団体」の存在が大きい。昔はブラジル人レストランにもコミュニティが形成されていた。

「浜松市がかかえる課題とは？」

・雇用問題 2008年のリーマンショックで派遣労働者がアパートを追い出され、失業者でHICEがあふれた。働いているため、日本語を勉強する時間がない。また派遣会社からは日本語が話せなくてもいいという条件で雇われている。

・浜松市のすべての区役所に通訳がいる。それは誤解がなくなるなどいい面もあるが、ブラジル人が日本語を覚えないという甘えの状況を生んでいる。

・講座を開いても興味や関心がある人しか来ない。今後、地震セミナーや人生生活プランセミナー（ブラジル人は貯金をする習慣がない）などを開催する。興味をない人をどう巻き込むか。

・ブラジル人はもともとしょうらいの計画を立てるのが苦手な民族。子どもの進学などもあまり真剣に考えないため、不就学の子どもが多い。

・外国人同士の共生

・日本語の会話が出来ても読み書きができない。言葉の壁で日本人と同じ職に就くのはかなり難しい

・肌の色で差別されることも……（日本で生まれ育ったタイ人で日本語が完ぺきに話せるのに就職で差別された）

・離婚率が高い

・自治体の会議は日曜の朝早い時間帯だが、文化の違いで「なぜそんなに朝が早いのか」ブラジル人に理解できない。

・高校進学率が低い

・モデルとなる外国人がいない。両親とも工場労働者である場合が多いので、その仕事からなかなか抜け出せない。

「外国人に対する差別・偏見はあるのか。それをなくすために交流会は役立つか」

・工場労働者が多いのでブラジル人は「日本人から下にみられているのでは？」という意識があり、日本人に対して逆差別観を抱く。

・友人を家に呼ぶ、家の路地に駐車、パーティ、ごみの問題など文化の違いから確執は生まれる。

・ブラジル人には家を貸さないなど。ごみ置き場に間違ったものが捨てられているとブラジル人が捨てたと言われる。互いに偏見を抱いている。

「それらの課題を解決するためには？交流会は効果があるか」

- ・交流会の効果はあると思う「気持ちがどう変化したか」など正確なデータはないが今度取ってみたい。
- ・ブラジル政府、総領事館との連携
- ・日常生活の基盤が安定しないとほかのことが考えられない
- ・南米系＝工場 英語圏＝英語の先生 という図式をもっと広げるべきだ。
- ・コミュニティを巻き込めるか
- ・派遣システム改善
- ・会社等が国際部などをつくり、そこで正社員として雇う。
- ・ブラジル人コミュニティ外に出ようとしない人に対して出前講座を行っている。ブラジル人が集まる教会で HICE の職員が話す機会や HICE を紹介することで HICE の存在を知ってもらう。
- ・興味がない人をどう巻き込むか。様々なネットワークを使って（宗教団体）HICE のお知らせを知り渡させる。
- ・HICE は公と民、日本社会と外国人社会の間をとりつくりやくめ、中立な立場で。

「交流会では解決できない文化の違いや2国間との溝はあるか」

- ・交流会、各種イベントの限界として参加を「強制できない」ことがあげられる。

APPENDIX3

2012年8月17日

鶴見国際交流ラウンジ インタビュー M.M氏（スペイン語通訳担当）

「鶴見国際交流ラウンジの活動内容について教えてください。」

- ・1番ベーシックになっているのは日本語教室で、ラウンジ内の教室で日本語の授業が行われています。（参加者の年齢層、男女比はまちまちである）
- ・相談窓口で4か国語の通訳スタッフが決まった曜日に待機している。相談を受ける内容は日本語の学習についての相談が多い。また子どもが学校でもらってくるプリントの翻訳を行う。
- ・2か月に1回、外国人を対象とした（日本人は参加しない）イベントを行っている。外国人に鶴見のことを知ってもらう目的で近くの寺などに行ったりする。日本人と外国人双方が楽しめる国際交流のイベントを開催したいが、スペースがない（教室が3つ）ので大規模なものではできない。料理をつくるなどのイベントも異文化理解に役立つと思うが、このラウンジでは禁食禁止で、火を使うことも禁止されているので不可能。「韓国のメンコをつくらう」など個別の小規模なイベントは開催されたことがある。
- ・「手をつなごう！つるみ」を多言語で発行

・教育支援 土曜日、月に二回 補習教室を開講

・外国人移住者の子ども（小学生）向け、夏休みの宿題を手伝う教室は非常に需要が高く、定員 20 名のところ、80 名近くが押し寄せ、別の教室を借りることもある。（それだけ、勉強についていくことが、むずかしいし、補講を受けたい子どもが多い、多いのはブラジル、ペルー、ボリビアの子ども）

・「外国人親子カンガルーサロン」普段、日本語教室に行きづらい、小さな子どもを持つ、外国人の母親を対象に今年度から開催。金沢国際交流ラウンジが先行。子どもを持つ外国人の主婦は外部と付き合いが疎遠になりがちであり、日本語を勉強する機会も少ない。子育ての悩みなど相談できる相手を見つけることが出来る。この「カンガルーサロン」に期待が高まっている。

「ラウンジ利用者の国籍・年齢層」

鶴見区の場合、もちろんアジア系もいるが、南米系の人たちも多い。来る人は大半が外国人。日本人が来る場合は、夫婦のどちらかが日本人で、夫婦で相談窓口に来たり、友人に通訳を頼んだりする場合、その友人が日本人である場合があるが、日本人、外国人が自由に行き来し、交流するという感じではない。

「ラウンジの問題点、課題」

・相談中心のラウンジで、交流できるスペースがない。狭いので、物理的に行えない。

・ラウンジの活動は外国人も含めた 5 言語に対応できる 13 人のボランティアで対応しているがボランティアだけだと限界がある。相談業務や通訳に追われている。必要であると思うが、イベントが企画しづらい。小規模なイベントだけしかできない。窓口のボランティアの負担になるので、大掛かりなものできない。

「鶴見区が抱えている課題は」

・外国人同士が固まっている。交流が少ない。そういう事実があるのに、国際交流ラウンジはそれに対処できていない（場所やボランティアの人数不足の関係で、今メインとして行っている窓口相談の対応に追われている）

・鶴見区に限らないが、「言語」と「子どもの学習」は 1 番の課題である。

・学校で子供がもらってくるプリントなどすべてが日本語で書かれている。

・日本人と結婚した外国人で、DV、離婚、財産分与などの相談に来る人がいる。外国人であるがゆえに、厄介な問題もある。

・日本語を勉強しようとする意識の高い人が多い。（浜松などは工場などでの仕事で、外国人を分けている。日本語が全く話せなくても問題のない部署に配属させているので、企業のような方針のせいでいくらたっても日本語が話せないという事態が起きている）

- ・鶴見区の区の便りがまだ言語に対応していない。
- ・自治体（町内会）に外国人がいない。回覧板などはすべて日本語で書かれているので、非常にハードルが高い。自治体は良いイベントを行っているのにもかかわらず、外国人が地域のイベントに参加できておらず、参加させるのが難しい。（これに参加できるようにすることは最終目標である）

i INSEE, “Enquêtes annuelles de recensement 2004 et 2005,”

http://www.insee.fr/fr/themes/document.asp?ref_id=IP1098&page=graph (2013年1月21日アクセス)

ii 法務省 HP 「平成20年末現在における外国人登録者統計について

http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/press_090710-1_090710-1.html (2013年1月21日アクセス)

iii 少々、古いデータであるため、近年に取られたデータを探そうと努めた。トゥールーズ・ミディピレネー日仏協会の代表（後述）へのインタビュー時に質問したところ、このような移民蔑視につながるアンケート調査に対する風当たりが年々、厳しくなる傾向にあり、フランス政府が今後、このような調査を行う可能性は低いそうだ。敵意や差別観は10年程度では変化しないと仮定する。また、筆者はフランス、トゥールーズ市でインタビューとアンケート調査を行ったが、受け入れたくない移民についてマグレブ系が多く上がった。

iv グルノーブル市の取り組みについては（島田謙二、2011 p.116）に詳しい。

v 総務省では外国住民人口が200万人に達した翌年の2006年3月に「多文化共生の推進に関する研究会報告書」を発表し、その中で地域における仁保人と外国人との間の多文化共生の推進を奨励した。その報告書内での多文化共生は「国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的ちがいを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」と定義されている。

vi 「市民化講習」については、新海英史「オランダ・アムステルダム市における移民行政の取り組みとその課題」『トランスナショナル・アイデンティティと多文化共生』（2007）に詳しく記述されている。

vii 名称を付けることが非常に難しいのだが、「南米系外国人移住者」と統一する。定義としてはブラジル出身を大多数とする南米（ペルー、ボリビアなども含む）国籍、もしくは南米につながる（南米出身の親を持つ・南米出身）を指し、対多数は日系人である。（入管法は日系人の配偶者の来日も認めているためすべてが日系人ではない）観光や留学のためではなく来日ではなく、一定の期間以上、日本に暮らしているということを指すために「移住者」を付け加えている。

viii 「鶴見区多文化共生のまちづくり宣言

鶴見つるみのまちは世界せかいのまちです。

区民くみんの30人にんにひとり外国籍がいこくせきの方かたで、80か国こくを超

こえる国くにの方々かたがたが鶴見で暮くらし、働はたらいています。鶴見には、人々ひ

とびとが支ささえあい、互たがいの文化ぶんかを理解りかい・尊重そんちょうしながら、国籍こくせきを越こえて交流こうりゅう・活動かつどうし、鶴見ならではの新たな文化ぶんかを育そだててきた歴史れきしがあります。これは鶴見の誇ほこりです。鶴見区つるみくは、このまちに住すむすべての人々の人権じんけんを守まもり、暮らしやすいまちづくりをめざします。未来みらいの鶴見が世界に誇れる「多文化共生たぶんかきょうせいのまち」となるための取組とりくみを、区民くみん・事業者じぎょうしゃ・団体だんたいのみなさまとともに進すすめることを宣言せんげんします。平成へいせい20（2008）年ねん6月がつ 鶴見区長つるみくちょう」

（引用 <http://www.city.yokohama.lg.jp/tsurumi/etc/exchange/image/ac2011.pdf> ,2013年1月17日アクセス）

ix 2012年7月27日につづき MY プラザで行われたシンポジウムで、アルゼンチン出身、来日21年、鶴見区在住のS氏は学校の手紙（プリント）と音読カードについてこう語っている。「あとは、子どもが幼稚園に行ったとき、その幼稚園の園長先生が外国で暮らしたことがあって、手紙には全部ルビを振ってくれてたんです。私は日本語ができていたし、でもその手紙は読んでも読んでも意味がわからない手紙がほとんど。言葉を一つ一つ探してまでやっていると終わりが無い。どこが大事なポイントかわからない。だいたい学校とか幼稚園の手紙は“暖かくなりました・・・”とかあいさつから入っていく。私もそれはわかっている。“子どもの体調に気をつけましょう。”“そうね”みたいな。でも何が言いたいのか全然つかめない。最初からそこが入るからイライラしてきて、「この手紙はどういう意味？何の手紙？何のお知らせ？」というのが先に。」「とっても苦勞したのは、音読カードです。家で音読聞いてあげても、言葉の意味がわからない。で、それが気になって、もう、聞いてないの。何を言ってるかわからないから。自分がスペイン語、話したりすると、スペイン語も日本語もアクセントがおかしくなる。外国人と話すときあなたのスペイン語ちょっと変と言われる。でも、日本人と話しても、ちょっと変わってるね。でも、どうしようもないんですね。点や丸に気をつけて読んでますかって評価する欄がある、その音読カードに。私、知らなくて。でも、子どもが途中で「お母さん聞いてない。」って言うの。もうホント「私も聞かなくちゃいけないの？」昨日も読んでる。もう2週間も同じこと言っても、私、意味わからない。聞いてるだけだったらいいけど、評価する欄があるから。「何？○つけるの？」私としては、「ホントに○つけるの？これで？」という思いが強かった。自分が日本語ちゃんとしゃべれてないのに、日本語の文章読んでる子どもに評価できるのかって思っていました。」つづき MY プラザ「平成24年度 多文化共生シンポジウム 知ることから始まる外国につながる子どもたち 報告書」p.3, p.5.

x 「神奈川県「公立高校入学のためのガイドブック」を見てみると、県内に「材検外国人等特別募集」実施高校は全日制9校、定時制1校で、各10名程度の募集を行いその中でも全日制的県立鶴見総合高校は募集人数15名（2012年度）と最大である。「来日3年未満」であることが条件であり、出願の際に「外国籍を持っている、または、日本国籍を取得して3年以内であることを証明する書類」と「入国後通算3年以内であることを証明する書

類（パスポート等）」が必要。また、「原則として、海外から移住してきて6年以内の人」は「一般募集での特別な受験方法」「①学力検査問題等の問題文にルビをつけること②学力調査等の時間延長（最長1.5倍）③面接等の時、分かりやすい言葉でゆっくり話すこと」が申請できる。

xi 浜松市企画部国際課「浜松市における南米系外国人及び日本人の実態調査結果 2010年度」によれば、日本語の会話能力について「まあまあできる」「わりとできる」「ほぼ完全にできる」と答えた人が86.6%に対して、漢字について「まあまあできる」「わりとできる」「ほぼ完全にできる」と答えた人が38.9%。そのうち「まあまあできる」と答えた人が24.5%となっている。また、「日本語を書く」ことについては「まあまあできる」「わりとできる」「ほぼ完全にできる」を合わせて51.1%である。そのうち、「まあまあできる」が31.6%で最多である。

xii 川村『移民政策へのアプローチ』（2009）などが指摘。「日常会話など認知的な負担が小さい場面でのコミュニケーションは滞り1～2年でほとんど問題がなくなっても、抽象的思考を支える言語の習得は5年から7年かかると言われている。抽象的に用いる言語の基盤が出来ていない場合、教科の学習活動への十全な参加は難しい。」 p.75.

xiii 浜松市企画部国際課「浜松市における南米系外国人及び日本人の実態調査結果 2010年度」によれば、自治会（町内会）に加入しているのは36.1%にとどまっている。また、「わからない」と答えた人も27.4%であった。

xiv 移民の子どもの教育達成や文化変容は、親の学歴を意味する人的資本や移民コミュニティに蓄積された「子どもが母語を維持し規範を守って目的意識を持てるような社会環境を指す」社会資本に大きく影響される。梶田(2005, p.90)

第三章 新しい国際交流会のデザイン

3.1 語学教育の重要性—日仏の比較—

第二章では南米系外国人移住者が抱える言語問題と地域に溶け込めず、交流がない状態を明らかにした。永住を目的とする「移民」を受け入れないとしている日本であるが、200万人の外国人を抱えている日本はすでに「移民列島」xivである。本来であれば、「移民」を受け入れているものの、それを「移民」として認めない矛盾を一刻も早く打破しなければならない。現在のところ、教育や職業訓練や社会保障を受ける権利が制限され、法律上では存在していない「移民」への大きな指針、政策を国として打ち出せない状態になっている。

前章では外国人の日本語能力が日本社会への同化を妨げていると指摘した。一方、様々な移民問題を抱えるフランスの移民政策のうち、成功を収めているのはフランス語教育である。「統合の決め手」である言語教育をフランスが徹底できた理由をまとめたものが(図1)である。つまり、国家の責任のもと移民に対して必要最低限のフランス語を習得することを義務化している。しかし、フランスでは残念ながら、ムスリム等に対する偏見等が指摘され、増えすぎた移民に対するフランス人の嫌悪感や差別される移民の鬱憤は社会の閉塞感を生むという別の移民問題が生じている。また、目に見える問題として、郊外(周辺)に追いやられた移民が暴動を起こすなど、移民問題は深刻化している。

自分とは異なる出身、文化、価値観を持つ人たちと接した時に違和感を抱くことは当然である。しかし、特定のエスニシティに対して偏見や先入観をもち、不利益・不平等な扱いをすることは許されない。日本でももちろん差別は存在するが、移民の絶対数が少ないこともあり、今のところフランスほど大規模な暴動は起きていない。xiv

南米系外国人移住者が抱える多くの問題のうち、最も大きな問題は、日本語能力の低さと状況を把握することができない「顔の見えない」人が多く存在していることであると感じる。法改正がなされない限り、「顔の見えない」外国人の実態を把握することも言語習得を義務化することもできないことをここで明らかにする。それと同時に今できる政策は何であるかについて考えたい。

移民が法律で認められているフランスの比較

	フランス	日本
言語の問題(日本語教育)	言語教育のカリキュラムを法案によって明確に打ち出せる	日本語を習得することは非常に困難である
差別の問題	移民暴動が起きる	存在するが少ない
法律の問題	法律で定められているため、トップダウンで政策が作れる	法律で移民を認めていないため、長期滞在者に対する教育・語学・差別に対する長期的な対策が法律上保障されない
文化摩擦の問題	宗教的な対立(キリスト教・イスラム教)や偏見が存在する	無関心・無理解
地域住民と移民の交流が希薄であることの問題	スラム街の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・日本語を使わない ・母親の孤立化 ・不就学児童



図1 移民が法律で認められているフランスとの比較 (筆者作成)

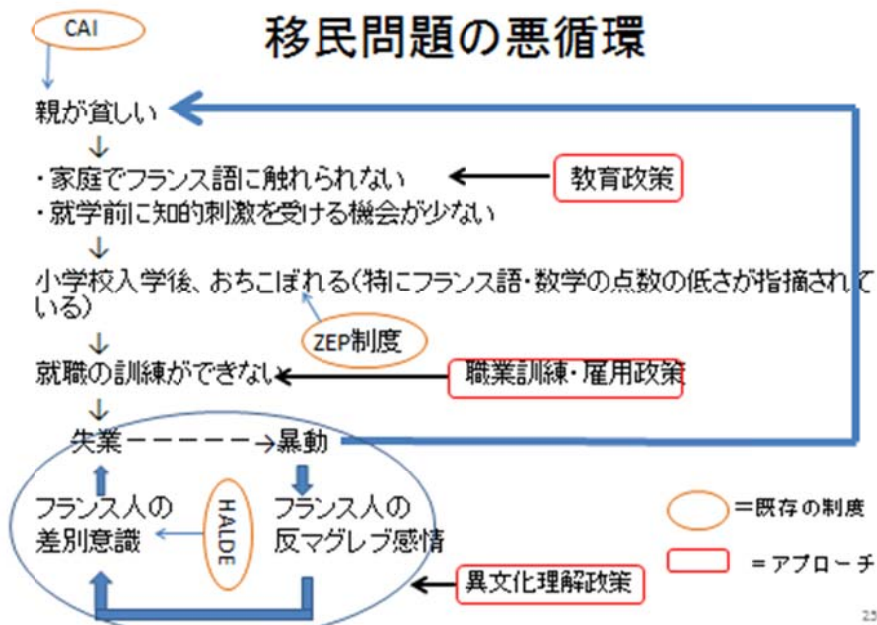


図2 移民問題の悪循環 (筆者作成)

3.2 横浜市鶴見区、各ステークホルダーの要求

鶴見区できるだけ多く、足を運ぶことによって各ステークホルダーから直接話を聞いた。(表1) 第三章で分析した各ステークホルダーの関係性をまとめたものが(図2)である。そして、インタビューからわかった各ステークホルダーの声もしくは欲求を(図3)で示した。

表1 鶴見区ステークホルダーインタビュー一覧(筆者作成)

2012年8月17日	鶴見区役所 N氏
同日	鶴見区国際交流ラウンジ M氏(スペイン語担当)
12月8日	慶應義塾大学 S氏(2年間、教育ボランティアとして鶴見で活動)
12月17日	鶴見国際交流ラウンジ 館長 S氏
同日	A氏(日系ブラジル人) W氏 A氏
12月19日	潮田小学校 校長 S氏 国際担当教諭 S氏
同日	教諭 K氏(1年生担当)
同日	鶴見国際交流ラウンジスタッフ K氏(日本在留20年の中国人)
同日	鶴見区登録通訳ボランティア Y氏(日本在留20年の中国人)
12月22日	ブラジル人、母親世代5人
12月26日	A氏(日系ブラジル人) W氏
2013年1月4日	かながわ国際交流財団 F氏
1月6日	地域住民 U氏
1月6日	地域住民 Y氏
1月9日	鶴見総合高校 日本語教師 Y氏
1月12日	ラウンジ館長 S氏 元・潮田小学校教諭、現・日本語ボランティア A氏 情報提供コーディネーター O氏
1月12日	ブラジル人 R氏(潮田中学校3年生)

a 日本人コミュニティ

外国籍住民の割合が多く、「国際色豊かなまち」鶴見区では、区内、もしくは区外から多国際交流や多文化共生に積極的に関わる日本人が多く活動している。鶴見国際交流ラウンジではボランティアとして外国人支援を行いたいという相談を多く受けている。鶴見国際交流ラウンジ館長様によれば、多文化共生をテーマにレポートや卒業論文を書く大学生が大勢いる。鶴見区でボランティアとして活動することが単位として認められている大学もある。したがって、大学生をはじめとする若い世代や主婦層、仕事を引退された方が外国人に日本語を教えたり、学校の授業の補講を行ったりするボランティアとして活動している。大半の地域住民はそのような活動にあまり関心がない。日本人の多くは、南米系外国人移住者とほとんど付き合いがなく、未知な存在である。日本人から南米系外国人移住者には「日本語を覚えてほしい」、「ルール（夜中に騒がない、ゴミだしのルール等）を守ってほしい。」と思っている。

b. 南米人コミュニティ

現地調査の結果、地域住民と外国人コミュニティをつなぐ「キーパーソン」と呼ばれる人が重要な役割を果たしていることが分かった。外国人移住者の多くは日本人と交流する必要性を感じておらず、コミュニティ内で用事を済ます。もちろん積極的に交流を持つとする人もいるが、日本語があまりできないことから地域住民と交流を持てずにいる場合もある。キーパーソン以外の外国人移住者の実態は見えにくい。キーパーソンの呼びかけがあると国際交流ラウンジなどで開かれるイベントなどは人が集まるが、日本人が南米コミュニティに呼びかけてもなかなか人が集まらない。

南米系外国人移住者の多くは「言葉の壁」を感じており、特に南米生まれ、南米育ちの親世代（南米では2世、3世であり、日本では1世）は日本語ができないゆえに周りの日本人と交流できない。彼は日本人に対して「差別しないでほしい」、「自分たちの文化を理解してほしい」などの要求があり、不安定な雇用、子どもの教育に対して不安を抱いている。（逆に将来に対して不安を持たず、気が付いたときには手遅れという事態も多い。）

c. 職業斡旋業者・ハローワーク、職場

日系人入国の経緯、および職業斡旋業者の実態については第二章でふれた。職場（製造業が多い）では、単純労働に従事していることが多く、日本語をほとんど使わない。作業の説明が必要な場合のみポルトガル語の通訳が派遣される。

しかし、リーマンショック以降、工場労働者は派遣切りの憂き目にあい、製造業での仕事は激減した。日本語が話せるか話せないかは新たな職を得るうえで問われるようになった。

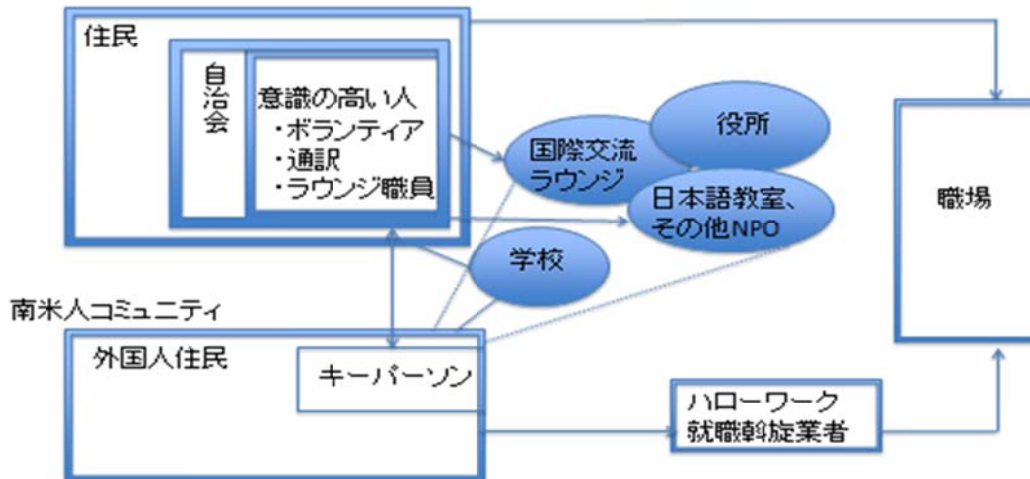
d. 役所、国際交流ラウンジ、NPO、学校

鶴見区役所、鶴見国際交流ラウンジ、NPO 法人 ABC ジャパン、横浜市立潮田小学校の関係者にインタビューを重ねた。「もっと認知度を高めたい」、「ボランティアが果たす役割は非常に大きい、自分のやり方で好き勝手に行動する人や責任を持ってやらない人もいる。ボランティアをマネジメントする役割を持つ人が必要」、「利用者が偏っていて、交流会に来るメンバーはいつも一緒だ」、「外国人が知りたい情報がわからない」ということが問題として挙げられた。第二章で既に説明した通り、区役所は鶴見区が抱えている最も大きな課題は「子どもの学習支援」と「区民の意識啓発」であるという。南米人コミュニティに対しては、親世代に子どもの学習に関心を持つように促し、ラウンジやボランティアに学習支援を依頼する。鶴見区在住の日本人は、区が色々取り組んでいるわりに多文化共生に対して意識が高いわけではないので、関心を持つように促している。潮田小学校でも外国につながる子どもたちのための日本語教室や補講を行う放課後教室があるが、強制力はないため学年が上がるごとに教室に通う子どもが減ってしまう。「教室に来てくれない子どもをどうすればいいか」などの声が上がった。また、南米系外国人移住者に対しては「手遅れになる前に相談してほしい」と思う一方、「支援が必要な外国人の数は多い、これ以上利用が増えるとボランティアでは対応しきれない」というのが現実である。

ステークホルダーを大きく4つに分けてみてきた。このような実態の中、日本人と南米系外国人移住者が地域の中で共存するためにはどうすればいいか、外国人移住者の生活向上のために必要なことについて図5のように細分化していった。語学学校（日本語教室）支援、子どもたちに対する補習支援、ボランティア育成・マネジメント、ハローワークとのインターフェース、地域住民との交流会、ハローワークとのインターフェース、（自治会や学校が主催となる）地域のイベント、出身国のイベントが生活向上のために必要な成果物であるが、本研究では地域住民との交流会に焦点を当て、①語学力向上②学力向上③地域住民との交流の円滑化④生活に必要な情報の共有化⑤文化交流の促進を実現する交流会をデザインしていきたい。

ステークホルダー分析

日本人コミュニティ

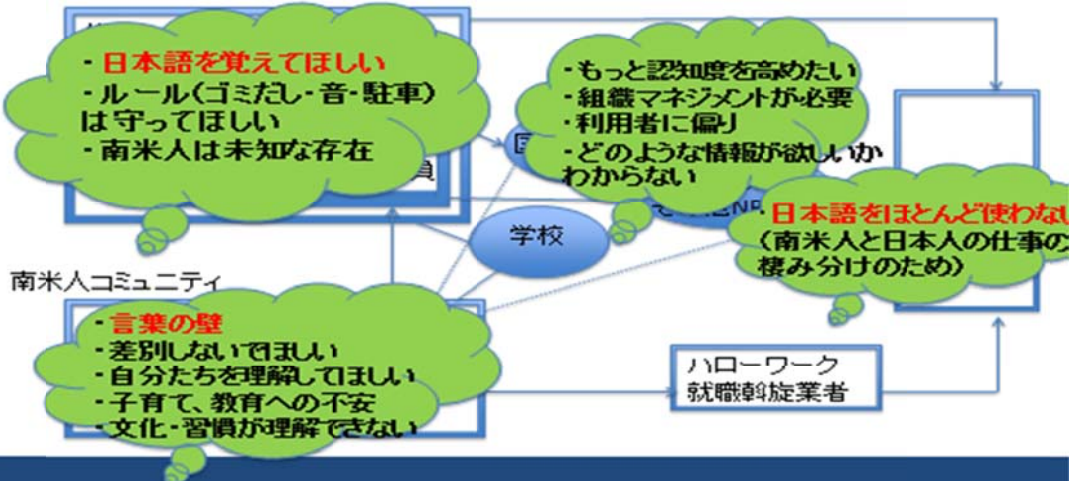


14

図3 鶴見区におけるステークホルダー（インタビューおよび現地調査をもとに筆者が作成）

ステークホルダーの声

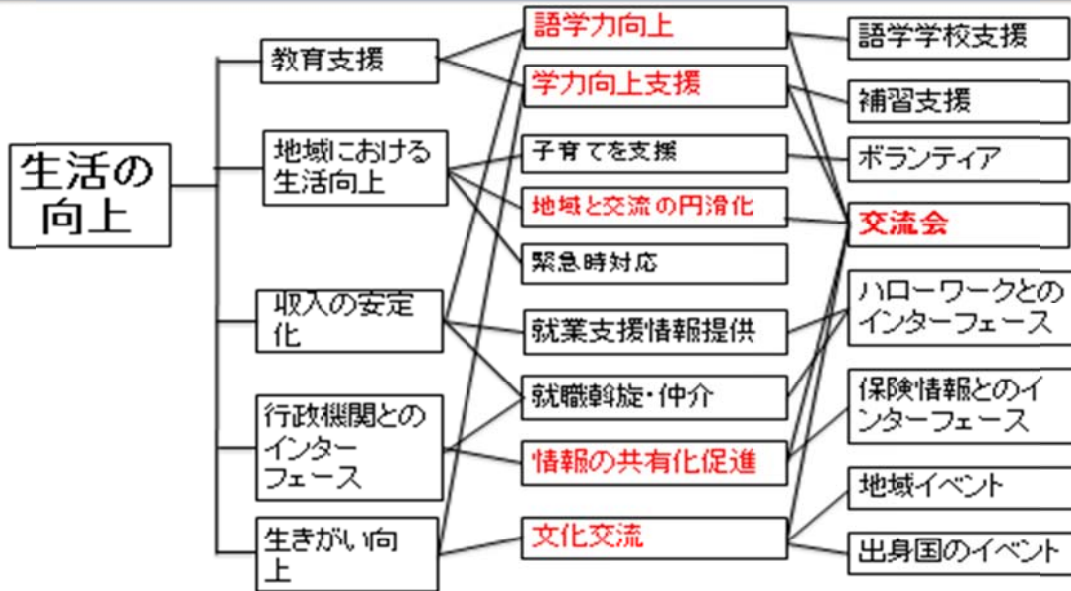
日本人コミュニティ



15

図4 「鶴見区におけるステークホルダーの声」（インタビューおよび現地調査をもとに筆者が作成）

外国人移住者への支援 WBS



16

図5 「外国人移住者への支援 WBS」(筆者作成)

交流会の最も重要なポイント1

・語学力

←漢字ができる人＝約14%(浜松市データ参照)
(「浜松市における南米系外国人及び日本人の実態調査2010年」より)

・学力向上

←不就学児童問題 高校進学率の低さ
(鶴見区潮田小学校・鶴見総合高校関係者インタビューより)

・地域との交流の円滑化

←挨拶程度の付き合いしかない・棲み分けが進む
(鶴見区地域住民インタビューより)

交流会の最も重要なポイント2

・情報の共有化

←アクセスしにくい「どこまで情報が届いているか不明」「外国人の知りたい情報がわからない」

(神奈川国際交流財団インタビューより)

・文化交流を促進する

←お互いの文化がよくわからない・特定のエスニシティのみの交流会

(鶴見国際交流ラウンジインタビューより)

図6 「交流会の最も重要なポイント1、2」(筆者作成)

3.3 既存の交流会の分析

国際交流協会やNPO、学校などの施設を中心に交流会はすでに数多く行われている。本節では既存の交流会のメリット、デメリットについて分析する。表2~4は既存の交流会を分類し、メリット、参加しやすさ、持続性(楽しいだけで終わらず、日々の暮らしの中で交流を生み出せるか)、制約、その制約に対する対策について言及したものを表にしたものである。なお、特徴であると感じた項目について、黄色のハイライトを使用した。

a. ランゲージ・エクスチェンジ

国際交流ラウンジを中心に行われる日本人と外国人がそれぞれの母語を教えあう交流会でお互いの言語を学ぶことができる。文化理解ではなく語学(特に英語)を勉強することを目的とする参加者もいる。

b. おまつり

年に1回程度、国際交流ラウンジなどで開かれるイベントであり、様々な国の料理の販売や発表・展示が行われ、地域の人々への国際理解を促す。外国に興味がない人でも気軽に参加し、楽しむことができる地域イベントである。

例えば横浜市都筑区のつづきMYプラザでは、毎年3月に「プラザまつり」を開催する。エンターテイメント(ダンス、楽器演奏、歌など)、つながりの写真展、バルーンアート、

世界の食文化体験、世界の衣文化体験、日本の伝統文化、ドラム体験エコバッグ作り、写真撮影コーナーなど）中高大学生、市民団体、外国人のボランティアが企画・運営し、参加者は子どもから大人、ご高齢の方まで約 2000 人が参加する。世界の食文化体験など、外国人市民が主役、先生になってその国の文化を教え、お互いの文化を知る機会を設けている。

c. 外国人を講師に招くカルチャー教室（料理教室、ダンス教室、音楽教室などを含む）

日本在住の外国人が自国の文化や習慣などを紹介する。料理・ダンス・音楽など共通の趣味を通じて交流を深める。日本人には人気がある。特に料理教室は好評であるが、行使以外の外国人を呼び込みにくい。

d. ドキュメンタリーの上映会

映画や演劇を通して、多文化共生を考える。浜松学院大学教授が作成した日系ブラジル人とその子どもたちのドキュメンタリー「孤独なツバメたち」の上映会などが過去に行われた。

e. 日本語教室

ほとんどの国際交流ラウンジで開かれている。横浜市の日本語教室は「日本文化や日本語を一方向的に教えるのではなく、相互理解の場を作ることを目的としている。」（公益財団法人横浜国際交流協会 F 氏）日本語を教える地域のボランティアが活躍する。

f. シンポジウム・パネルディスカッション

東京外国語大学 多言語・多文化教育センターで毎年開かれる「多言語・多文化社会専門人材育成講座」（国際交流に携わる研究者・有識者が発表を行う）や 2012 年 7 月につき MY プラザで、開かれた。「知ることから始まる 外国につながる、地域の子どもたち～子どもたちの未来を、ともに描こう～」や浜松市で行われた「外国人の子ども不就学ゼロを目指すシンポジウム」などがすでに行われた。参加者は地域の人と言うよりは現場で活動している人であり、内容も少し難しいため参加のハードルはやや高い。

g. スピーチ大会

外国人が日本語で行うもの、日本人が外国語で行うものがある。浜松市では会浜松ブラジル総領事館、浜松国際交流会主題のポルトガル語スピーチコンテストが開かれ、優秀者は総領事館より表彰される。

h. 日本人のみで行う講習会

鶴見国際交流ラウンジ「日本語支援ボランティア入門講座」は全 23 回、受講料 9000 円の外国人に日本語を教えるボランティアを育成する講座である。2012 年度は 24 名が修了

し、現在 22 名が、ボランティアとして小学校や国際交流ラウンジで日本語を教える活動に携わっている。

東京外国語大学 多言語・多文化教育センターでは、言語・文化の違いによる誤解や摩擦などの問題が起きた際に解決できる人材の養成が現代日本において急務であるとし、「多言語・多文化社会専門人材養成講座」を開催している。

i. 外国人のみで行う親睦会

鶴見国際交流ラウンジでは入園・入学、お弁当、予防接種、健康診断、防災といったテーマに沿って日本で子育てに必要な情報と知識を学ぶ子育て支援教室、外国人親子カンガルー教室が開かれている。定員は 15 組であるが、参加者の数は回によってかなり違う。2013 年 1 月 7 日に開かれたカンガルーサロンは年始だったためか参加者はゼロであった。

また、同ラウンジは鶴見区在住のペルー人が主催者となり、「外国人交流会（南米編）」を行った。ラテン音楽やダンスのイベントを開き、約 100 名が参加する大規模なイベントとなった。しかし、そのほぼ全員が主催者によって集められたペルー出身者であり、他の南米諸国出身者の参加はなかった。中国出身者も数名参加したが、ほとんど交流できず、途中で同じビル内にあるカラオケ店へ行ってしまった。

外国につながる子どもが多く在学する潮田小学校では、外国人の子どもを対象に自分のルーツについて理解を深める特別授業「YY まつり」が行われている。同校教諭の K 先生によれば「南米出身の母親が南米の食べ物等を作ってもって来たり、南米の文化を生徒に紹介したりする」いつもは日本人が主となってものごとを行うことが多いが、この時は南米出身者が主役となれるため「うれしい」と南米出身のお母様方には非常に好評だそうだ。日本人の母親の参加は今のところない。（2012 年 12 月 19 日インタビュー）

表2 「既存の交流会の分析と評価1」

	メリット	参加しやすさ	持続性	その他制約	考えられる対策
ランゲージエクスチェンジ (ex. 港北国際交流ラウンジ「モーニングコーヒー」)	<ul style="list-style-type: none"> ・日常で使う「言語」の上達につながる ・利害が一致 	1人で参加するのは緊張する 外国語で話すことになれているかによる	会話の内容によっては可能	<ul style="list-style-type: none"> ・外国語が出来ない人・初級の人が参加しにくい ・参加者が英語に偏る 	<ul style="list-style-type: none"> ・参加者の言語レベルを分ける
おまつり (ex. 青葉区国際交流ラウンジ「わくわくまつり」)	<ul style="list-style-type: none"> ・日本人、外国人が共同して企画を立てる ・たくさんの人が参加する 	外国に興味がない人でも、気軽に立ち寄れる参加しやすい。	内容にもよるがおまつりは非日常的な空間であるので、知るきっかけ(入口)にはなっても深い理解はしにくい	<ul style="list-style-type: none"> ・場所、予算。後片付け、企画者の負担 	開催日数を増やす
外国人を講師に招いた講座 (ex. 青葉国際交流ラウンジ「アフタヌーンティー」)、もしくは日本文化を紹介する講座	<ul style="list-style-type: none"> ・外国人が活躍する場所を提供する ・お互いの文化を理解し合う場(対話が可能) ・近くに住んでいる外国人と付き合うようになるきっかけ 	<ul style="list-style-type: none"> ・外国に興味のない人は時間とお金をかけてわざわざ来ない ・また積極的な人でなければ講師を引き受けてくれない ・知名度が低い 	<ul style="list-style-type: none"> ・講座の内容によるが、「知る」ことで日常生活において外国人と接する時の気持ちに変化がもたらされる ・講座が面白ければ、リピーターも増える 	<ul style="list-style-type: none"> ・費用 ・講師となる外国人の日本語の能力 ・参加者の偏り 	<ul style="list-style-type: none"> ・興味を引く内容を考える ・友人を連れてくると特典がある ・会話など交流の時間を増やす ・ボランティアなどが通訳 ・参加を呼び掛けるパンフレットなどの改善

表3 「既存の交流会の分析と評価2」

	メリット	参加しやすさ	持続性	その他制約	考えられる対策
親子で日本語サロン (ex. 鶴見国際交流ラウンジ「親子カンガルーサロン」)	<ul style="list-style-type: none"> ・日常で使う「言語」の上達につながる ・外国人妻の孤立を防ぐ ・子育て(子どもの教育)の悩みを相談できる 	子どもと一緒に参加しやすい。	知り合いや相談相手を見つけ、その後も交流するきっかけにはなる	<ul style="list-style-type: none"> ・日本人母親のメリットは少ない ・外国語が出来ない人・日本語が初級の人が参加しにくい 	<ul style="list-style-type: none"> ・日本人母親の外国人に対する理解を高める
ドキュメンタリー映画や演劇の上映会 (ex. 浜松学院大学映画上映会、多文化演劇ユニット岐阜県可児市)	<ul style="list-style-type: none"> ・映画を見ること自体がハードルが低い ・視覚から得られる情報は大きい ・問題をまじめに考えるきっかけになる 	<ul style="list-style-type: none"> ・時間のある人に限られる ・映画や演劇が好きな人は参加しやすい 	<ul style="list-style-type: none"> ・内容によるが有り。 	<ul style="list-style-type: none"> ・映画作成費 ・外国人が参加する場合、日本語能力 ・外国人側の取材拒否 ・作成者の主観が入る ・言葉 	<ul style="list-style-type: none"> ・適度な上映時間 ・大学などドキュメンタリーをつくる側や協会、外国人との協力 ・2か国語以上のサブタイトルをいれる
料理教室	<ul style="list-style-type: none"> ・外国人が活躍する場所を提供する ・食べることがきらいなひとはいない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・料理が好きな人、食べるのが好きな人は参加しやすい(外国に興味がなくとも) 	<ul style="list-style-type: none"> ・楽しいだけの講座にならないための工夫が必要 	<ul style="list-style-type: none"> ・費用 ・場所 ・火 	<ul style="list-style-type: none"> ・料理をする前に講師の人の国を紹介する ・いっしょに食べて、交流する時間も十分にとる。

表4 「既存の交流会の分析と評価3」

	メリット	参加しやすさ	持続性	その他制約	考えられる対策
日本語講座 (ほぼすべての国際交流協会が主催、助成金を受け、外国人は無料でレッスンを受けられる)	・ 日常で使う「言語」の上達につながる ・ いい仕事を見つげられる	・ 勉強する意思があるか否か ・ 通える時間があるか(勤務しているとな難しい)	・ 日本語ができる ・ コミュニケーションがとれるようになる	・ 日本語を勉強するモチベーションを保てるか ・ 日本語を教えるボランティアの数と質 ・ 交流の役割は少ない	・ 日本語教師育成講座の設立(ex 東京外大セミナー「多言語・多文化社会専門人材養成講座」)
シンポジウム(ex つづきMYプラザ「知ることから始める外国につながる、地域の子どもたち」)	・ 外国人、外国人生徒、学校の先生、国際交流協会ボランティアがパネルディスカッションを行うことで問題を多角化できる ・ 深い議論ができる ・ 心のうちを知ることが出来る	対象は全員だが、学校関係者など外国人移住者と接触が大きい人にやや偏る	あり。シンポジウム後、日常生活における外国人との接触や考え方に変化がみられる。	・ シリアスなトピックなので参加のハードルが高いと感じる人もいる ・ 外国に興味のない人はやや来にくい (・ パネリストになれる外国人の主観が入る) ・ 言葉	・ 適度な公演時間 ・ 専門家ではなくてもわかりやすく、理解しやすい内容にする ・ 誰でも参加しやすい雰囲気をつくる
モデルとなる外国人のスピーチと音楽ライブ (ex 浜松国際交流会「外国にルーツを持つ若者トークイベント×音楽ライブ」)	・ 知るきっかけになる ・ 心の内を知ることが出来る	参加しやすい ・ 音楽に興味がある人を呼び込める	あり。日常生活における外国人との接触や考え方に変化がみられる	・ 場所 ・ 費用 ・ スピーチや音楽ライブを行える外国人の主観が入る	・ 自治体の協力と理解を得る(費用面で)

3.4 交流会参加のインセンティブについて

内容がいいものでも参加者がいなければ意味がない。様々な国際交流会を見てきたが参加者が少なかったり、参加者に偏りがあつたりする点に気が付いた。交流会主催者は「日本人と外国人との交流の場所なのに肝心の外国人が来ない。」「粗品や食べ物でつっても来ない人は来ない。でも、もちろん強制はできない。」(2012年8月2日 青葉国際交流ラウンジI氏インタビュー)「日本人ボランティアが『片思い』して、外国人がほとんど来ない交流会が多い」(2012年12月1日 宮崎県国際交流協会 T氏 インタビュー)と参加者が少ないことについて嘆く。青葉国際交流ラウンジでは地域の国際交流の場として軽食を食べながらおしゃべりをする「モーニングコーヒー」を月に一回開いているが、日本人と外国人の比率が45:8(2012年4月)、34:4(2012年5月)、6月は38:6(2012年6月)、37:3(2012年7月)と圧倒的に外国人が少ない。(2012年8月2日 同国際交流ラウンジインタビュー時、見せてもらった報告書より)横浜市青葉区は外国人登録者数が少ないことに対し(3,329人、平成23年度)、比較的富裕層が集住し、大手メーカー、商社に勤め、海外経験がある人などが多いことが背景にあるようだ。

一方、外国人が集まっている交流会は、その国の出身者が主催した交流会である。しかし、これは筆者が目指す交流会とは違う。鶴見国際交流ラウンジで行われたペルー人主催

の交流会に100人の参加があったことをみると、同じ出身国同士のネットワークはかなり強いことに気が付く。鶴見国際交流ラウンジ佐藤館長の話でも（2013年1月22日インタビュー）外国人コミュニティの中のキーパーソンに呼びかけをお願いしなければ、人を集めるのは難しい。ブラジル人を集める場合はABCジャパンにお願いする。ABCジャパンが呼び掛けると30人程度のブラジル人は集まる。」しかし、「交流会を開いても違う国どうしだと交流しない。同じ南米系でもブラジル人はブラジル人、ペルー人はペルー人、ボリビア人はボリビア人のコミュニティがあるため交わらない。ブラジル人の呼びかけにほかのペルー人が集まることがほとんどなければ、ペルー人の呼びかけにブラジル人が集まることもほとんどない。」というように既存の交流会の多くは新たな交流が生まれにくい状態にある。

筆者が様々な国際交流会に参加する中で「楽しい交流会」は参加のハードルが低い（特に日本人にとって）、楽しいだけで終わってしまっているように思えた。東京女子大学現代教養学部教授 石井恵理子氏は「横浜市・地域日本語教室事例発表会」（2011年11月27日）でこのように語っている。「交流イベントというのは基本的に集まった人たちがその場を楽しんで、ああ楽しかったと言って帰れるようなイベントをしますよね。（……）民族の衣装を紹介してもらったりダンスを習ったといってもそれで自分の生活が変わるわけではない。（……）きっかけとしては十分意味があり、それなりの効果はあるだろうと思いますけど、でも、ここでとどまっていたのでは、やっぱり本当の意味での社会作りというところには届かない。」（「横浜市・地域日本語教室事例発表会 報告書」より引用）そして、交流会の楽しさと地域社会で起こるトラブルや嫌なことは別次元であり、それを乗り越えていくことが「共生」であると説く。楽しいだけで表面的な異文化理解に留まる交流会ではなく、交流会が終わった後も日常生活の中の持続する地域交流を生み出す必要があると思う。

また、つづきMYプラザの館長であり、昨年、新たな取り組みとして「知ることから始まる 外国につながる、地域の子どもたち～子どもたちの未来を、ともに描こう～」を開催したH氏は、交流会について以下のようにインタビューで語ってくれた。

「つづきMYプラザで行ったシンポジウムは新しい試みであり、非常に評判が良かった。「知ること」、知ることをやめないことが真の多文化共生であり、1番大切なことであり、シンポジウムなども合わせて理解を深めなければならない。「交流会」は1つのメニューにすぎないと思う。ただのイベントではなく、ちゃんと理解するには、楽しいだけの一過性のイベントではなく、定期的に繰り返し行う必要がある。基本的に日本人は異なる文化について知らなすぎる人が多いので「知ること」が1番大事である。外国にルーツを持つ人はワンパターンではなく十人十色であるということを知らなければならないし、外国人が抱える課題、問題を知ることからはじめなければならない。」

「ただの楽しいだけのイベントとしての交流会なら私は反対です。体験型、知ることが出来る交流会にしなければならない。多文化共生について日本人はあまり知らないので、真の多文化共生を進めるためには、様々なバックグラウンドを持つ人たちを理解しなければならない。問題を共有しなければならない。きっかけは「交流会」という表面的なものでも、日常の中で継続していき、常に知っていく姿勢が大事だと思う。」

「外国人に対する「偏見」は残っていると思う。でも、それは普通のことであり、私たちが他国にいても外国人として偏見を持ってみられることも当然ある。それは必ずしも悪いことではない。差別・偏見について言えば、日本はあまりそれが無いのではと思う。むしろ、違う文化に対して、知らないこと、無関心であることが多い。

(つづき MY プラザで開催される)「プラザまつり」のように外国人も含めたボランティア、しかも年齢もことなる人々で1つのものをつくりあげること自体が「多文化共生」を促進することに役に立つ。つづき MY プラザでは「体験型」の交流を大切にしている。」

筆者は国際交流会主催者、10人以上にインタビューをしたが、中には「楽しければそれでいい」「楽しくない交流会では人が集まらない」という意見も数多く聞かれた。しかし、鶴見などの外国人集住地を訪れると言語問題や不就学児童の問題など日本人と外国人移住者が協同して解決していかなければならない様々な問題が顕在していた。筆者は石井氏やつづき MY プラザの H 氏が言うように楽しいだけでは終わらない交流会をデザインし、実施することを目指していきたい。

以下は既存の交流会の上手くいっていないところ (As is) と目指すべき新しい交流会 (To be) をまとめたものである。

既存の交流会 (As is)

- ・外国人移住者の目線に立てていない
- ・外国人移住者が集まる交流会において、地域住民が参加していない
- ・楽しいだけで終わっている。
- ・決まった人だけが参加
- ・行政・住民・ボランティアが同じ方向を向いていない
- ・関心のない人はアメ（粗品）を呼びものにしても来ない
- ・マネジメントの視点がない（ボランティア任せ）

新しい交流会 (To be)

- ・日々の暮らしの中で、持続する交流を生み出せる
- ・気軽に参加することができる。

-
- ・日本語の能力が向上する
 - ・行政・住民・ボランティア・外国人が協力し合う（マネジメントの視点）
 - ・次世代のボランティア（多文化社会コーディネーター）をうみだす

3.5 地域ふれあいクイズ大会の提案

本論文の題目でもある「多文化共生のための新しい国際交流会」の新規性は、図 6 のように旧来の交流会は、参加しやすいが表面的な楽しさで終わってしまう交流会と内容が難しく参加しにくい交流会に大きく分類されると感じた。ランゲージ・エクスチェンジは英語ができない日本人や日本語ができない外国人にとって参加のハードルが非常に高い。第三章で言及した通り、南米系外国人移住者の多くは日本語が十分にできない。そのため、ポルトガル語やスペイン語の説明を付け加えるなど言葉のハードルを下げる必要がある。楽しいだけでなく、日本語やお互いの文化について勉強できる交流会の必要性を図 6 で示した。

また、今までの交流会は子ども向けの交流会（学校の勉強などを中心とする）と文化講座などの大人向けの交流会にわかれていた。「外国人親子カンガルーサロン」など親世代（移民 1 世）と子ども世代（移民 2 世）を対象とした交流会もあるが、少数である。親世代、子どもと抱えている課題がそれぞれ違う。特に第三章で考察した南米につながる子どもの教育をどうするべきかという問題はかなり深刻であり、子どもたちに勉強を教えると同時に親の意識も変えていかなければならない。そこで対象を小学生程度の子どものとその親とし、教育イベントを主とする交流会を企画したい。

図 7 では既存の交流会は日本人主催の交流会の参加者は日本人に偏り、外国人主催の交流会はその国の出身者に偏ることを示した。新しい交流を生み出すためには外国人移住者にとって参加のインセンティブやニーズとは何かを考えなければならない。交流会のプロトタイプづくり、実際に南米系外国人移住者に意見を伺い、参加したいと思ってもらえるものまで落とし込んだ。詳しくは次章で説明する。

図 8 は新しくデザインする交流会の機能分析である。特に赤字で書いた①「語学力（日本語）の向上」、②「情報の共有化」、③「南米系外国人移住者の要望を把握する」、④「母国のイベントにも留意する」を満たす交流会として、「クイズ大会」を主とする交流会を提案する。（図 9）

クイズ大会の流れは以下のように計画した。

1. 事前テスト（漢字）を1分間、クイズの前に受ける
⇒①を満たす
2. 南米に関するクイズと日本に関するクイズを半分ずつ出題する
⇒①②④を満たす
3. クイズの正解と解説
⇒①②④を満たす
4. アンケートを記入し、テスト（事前テストと同じもの）に答えてもらう。
⇒①を満たす
5. 賞品（お菓子）を渡し、お礼をする。（フリートーク、自由解散）
⇒②を満たす
6. 次回の交流会に活かすためにクイズの正答率やアンケート結果を分析する。
⇒③を満たす
7. クイズの正答のばらつき（特に漢字）をすべてデータベース化
⇒①を満たす
8. そのデータベースを教育カリキュラムに役立てる
⇒①を満たす

なお、8（黄色の点線部）は実際行うことはできないが、有識者レビューなどで、ご意見を伺い妥当性を確認していきたい。

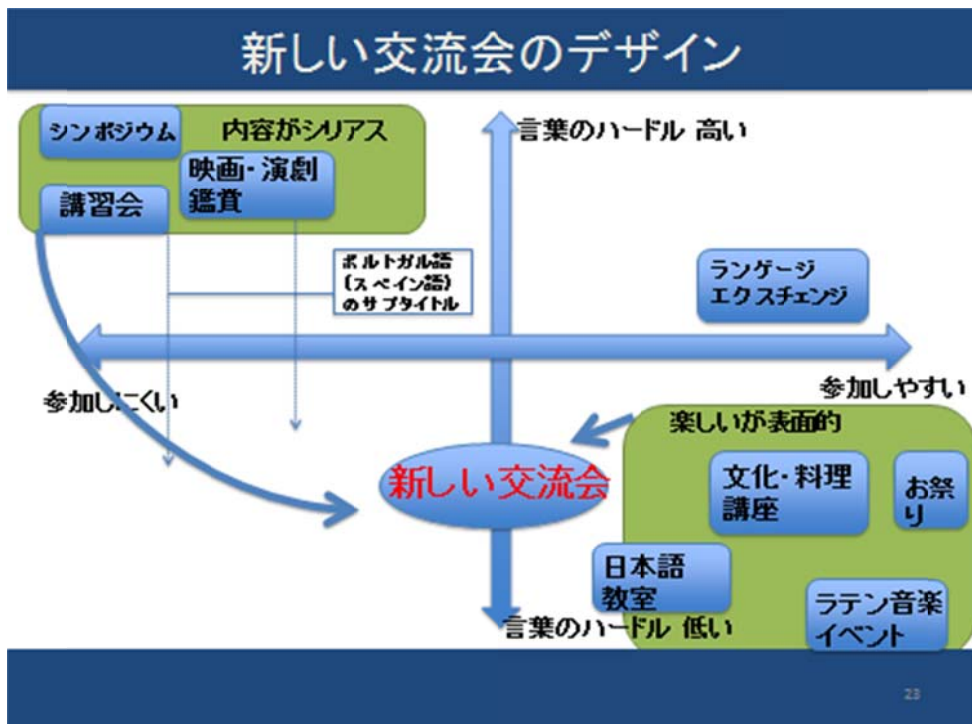


図7「新しい交流会のデザイン1」（筆者作成）

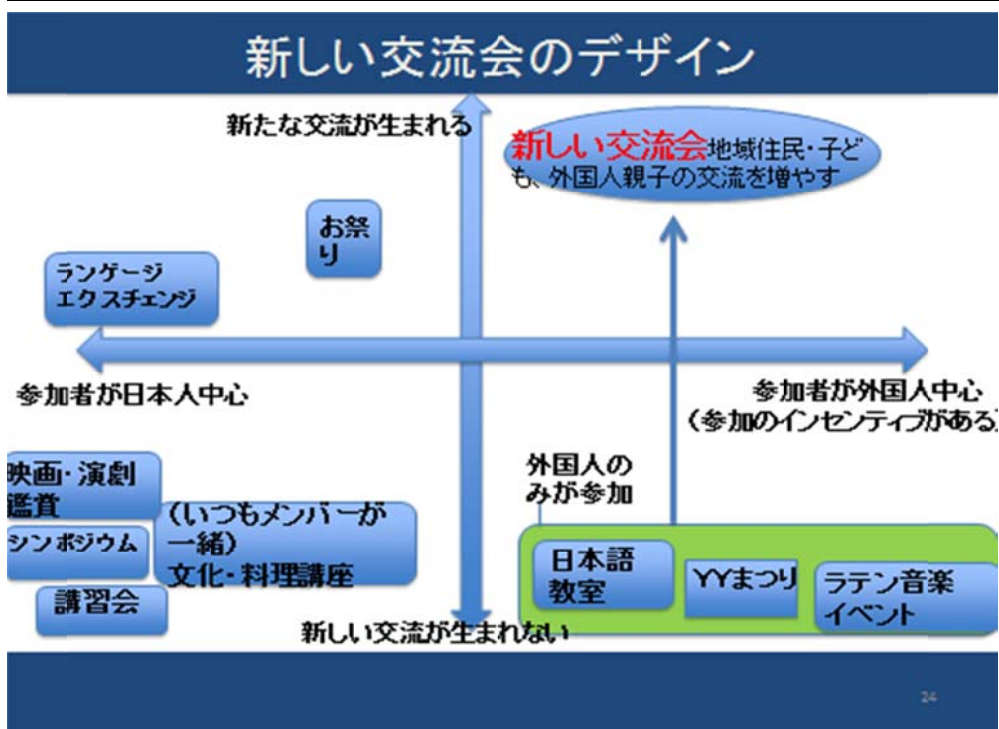


図8 「新しい交流会のデザイン2」(筆者作成)

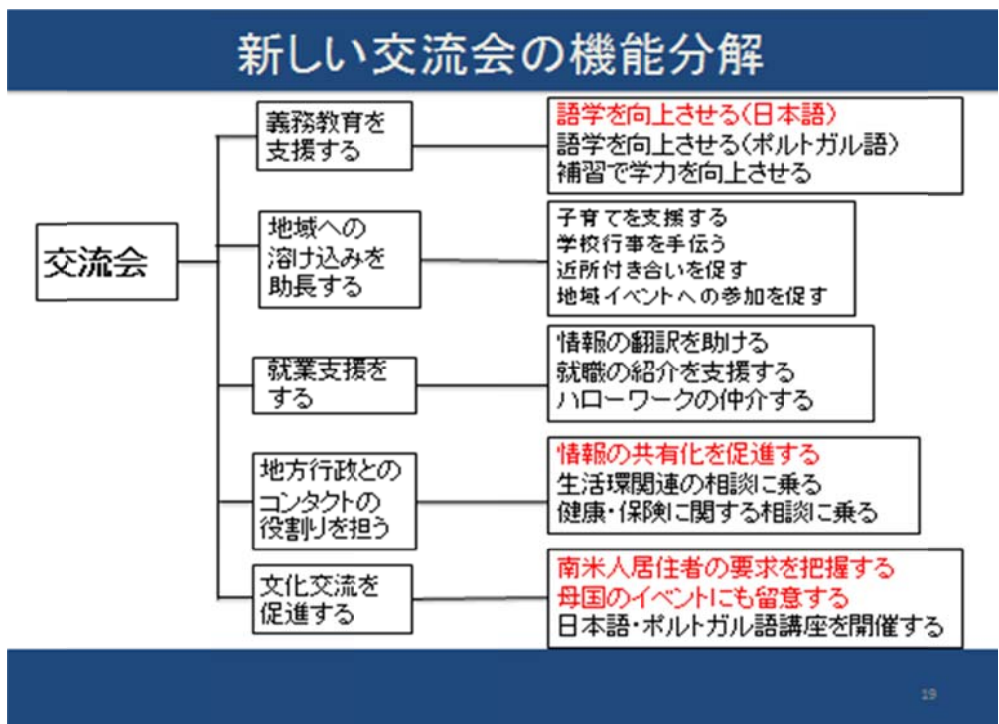


図9 「新しい交流会の機能分析」(筆者作成)

多文化共生のための 地域ふれあいクイズ大会の提案

対象＝日系南米人が多く住む潮田地区に暮らす日本人および南米人親子5組程度

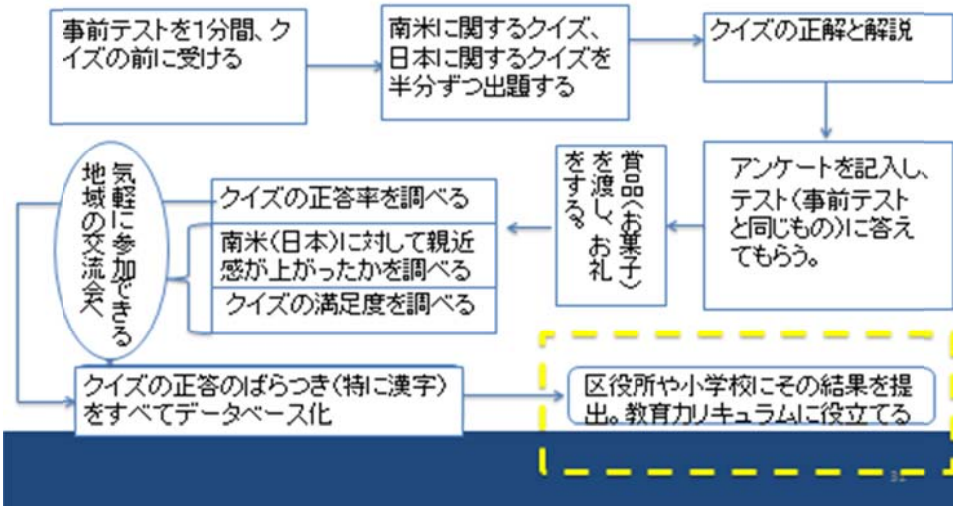


図10 「地域ふれあいクイズ大会の提案」

xiv 藤巻秀樹氏の著書『移民列島』のはしがきに「日本はれっきとした『移民受け入れ国』なのである。」とある。

xiv 1999年豊田市保見団地の一角で右翼団体とブラジル人の若者が対立し、愛知県警が出動する騒ぎが起きる等、地域住民と外国人移住者との軋轢は多数報告されている。

交流会のタスクとスケジュール

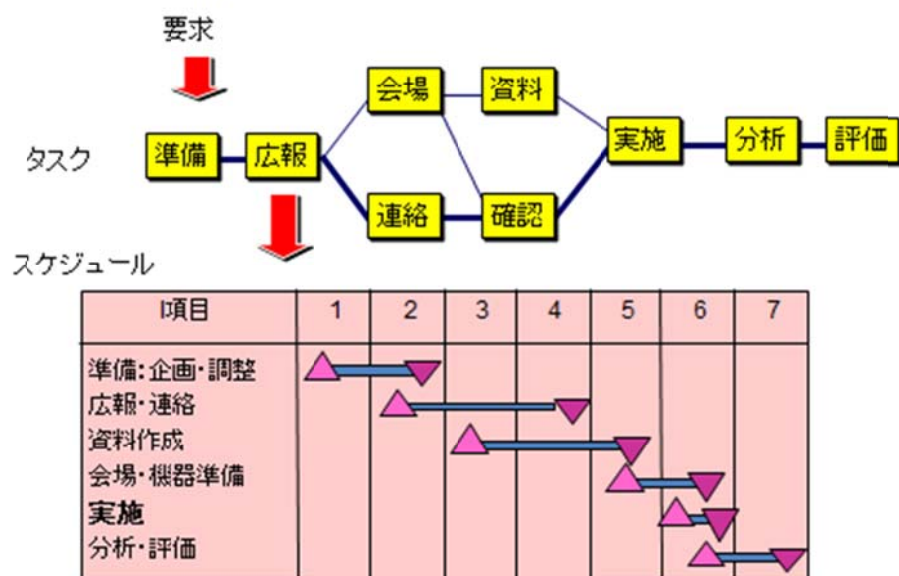


図2 「交流会のタスクとスケジュール」

表1 「交流会のタスクとスケジュール」(図2を表現)

準備・ 企画・ 調整	12月10日～1月12日	<ul style="list-style-type: none"> ・プロトタイプ作成 ・プロトタイプのフィードバック・改良
広報・ 連絡	12月22日～1月5日	<ul style="list-style-type: none"> ・広告(ポスター)の作成・改良 ・ポスター貼り(計7か所) ・ポスター配り(国際交流ラウンジ前、ABCジャパンにて) ・メールで直接アプローチ(ブラジル人3名、日本人7名) ・メーリスにて宣伝(30人程度に広告) ・Facebookにて宣伝(どれだけ見られたか不明) ・口頭にて宣伝(学習ボランティア時、子どもたちへ呼びかけ) ・当日呼び込み

資料作成	12月8日～1月4日	<ul style="list-style-type: none"> ・問題（クイズ）作成（学習支援ボランティア等にてつまずきやすいと思われた漢字を中心に問題を作る） ・問題（クイズ）の解説を作成 ・問題（クイズ）の解答用紙を作成 ・クイズをもとに漢字テストを作成 ・アンケート作成
会場・ 機器準備	12月24日～クイズ大会 当日	<ul style="list-style-type: none"> ・会場探し ・会場見学 ・会場（潮田センター）予約 ・ビデオ、カメラ、プロジェクター準備 ・筆記用具準備 ・景品購入（お菓子、500円分のクオカード10枚） ・解答用紙、アンケートを30枚コピー
実施	1月5日、6日、12日の 3日間開催	<ul style="list-style-type: none"> ・潮田地区センターにて1月5日、6日、クイズ大会実施 ・鶴見国際交流ラウンジにて1月12日、クイズ大会実施
分析・ 評価	1月12日～1月30日	<ul style="list-style-type: none"> ・アンケート、クイズ正答率の分析（1月12日） ・有識者レビュー1 鶴見国際交流ラウンジ館長 佐藤義則氏（1月22日） ・有識者レビュー2 慶應義塾大学法学部教授 佐藤良和氏（1月23日） ・有識者レビュー3（1月30日）日本経済新聞社 藤巻秀樹氏

4.1 企画立案フェーズ—プロトタイプ作成—

ユーザー目線に立った交流会をデザインするためにクイズ大会の広告のプロトタイプをつくり改善すべきところを指摘してもらった。2012年12月22日(その時の様子は3.4 鶴見区での南米系外国人移住者へのインタビューaで記述した)、忘年会という場所を借りて、小学生の子どもを持つ日系ブラジル人の母親世代(30~40代)5名に事前に作ったポスター(図3)を見てもらいながらアンケート(APPENDIX 1「プロトタイプに関するアンケート」)に答えてもらった。アンケートを読むのも書くのも厳しい様子だったので口頭インタビューも交えながらコメントをいただいた。以下のとおりである。

- ・このパンフレットでは外国人は全く読めない。
- ・パンフレットを作るときは、必ずポルトガル語かスペイン語を入れてほしい。
- ・漢字は読めないの、ローマ字かカタカナを入れる必要がある。
 - ・交流会のタイトルをポルトガル語にする。文章に最低一つはポルトガル語を入れてほしい。
- ・クイズは日本語で行うなら、通訳する人がほしい。
- ・広告にある地図は漢字だらけで全く読めない。人に道を聞くこともあるので、ローマ字で通りの読み方を入れてほしい。
- ・地図だと思わなかった
- ・働いているので平日は忙しい。土日をお願いします。
- ・面白そう。参加したい。

かなり易しい日本語で書き、漢字にはふりがなをふったが、図3だと日本語が多すぎて読む気になれないという意見が大多数であった。日常会話は問題がないのだが、日本語を読むこと書くことについては抵抗感があるようだった。アンケートの記述はかなり難しそうで、回答は時折ポルトガル語で書かれていた。

クイズ大会というアイディアは「面白そう」と好評であった。参加したいと答えた人は1名、時間があったら参加したいは4名であった。クイズ大会の候補日は1月6日(日曜日)か1月7日~11日(月曜日~金曜日)のいずれかであったが、働いているため平日は来ることができない土日にしてほしいと5名全員から言われたので日にちは1月6日に決定した。

コメントを反映させ、ポスターを作り直したのが図4である。大幅にポルトガル語を増やした。全ての漢字に振り仮名をつけ、会場までの地図もわかりやすく変更した。



おやこで
いっしょに

く
つるみ区

たぶん かきょうせい
多文化共生のための

ち い き

く い ず た い か い

小学生地域ふれあいクイズ大会

なんべい ぶらじる べるー ぼりびあ こども おかあさん
南米(ブラジルやペルーやポリビアなど)につながる子どもとお母さんと
にほんじん こ おかあさん ちーむ くいず
日本人の子どもとお母さん、いっしょにチームをつくってもらいクイズ
たいかい
大会をおこないます。クイズは日本にかかわるものと南米にかかわるも
はんぶん
の半分ずつ出します。おたがいの国について知れるチャンスです!!大会
のさいごには日本のおかしとブラジルのおかしをいっしょにたべましょ
う!

ねん がつ にち にちようび
にちじ: 2013年 1月6日(日曜日) 13:00 ~
17:00

ばしょ: 潮田地区センター うしおだしょうがっこうから歩いて 分です!

さんかできるひと: 南米(ブラジル、ペルー、ポリビア、エクアドル、アルゼンチン、ウルグアイ、
ぱらぐあい
パラグアイなど)につながる親子(おやこ)と小学校の子どもを持つ親子



←うしおだ地区センターまでのちず

図3 「地域ふれあいクイズ大会広告(プロトタイプ)」



おやこでいっしょに

Com os seus filhos!

つるみ区 多文化共生のための

しょうがくせい ち い き く い ず た い か い 小学生地域ふれあいクイズ大会

“Quiz game”Evento para as mães e os estudantes.

なんべい ぶらじる べー ぼりびあ こども おかあさん にほんじん こ おかあさん
南米(ブラジルやペルーやポリビアなど)につながる子どもとお母さんと日本人の子どもとお母さん、
ちーむ くいずたいかい
いっしょにチームをつくってもらいクイズ大会をおこないます。クイズは日本にかかわるものと南米
にかかわるものはんぶんずつだします。おたがいの国について知れるチャンスです!!大会のさいごには
にほん
日本のおかしとブラジルのおかしをいっしょにたべましょう!

ねん がつ にち にちようび

にちじ: 2013年 1月6日(日曜日) 13:00 ~ 15:00

Data e Horário: 6 de janeiro(domingo) A partir das 13:00 hs às 15:00 hs

うしおだちくせんたー
ばしょ: 潮田地区センター うしおだしょうがっこうから歩いて10分です!

Local: Ushioda chiku center ウシオダ チク センター

さんかしてほしいひと: 南米(ブラジルなど)につながる親子と小学校の子どもを持つ親子

日本人の方へ~ご協力お願いします~: 多文化共生に関心のある地域の方々もご参加ください!! 小学校の親子
づれも大歓迎します。まずは下記のメールアドレスにお気軽にご連絡ください。

Estrangeiros de qualquer país de America Latina e japoneses(com crianças do ensino fundamental)

さんかひ: むりよう

Participação: Gratuito

※Por favor, traga um TICKET ou envia um Email (Sanka sya
ha Mail kudasai): brasil.jpn@gmail.com

※Almoco Grátis (Ohirugohan tuki)

実施責任者 (responsável): Yuka Yamamoto, SDM Keio university 慶應義塾大学大学院 SDM 研究科

うしおだ地区センターまでのちず
(Mapa de Ushiodachiku center)



クイズたいかいについて、なにか しつもん (questão) があれば
 れんらく (メール) ください!! brasil.jpn@gmail.com

図4 「地域ふれあいクイズ大会広告改良版」 要望があった通りポルトガル語を付け加える
 など工夫をした。

4.2 企画立案フェーズ—広告・連絡—

12月22日の忘年会で、クイズ大会の企画自体は好評であり、1月上旬に開催予定であることを宣伝した。「行きたいです」との回答をいただき、インタビューを通して打ち解けることができた3人の方とメールアドレスを交換した。日本人の親子をどう集めるかが課題であったが、この3人の方のつながりで人を集めることができるのではないかと期待した。しかしながら、交流会の人集めには苦勞の連続であった。

2012年12月22日

クイズ大会の会場に最も適していると思われた潮田地区センターに電話をして、1月6日13:00~17:00まで中会議室を予約する。

忘年会のお礼と交流会の日程が決定したことを知らせるために連絡先をいただいた3人の日系ブラジル人のお母さん方にメールをする。しかし、2名はあて先不明で戻ってくる。I氏は「参加したいです。地区センターまでの地図を送ってください」との返信をいただき、すぐに地図を送ると同時にほかの日系ブラジル人の友達を誘っていただけないかを聞いてみる。しかし、その後、音信不通になった。

2012年12月23日

現地調査を通して知り合った日本人ボランティア7人程度に協力を依頼する。それと同時に知り合いに南米系外国人移住者はいないかを聞いてみるが、いずれもコンタクトを取れないという回答であった。

2012年12月26日

ようやくポルトガル語訳をいれたポスター図4が完成する。鶴見に行きポスターを7カ所に設置する。(図5)

① 鶴見国際交流ラウンジ

② 潮田地区センター(クイズ大会開催地)

直々にポスターを貼らせてもらうことを願います。

③ 横浜市国際学生会館(地区センター上)

国際交流を目的に建てられた研究者・留学生が滞在している寮で日本人。外国籍含めて135人が住んでいる。直々にポスターを貼らせてもらうことを願います。

④ ブラジル食品店

直々にポスターを貼らせてもらうことを願います。

⑤ ⑥ ⑦ 「まちの広告版」3カ所(潮田公園前入口よこ、バス停「汐鶴橋横」、鶴見会館前)無料で貼れる掲示板(横浜市都市整備局都市デザイン室の管轄)に掲示した。

2012年12月27日

誰からも参加の連絡が来ないことについて焦り、当日、参加者ゼロという最悪の事態を想定して、鶴見国際交流ラウンジで行われるイベント後、当日集まった人を対象にクイズ大会を行う許可を取る。



図5 ポスター設置場所

同日

鶴見国際交流ラウンジの担当者と修士研究の一環で行うクイズ大会を説明し、館長とスタッフの方に人をどう集めればいいのかを相談する。

ラウンジにポスターをはるのは構わないが、年末、年明けでも館は開いているものの日本語教室は休みになるので人がほとんど来ない。「1番目立つところに貼って呼びかけもするけど期待はしないでください。」26日の夕方16時の時点でラウンジに来た人は3人であった。年末に外国人が来たとしても生活保護の相談など深刻なものが多いので、そういう人たちに交流会を勧められない。ラウンジで行われる日本語教室で宣伝するのが一番いいと思うが、日本語教室は1月の2週目からはじまる。交流会の開催時期がよくないかもしれない。

「交流会の人を集めるって本当に難しいですよ。」と担当者の方は言ったが、自分が交流会を企画してそれを実感した。

交流ラウンジで行っているイベントもラウンジに日本語を習いに来ている人に話しかけて人数を集めている。例えば1月13日に開く「外国人のための日本のお正月を楽しむ集い」は館内や区役所や外国人が経営している食料品店などに置き、HPでも11月から宣伝しているが、定員15名のところまだ7名しか集まっていない。ラウンジ担当者曰く、「生活に余裕のある人ではないと交流会に来ないので人を集めるのはなかなかむずかしいです」日本語を勉強している人は生活に余裕がある人なので、話しかけると来てくれる可能性が高いそうだ。もし1月6日に人が集まらなかった場合、第二回を企画するので、その時には日本語教室で宣伝させてくれるように念を押しといた。

館長より、ラウンジに貼るよりも国際学生会館に貼ることを勧められ、国際学生会館まで足を運ぶ。

2012年12月28日

鶴見国際交流ラウンジを訪ね、相談に来ていたブラジル人に直接配布(2人)、ABCジャンの事務所にも行き、協力を要請するものの年末年始は事務所が閉まり、実家に帰る人が多く、参加は難しいということだった。その場にいた方々に気が向いたら来てくださいとパンフレットを直接配布する(2人)。その後、大雨の中、パンフレットをすべて回収し、興味を持ってくれた人が連絡先を引きちぎれるようパンフレットにチケッとを付け、防水用のクリアファイルに入れて、全箇所パンフレットを貼り直した。(写真2)

2012年12月30日

12月23日に協力依頼を要請していた潮田小学校で補講教室を行っているうしおだ塾代表S氏と連絡が取れ、本人は当日来られないが、メンバーに連絡してみるとのこと。うしおだ塾のメーリスをつかわせていただき、大学生・および地元(鶴見区)在住の講師の方々、約30名に宣伝する。1名のみ返信(1月1日)。また、うしおだ塾のFacebookのページでも宣伝させてもらう。

2013年1月5日

使えるネットワークはすべて使って尽力したが、参加者が確定しないまま、前日を迎える。この日には慶應義塾大学法学部の学生が主催した外国につながる子ども(高校生)たちのための新年会(初詣と書初め大会)が開かれた。それに参加させてもらい、余った時間でクイズ大会を行った。当初は小学生とその親を対象にと考えていたが、南米につながる高校生にクイズとアンケートに答えてもらった。

翌日に企画していた「地域ふれあいクイズ大会」にも弟妹を連れて来てくれるようジュースをおごり、念を押しした。5人にパンフレットを渡し(図6)、参加者にはクオカード500円分を渡すことを約束した。「時間あったら行きます」という感じだったが、結局、1月6

日の交流会には来てくれなかった。今考えれば、誰も交流会に参加してくれないことを懸念し、人集めに必死になりすぎて被験者の気持ちを十分に考えることができていなかった。それことについては反省している。ただ、12月22日～1月5日という短期間で、鶴見を歩き回り、広告・連絡を一人で行い、できる限りのことはやった。景品や昼食が、参加のインセンティブとなると思っていたが、それらはほとんど効果を発揮しなかった。筆者がアンケートや実験に協力する際にもらって1番嬉しいものは何か考えた時、図書カードかクオカードが適切ではないかと思った。外国につながる子どもたちはよくコンビニを利用する。図書カードは日本語の本を読むことが得意ではないので商品はコンビニで使えるクオカードにした。個人的にはプリペイドカード(=お金)を子どもに渡すことにとっても抵抗感があった。結局はクオカードを呼びものにしても人は来てくれなかった。(結局はクオカードを渡さず、協力してもらった)景品よりも日頃の信頼関係や現場で活動するうえで徐々にできていくネットワークが人集めには必要であることを強く実感した。鶴見で実験を行うと決め、全力で現地調査を行った3カ月間だったが、数カ月では地域の人たちに協力してもらえ、確固たるつながりをつくることは困難であった。




写真1 掲示板に掲示したポスター改めて見ると文字が小さくなってしまったのが残念で

ある。日本語、ポルトガル語両方で情報を入れると文字数は大きくなってしまふ。



写真2 掲示板上に掲示したポスター 雨にぬれないようクリアファイルで補強し、興味を持ってくれた人が連絡先を持ち返ることができるよう下部にチケットをつけた。

もれなく、しょうひんがあたる



1がつ6にち
6 de janeiro(domingo) A
partir das 13:00 hsàs
15:00 hs

しょうがくせいちいき くいずたいかい
小学生地域ふれあいクイズ大会

“Quizgame”Event para as mães e os estudantes.

なんべい ぶらじる べるー ぼりびあ こども おかあさん にほんじん こ おかあさん
南 米 (ブラジルやペルーやボリビアなど)につながる子どもとお母さんと日 本 人 の子どもとお母さん、
ちーむ くいずたいかい くいず にほん なんべい
いっしょにチームをつくってもらいクイズ大 会をおこないます。クイズは日本にかかわるものと南 米
にかかわるものはんぶんずつだします。おたがいの国について知れるチャンスです!! 大 会 のさいごには
にほん
日本のおかしとブラジルのおかしをいっしょにたべましょう!
ねん がつ にち にちようび
にちじ: 2013年 1月6日(日曜日) 13:00 ~15:00
Data e Horário : 6 de janeiro(domingo) A partir das 13:00 hsàs 17:00 hs
ばしょ: 潮田地区センター うしおだしょうがっこうから歩いて10分!
Local: : Ushiodachiku center ウシオダ チク センター

さんかしてほしいひと: 南米 (ブラジルなど) につながる親子と小学校の子どもを持つ親子
日本人の方へのご協力お願いします。多文化共生に関心のある地域の方々もご参加ください!! 小学校の親子
づれも大歓迎します。まずは下記のメールアドレスにお気軽にご連絡ください。
Estrangeiros de qualquer país de America Latina e japoneses (com crianças do ensino fundamental)
Com lunch grátis (Ohiru-gohan-tuki)
Participação : Gratuito (reserva é necessária)
Mail: brasil.jpn@gmail.com
実施責任者 (responsável) : Yuka Yamamoto, SDM Keio university 大学院 SDM 研究科

図6 「地域ふれあいクイズ大会広告改良版(最終版)1」 1人も参加者がいないまま年末を迎えてしまう。賞品が当たること、お昼ご飯がつくことを強調するポスターに作りかえる。

4.3 企画立案フェーズ—資料作成—

クイズ大会のクイズ (APPENDIX3) を作成した。日本で暮らすうえで必要な漢字をメインにクイズを作った。潮田小学校で外国につながる小学校 1 年生の子どもが日付や曜日を読むのに苦労していたことから、曜日の漢字を使った問題やお正月にちなむ問題を作った。勉強を教えていた高校生の一人が苦手な漢字を大好きなアイドルの名前の漢字と一緒に覚えていたので、「もんだい 4」のようなアイドルの漢字を問う問題も考えた。また、南米のイベントや文化にも留意し、オリンピックやポルトガル語の知識を問うような問題も考えた。

クイズ大会の前後でどれだけ漢字が覚えられたかを図るために「漢字テスト」 (APPENDIX2) を作成。クイズに出てきた漢字を取り入れる。

アンケートは南米系外国人移住者用、日本人用両方を作り、

- 1、他の交流会に比べて、「クイズ大会」は参加しやすかったか
- 2、日本語・漢字の勉強になったか
- 3、次回も参加したいか
- 4、日本のこと、南米のことを理解できたか
- 5、日常生活で南米人と接した時に気持ちの変化があるか

以上の 5 点について聞いた。(APPENDIX 4、APPENDIX5)

4.4 企画立案フェーズ—会場・機器準備—

南米系外国人移住者が多く住んでいる場所は川を渡った臨海部である潮田地区である。数多くのイベントが行われる鶴見国際交流ラウンジは鶴見駅前にあり、潮田地区と徒歩 25 分の距離がある。南米系外国人移住者に交流会に参加してもらうためには潮田地区で開催しなければ意味がないと思っていた。また、日本人も南米系外国人移住者とあまりかわりがない人ではなく、潮田地区に住み、日常的に彼らと接触のある人を対象としなければいけない。そこで会場を潮田地区でも特に南米系が多い、本町通と仲通の間にある潮田センターとした。ここは潮田小学校から約 10 分の距離に位置する。

一度、会場を見学し、30 名以上を収容できる中会議室を予約した。また、プロジェクターを借りられることを確認した。カメラ、およびビデオは自分で用意した。

また、参加者にブラジルのお菓子と日本のお菓子を用意しようと考えていたが、ブラジルのお菓子を購入することが難しく、また当日、何人の参加者があるかわからなかったため、保存のきくパッケージ入りのお菓子を大量に購入した。

4.5 実施と分析 評価フェーズ—「地域ふれあいクイズ大会」実施—

当初は1月6日のみの予定で合ったが、慶應義塾大学法学部の学生、鶴見国際交流ラウンジのスタッフの方々の全面的な協力で、1月5日と1月12日も開催することができた。(図7参照)

図8は実際に行ったクイズ大会の流れである。当初、企画していた前章の「3.5 地域ふれあいクイズ大会の提案」の流れとは少し変更し、ルールをできる限りシンプルに設定した。

「地域ふれあいクイズ大会」実施日

		アンケート	クイズ	場所
0	2012年12月22日	5(事前アンケート)	—	NPO 法人 ABC ジャパン
1	2013年1月5日	5	5	潮田地区センター
2	2013年1月6日	12	13	潮田地区センター
3	2013年1月12日	5	6	国際交流ラウンジ(生け花教室)

全3回、全参加人数24人
鶴見区在住24人 アンケート回収22

図7 「クイズ大会実施日」

多文化共生のための 地域ふれあいクイズ大会の提案

対象＝日系南米人が多く住む潮田地区に暮らす日本人および南米人

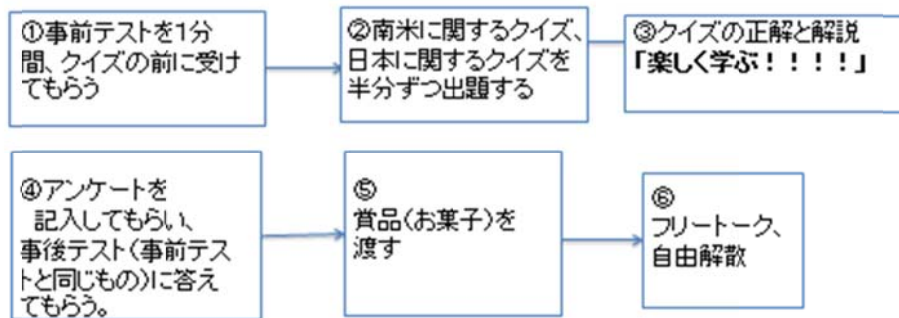


図8 クイズ大会当日の流れ

第一回目 (2013年1月5日 潮田地区センター)

慶應義塾大学の学部生7名の協力の下、南米(ペルー)につながる高校生5人にクイズとアンケートに答えてもらう。

第二回目 (2013年1月6日 潮田地区センター)

当日、地区センター前で呼び込みをした。幸い冬休みで地区センターに遊びに来ていた小学生と中学生、その親が参加してくれることになった。その中には運よくブラジル人も日本人の中にまじっていた。地区センターの事務員の方も呼び込みに協力してくれたおかげで人数を集めることができた。潮田地区内に住むブラジルにつながる子ども、日本人の子ども、保護者を計13名集めることができた。参加してくれたお礼としてお菓子を渡した。

第三回目 (2013年1月12日 鶴見国際交流ラウンジ)

この日はABCジャパンが主催する生け花教室と中学生の補習授業がラウンジで行われるという情報をラウンジの館長からいただき、許可を取り、クイズ大会を開催させていただくことになった。生け花教室には30人以上のブラジル人(30~40代の女性が多い)が集まっていた。生け花教室終了後、出てきた代表者とブラジル人の方々に少しだけお時間いた

だけないか一人ずつお願いするものの、「忙しいので」「日本語できないので無理です」との理由で断られる。その中で 1 人（鶴見区在住）だけが参加してもらえることになった。また、補習授業を受けるために来ていた中学生にも声をかけ、「漢字テストはいやだ」といながらもしぶしぶブラジル人の中学生 1 名（鶴見潮田地区在住）も協力してくれることになり、ラウンジの中国語担当の K 氏の呼びかけにより、勉強をしにきていた鶴見区在住の中国人中学生 4 人も参加してくれることになった。結果、計 6 名の参加があり、5 人がアンケートに答えてくれた。クイズ大会後にお礼としてお菓子を渡し、その後はフリートークの時間とした。クイズ大会の感想や日本で暮らすうえで困っていることや近所づきあいがあるかなどインタビューをした。

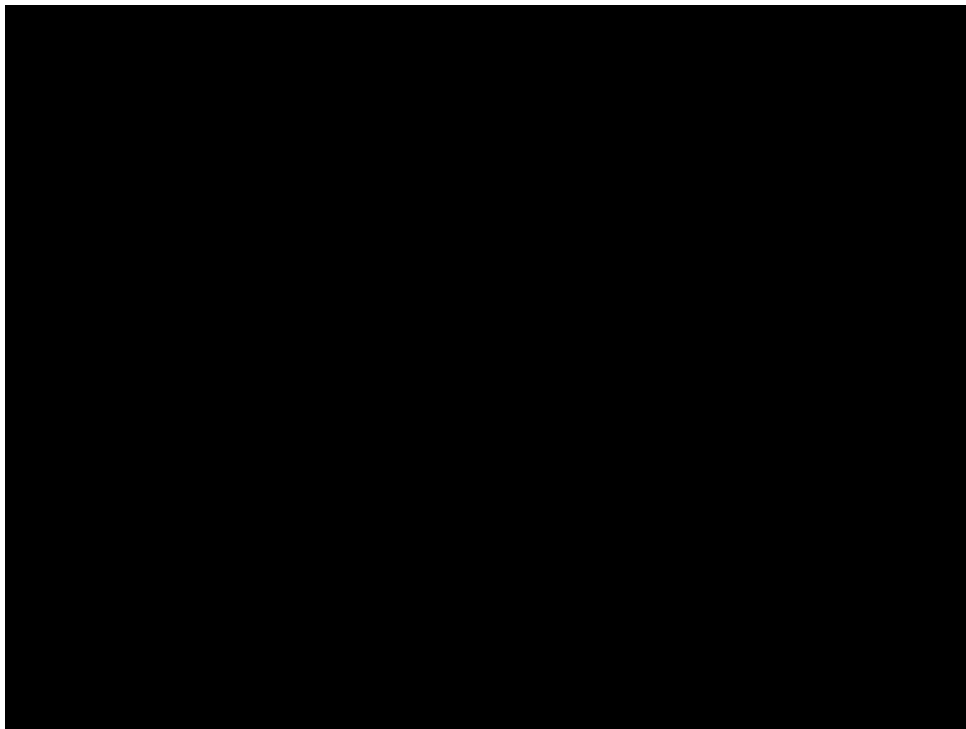


写真3 1月5日のクイズ大会の様子

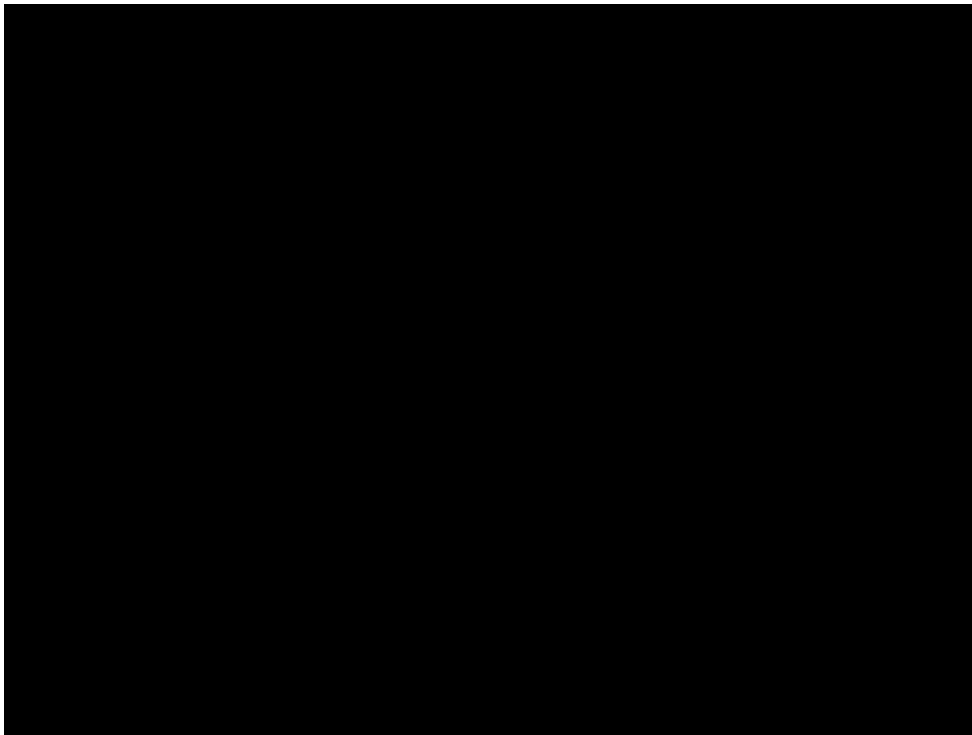
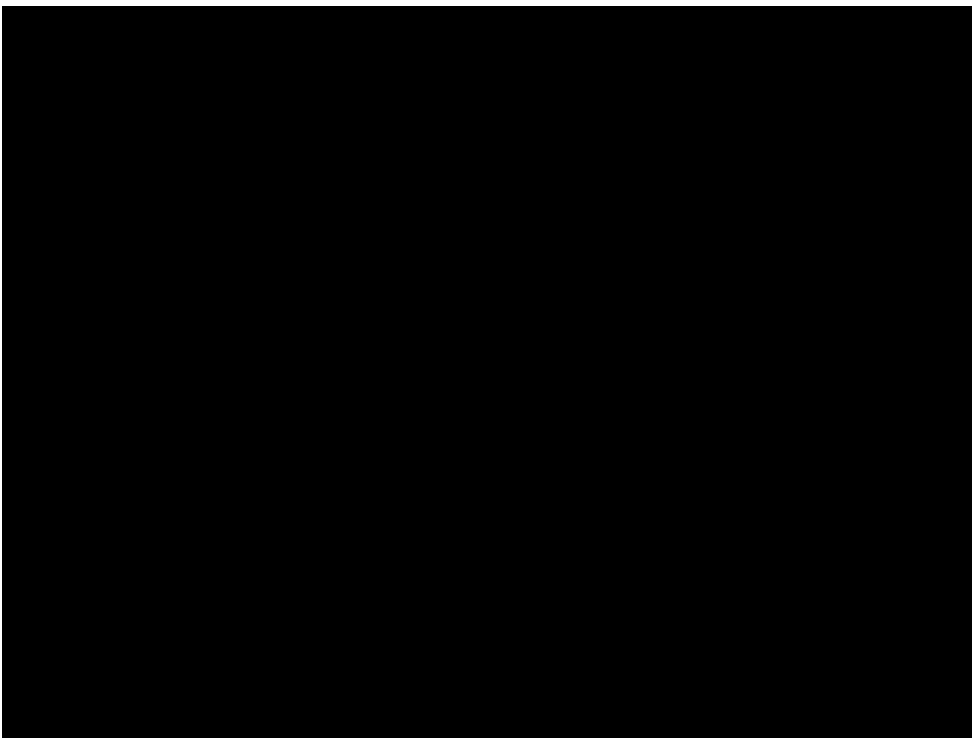


写真4 1月6日のクイズ大会の様子



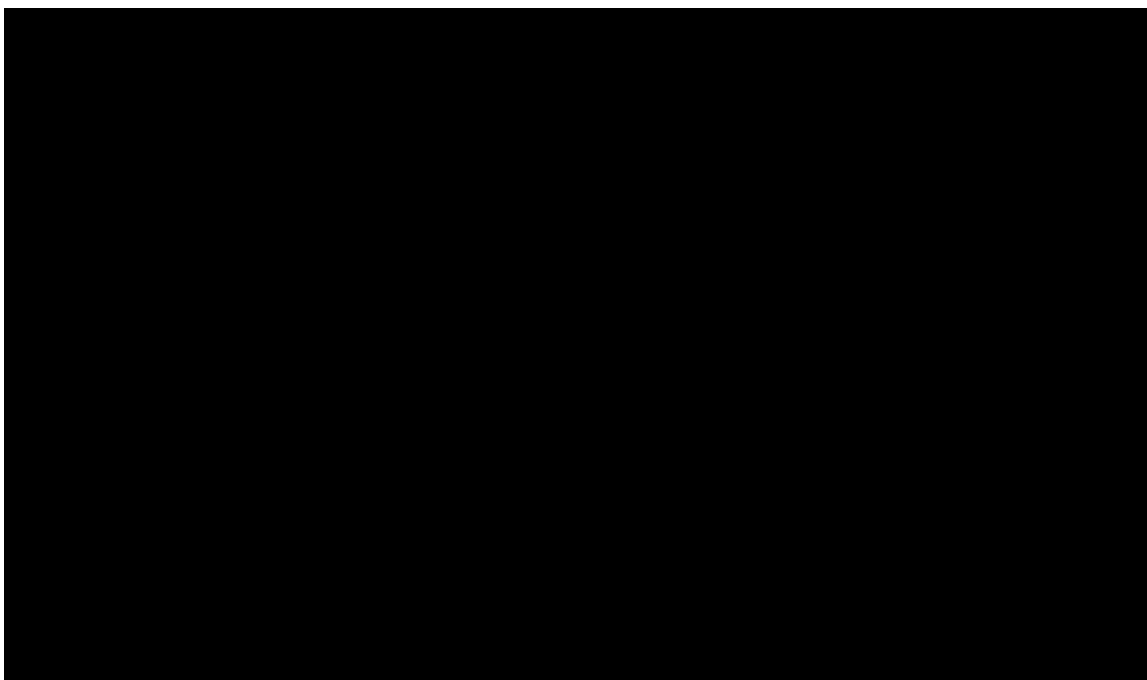


写真5 1月6日のクイズ大会の様子

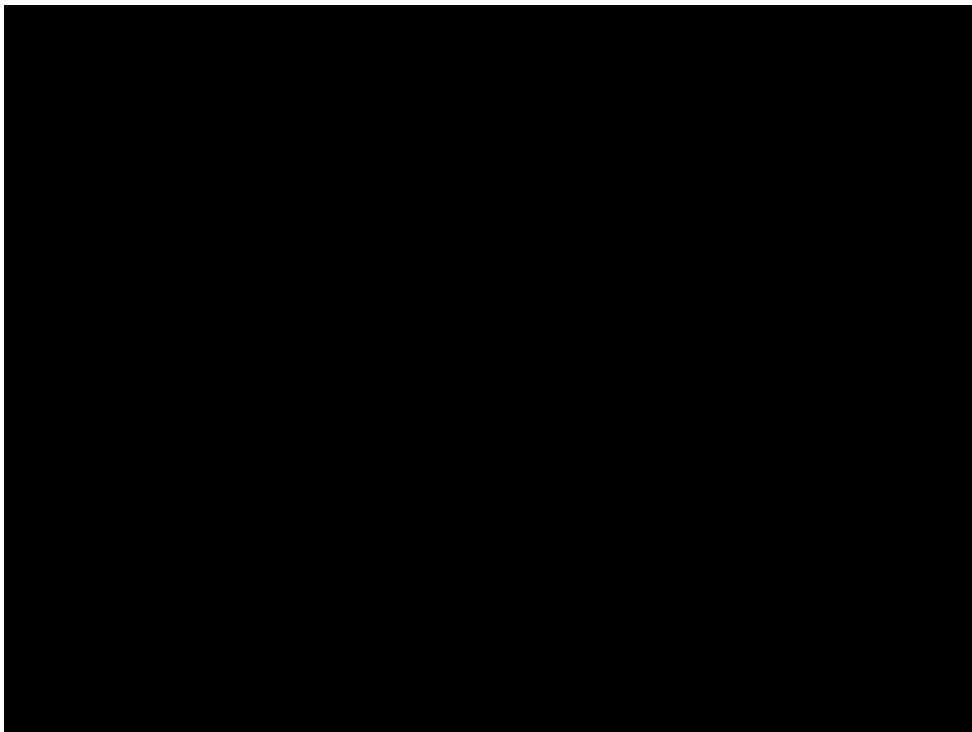


写真6 1月12日のクイズ大会の様子

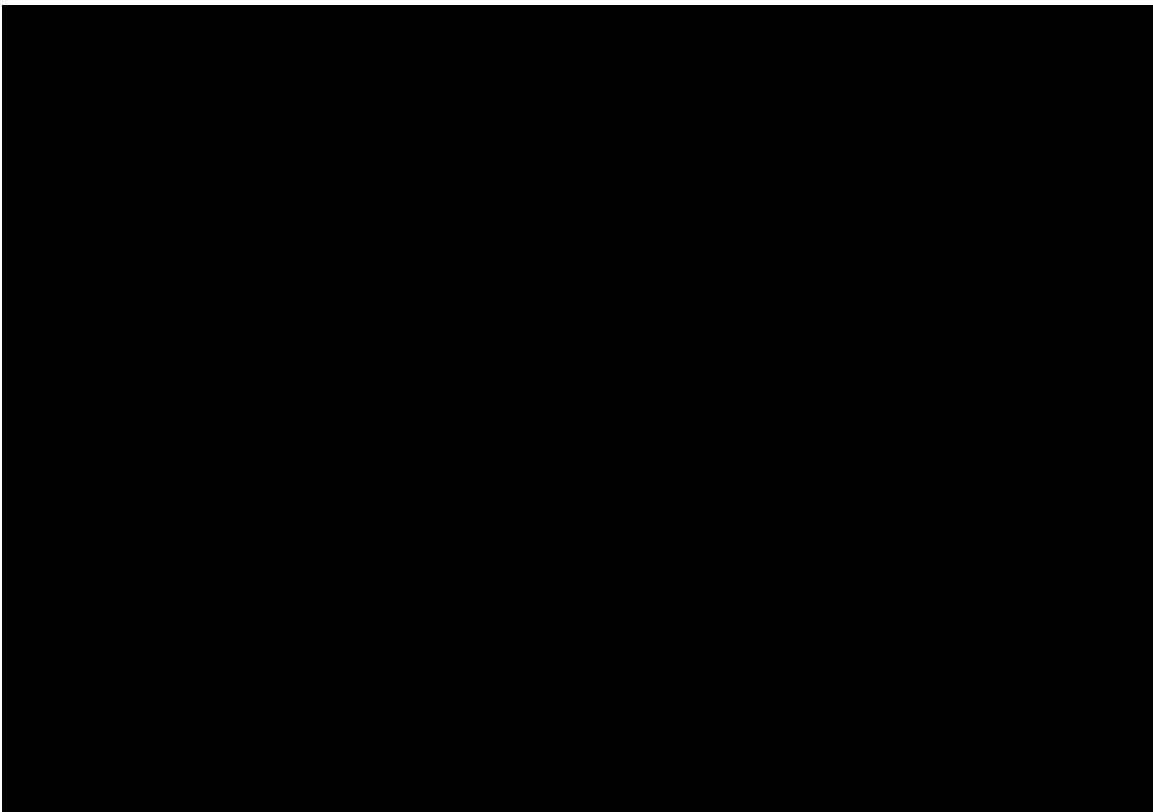


写真7 1月12日のクイズ大会の様子 ブラジル人中学生に漢字の問題の解説をする

a. クイズの正答率と考察

表2 「クイズ大会 クイズ」結果 2013年1月5日、1月6日、1月12日実施
(クイズの問題は APPENDIX3)

	日本	南米	中国
① 日本の読み方	11/12	9/9	4/4
② サッカー選手	2/12	0/3	3/4
③ 日の読み方	10/12	4/9	4/4
④ アイドルの漢字	10/12	8/9	4/4
⑤ 2016年ブラジル	9/12	3/8	4/4
⑥ ポルトガル語由来	0/12	0/3	0/4
⑦ 曜日の漢字	-	1/1	4/4
⑧ ブラジルに接する国	0/6	7/7	0/4
⑨ あきの漢字	-	0/1	4/4
⑩ きんの読み方	-	1/1	4/4

クイズ大会の考察

・②「サッカー選手」や⑤「2016年ブラジルでのオリンピック」は南米人より日本人のほうが正答率が高い。不正解はすべて南米の小学生、中学生、高校生であったが、南米の文

化を知らないで育っている可能性が高い。オリンピックやサッカーは、TV などメディアの情報が入りやすい日本人の方が興味を引きやすいと推測できる。

・④アイドルの名前の漢字はかなり難しい問題であったが、正答率が高い。特に中学生・高校生は「AKB48」等の日本のアイドルが好きで、よく話題にしていたのを聞いて、4番のような問題を出題した。関心のあるものをきっかけに漢字を覚えさせる方法は応用できないだろうか。

・③で出題された「日」など、日本語で頻繁に使う重要な漢字が読めない。

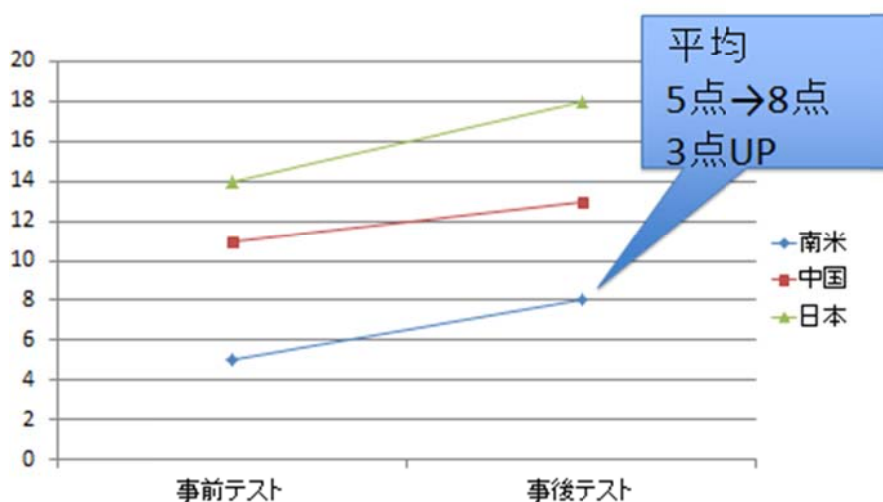
・「日本」(クイズに出題)は読めるのに「本日」(漢字テストに出題)が読めない。

・⑧ブラジルに接する国の正答率が、南米人 100%に対して、日本人は 0%である。日本人にとって距離的に遠くにある南米諸国はなかなか見分けがつかないようだ。

b. 漢字テストの結果と考察

漢字テスト(事前テスト事後テスト)は見た瞬間からやりたくないと言われ、参加者 22 名中、記述し、回収できたのは半分以下であった。サンプル数が少ないことが否めないが、クイズ前に比べてクイズ後は読める漢字が、2~3つ程度増えることが分かった。(図 9) クイズは楽しくやってくれるが、漢字テストに抵抗感を持っている人が多いことが分かった。

漢字テストの結果(平均)



22

図 9 漢字テストの結果

詳しい結果については APPENDIX2 にある。

c. アンケート結果と考察

全日程で 22 名分のアンケートを回収することができた。しかし、アンケート項目がやや多く、全てを回答しにくかったこと、当初は日本人の親にアンケートを記入してもらう予定だったので、小学生には少し難しいアンケート内容だったことなどが反省点である。アンケートの内容については APPENDIX4 にある。

なお、本研究においてアンケートは以下の 4 点において Validation（妥当性確認）の方法として適切ではないと考えた。したがって、アンケート結果は一定の傾向を見ることのできるが、その結果は参考までにとしたい。

1. 地域性が強いためにアンケート項目の設定が難しい
2. サンプル数が多く取れない。
3. 南米系外国人移住者は漢字交じりの日本語に対応できず、アンケートに答えづらい。
4. デリケートな問題を含むので、アンケートよりも面談、すなわちインタビューを通して情報を得ることが適切である。

アンケートで検証したかったことは以下の 5 点である。

- 1、他の交流会に比べて、「クイズ大会」は参加しやすかったか

⇒過去、交流会に参加したことがある人はいなかったなので検証できず。

- 2、日本語・漢字の勉強になったか

⇒アンケートに回答してくれた 6 人中 6 人が日本語や漢字を勉強するのに「とても役立った」と回答

- 3、次回も参加したいか

⇒全体で約 5 割が「次回も参加したい」、3 割が「時間があれば参加したい」、2 割は「わからない」、参加したくない人は皆無であった。

- 4、日本のこと、南米のことを理解できたか

⇒日本人の約 7 割が「南米に対する親しみが高まった・やや親しみが高まった」と回答。

外国人移住者は 6 人中 6 人が日本に対する親しみが「とても高まった」と回答した。

- 5、日常生活で南米人と接した時に気持ちの変化があるか

⇒「クイズ大会を通じて、外国につながる方々の日本語の能力がどれくらいであるかわかりましたか？」という質問に対して 10 人が「わかった・一緒に地域に暮らす中で困っている人がいれば助けようと思った」と回答。1「わかった・日本語に困るのは彼らの責任」、「わからなかった」がそれぞれ 1 名であった。約 8 割が日々の中での暮らして接する外国人が困っていた時、手を差し伸べたいと回答した。

なお、全体の約 8 割がクイズ大会の内容に満足度であった。

以上により、新たにデザインし交流会が以下の3つの点を満たすことがおおむね検証できた。（「3.4 交流会参加のインセンティブについて」を参照）

- ・日々の暮らしの中で、持続する交流を生み出せる
- ・気軽に参加することができる。
- ・日本語の能力が向上する

以下の二点については有識者レビューで意見を伺う。

- ・行政・住民・ボランティア・外国人が協力し合う（マネジメントの視点）
- ・次世代のボランティア（多文化社会コーディネーター）をうみだす

4.6 小規模社会実験（交流会実施）の考察

実施したクイズ大会は「南米について知らないことが多いと思った」（60歳以上・女性・日本人）「楽しかった」（小学校5年生・男性・ブラジル）「結構知らないこともあったので楽しかったです」（高校生・女性・ペルー）等、「楽しかった」、「日本語の勉強になった」、「南米のことを知れた」という声が聞かれ、「楽しい交流会」としてはおおむね成功した。しかし、当初は親子で参加してもらおうクイズ大会を企画したが、大人の参加が少なかったことや参加者が思うように集まらなかったことが反省点として挙げられる。あらゆる手段を利用して広告・宣伝を出したが、全く効果がなかった。クイズ大会の参加者はすべて当日の呼び込みで来てくれた人たちである。

交流会参加のためのインセンティブについては頭をひねって考えたつもりであった。しかしながら、交流会参加にあたり、南米系外国人移住者は以下の5点の制約を抱えていることが「地域ふれあいクイズ大会」実施を通してわかった。

①時間的制約

地域住民と南米系外国人移住者が、交流会に参加できる時間帯が違う。南米系外国人移住者は働くことに精いっぱい交流会に参加する精神的な余裕がない人が多い。また、夜勤や休日出勤などがある。

②言語的制約

日本育ちの子ども世代は会話ができるが、親世代は日本語ができないため、コミュニケーションが困難である。

③情動的制約

必要な情報にアクセスすることが非常に難しい。そのうえ、南米系外国人がどんな情報を知りたいのか行政側が把握していない。

④地理的制約

インフラが整っている鶴見国際交流ラウンジが、潮田地区から徒歩 20 分以上かかる。南米系外国人が住んでいるのは川を越えたこのエリアであり、小学校もこの地区にある。生活圏は潮田地区であるため、駅近くにあるラウンジには行かない。

⑤インセンティブのなさ

交流の必要性を地域の人も外国人移住者も感じていない。

⑥ 外部者への不信感

(これについては、有識者レビューで言及する。)

さらに「3.4 交流会参加のインセンティブについて」では、交流会の参加者がいつも同じであったり、肝心の外国人の参加がなかったりすることを既存の交流会の問題点として挙げたが、外国人コミュニティの多くの人には実態がなかなかつかめない「顔の見えない人」であることがわかった。人集めを行う際に国際交流ラウンジや NPO で活動を行っている「意識の高い人」と南米コミュニティのなかの「キーパーソン」に頼らざるをえない。(図 10) 鶴見区役所や鶴見国際交流ラウンジでさえ、「キーパーソン」以外の外国人住民(グレーで示した)の実態が把握できない状態にある。また、学校に来ている子どもについては実態をつかむことができるが、不就学の子どもたちを行政も学校も把握することができないため、手の施しようがない。ただ、不就学の子どもにアクセスできないだけで、かなりの数がいるということが現地調査を通してわかった。

「見えない壁が四方八方にある」と神奈川国際交流財団の F 氏は情報が伝わらない問題を指摘する。外国人に行きわたっている情報が圧倒的に少ない。横浜市役所の HP、鶴見区役所の HP は多言語対応になっているがツールバーに「Yokohama shi」と入力し、アクセスしてもらうことすらハードルが高い。一部の生活情報誌も多言語対応・易しい日本語で書かれているが、どれだけ読まれているか全く把握できない。交流会を開こうにしても情報が行き渡らないのが現状である。そして、「外国人移住者が何を望んでいるのか全く分からない。目に見えていない人たちの実態がつかめない」

しかし、本当に交流が必要なのはグレーの部分で示した外国人移住者にあまり関心がない日本人と日本人と積極的に関わりを持とうとしない外国人移住者であるのではないか。鶴見区の外国人集住地は、実態をつかむことができず、手の施しようがないフランスの郊外の移民問題を髣髴とさせる。

現在のところ、「顔の見えない」外国人を交流会に参加させることはできない。これが、交流会最大の課題であり、限界である。顔の見えない外国人移住者の実態をつかむためには移民法の抜本的な改革が求められる。

交流会の課題

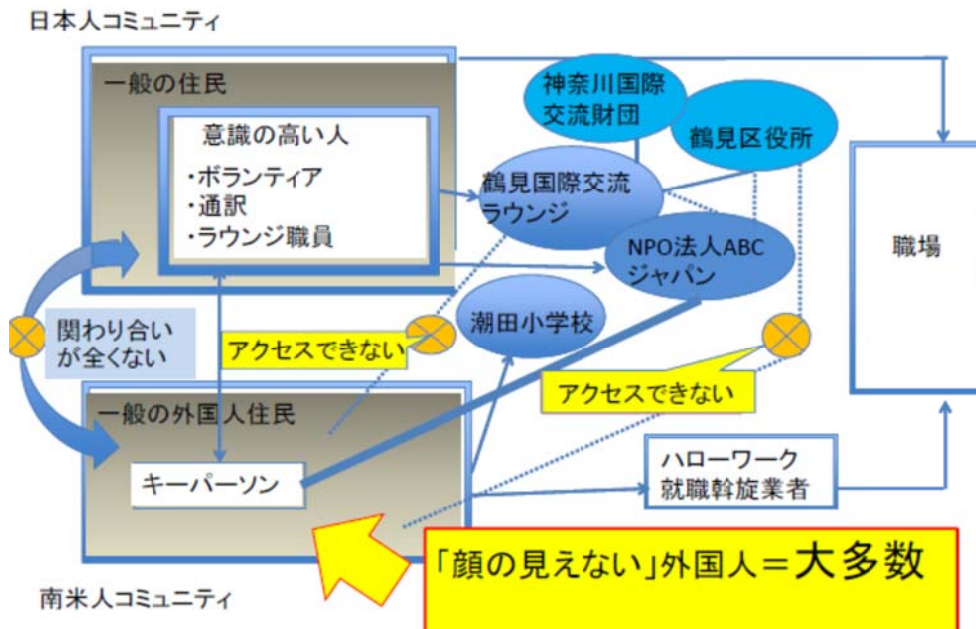


図10 「交流会の限界」

4.6 実施と分析評価フェーズ—妥当性評価（有識者レビュー）—

交流会「地域ふれあいクイズ大会」の有効性・妥当性とその限界について有識者3人に意見を伺った。

鶴見国際交流ラウンジ（以下、ラウンジと略す）佐藤義則館長は、横浜市役所で勤務されていた間、多文化共生推進に行政の立場として携わった方である。現在はラウンジで外国人移住者と最前線で接し、現場もよくご存知の方である。

慶應義塾大学法学部塩原良和教授は「多文化主義・多文化共生の理論的研究」「オーストラリアのアジア系移民コミュニティと移民定住支援施策の調査」を専門とし、鶴見区を中心に2009年より外国につながる子どもたちへの支援活動を行っている。

日本経済新聞社の藤巻秀樹氏は外国人集住地域に住み込み取材を行い移民たちの生の声を伝えたルポルタージュ『「移民列島」ニッポン 多文化共存社会を生きる』の著者である。

（１） 交流会開催に通じて、交流会の限界が理解できた。

=しかしながら、交流会は無意味ではない。必ず必要なものであり、Vモデルによる交流会実施を通じて、様々なことが明らかになった。

・移民法に根本的な原因があることがはっきりと示したことについて

→「同意見。日本は一貫して『外国人を受け入れないスタンス』を保ち、高度人材や労働力として必要な外国人を必要な時に応じて、入国させている。少子高齢化が進み、労働力が低下する最中であってもこの基本的スタンスは変わらない。外国からの移住者に対して法的には全く開かれていない。介護などの分野において圧倒的に人手が足りないにかかわらず、健気に介護の仕事をしようと来日した外国人に対して、資格取得（そのためには日本語能力が不可欠）のハードルが高いままである。」

・「これから優秀な移民を奪取する時代が訪れる。日本がその流れに取り残される」という意見について

→その傾向はすでに見られている。一部の南米系の人たちの間で「鶴見に残っているブラジル人はまともな人がいない」という声が聞かれる。状況は20年前と全く異なっている。“まともな”ブラジル人は経済発展が著しい母国に帰国したと言われている。母国に帰れない人は、母国に帰っても仕事がない人たちであり、優秀な人・お金がある人・技能がある人は南米に戻っている。

・交流会開催にあたって、外国人の日本語能力の低さが再認識された。

「2008年に横浜市が取った外国人に対する実態調査アンケートなどで、『日本語が一番困る』という結果が出ているなど、鶴見区でも言語問題が深刻であるということは既成の事実である。横浜市は500万円の予算を付けて、外国人の日本語支援を推奨した。しかしながら、実態はNPOやボランティアなど草の根が外国人に日本語を教えるという地道な活動にしか結びついていない。アメリカ・カナダであれば国が言語習得を外国人に対して義務付けているので、多額の予算を投じている。移民を認めていない日本では、アメリカやカナダ、ヨーロッパ諸国と異なり、移住する際に言語取得を義務付けていない。市レベルで500万円の予算が限界である。」クイズ大会や交流を通して、会話はできるけど読み書きができない事実について、日本人参加者はその状況を少し理解できたことは有益である。

・交流会の人集めにはネットワークが必要であることを痛感した。

「同意見。ラウンジも交流会の人集めには大変苦労している。日本人目線でいい企画をしたと思っていても全く人が来ないことがある。人を集めるには①すでにある外国人ネットワークを使用すること②本当にニーズのある企画をたてること③確実に情報を伝えること

(電話・ロコミが最も有効)が必要である。①関係を作るためには2、3年は必要である。特定の外国人問題を扱うNPOなどもネットワークを有しているが、そのつながりはかなり強力なのでラウンジとしても頼らざるを得ない。「外国人の取り合い」という意味ではライバルである。ネットワークが外国人を取り囲んでしまうという側面もあるので、NPOとラウンジが協力しきれない面もある。ラウンジは誰に対しても開かれているが、NPOなどは一度、馴染んでしまえば居心地のいい空間であるのだろうけれども、基本的に外部者に対して閉鎖的であり、入って1~2年では本当の情報をくれない。強力なネットワークを持っているだけに仲間になるには時間がかかるし、「研究のため」というと「自分たちを研究のために利用する人」と不信に思うふしがあり、全く情報が得られない。研究成果がどのように還元されるかを説明できないと協力するのが難しい。ただ、たった1~2年の研究では多文化共生を理解するのに限界がある。「地域ふれあいクイズ大会」で、人が集まらないのもネットワークと協力関係にないため、人が集まらないのは当然である。ただ、ネットワークをどう利用するか、交流会に人をどう集めるかはラウンジとしても課題である。②成功した交流会(イベント)の例として、100人程度の参加者が集まった「防災訓練」があげられる。防災に対するニーズがあったから人が集まった。これは日ごろから、消防署、行政(区役所)、ラウンジ、外国人ネットワークが協力し合い(利害が一致し)、また日ごろから良好な関係を築き、外国人に対する防災訓練の意義を理解してもらえた実現できた。③インターネットやメールなどバーチャルを介した情報伝達は、特に南米系の方々に対して有効ではないことが経験からわかっている。(ただし、ネットに強い中国系にはインターネットの情報は届きやすい)それはおそらくネットの情報を信用しないことやインターネットを駆使し、情報をあつめるという習慣があまり南米系の人たちに見られない。防災訓練の際には、鶴見区在住の外国人の連絡先を所持しているラウンジのスタッフが、1県1県その言葉の言語(七カ国語に対応するスタッフがいる)で電話をかけてお知らせをした。“電話”で“母語”では、かなり有効であった。あとは、ネット上のつながりやメールではなく、ロコミの力が大きい。

交流会は、上から目線で「困っている外国人に手を差し伸べたい」日本人だけで計画しても、人が集まらない。123が必ず必要。素のためには外国人の中でも「キーパーソン」となる人の協力が不可欠であり、一過性の交流ではなく、継続的に進めていかなければならない。そのキーパーソンと協力するためには年月が必要。

(ただし、キーパーソンと呼ばれる人は、非常に流動的であり、自分の生活に支障が出ると判断したり、別にやりたいことが出たりするとその役割から離れてしまう。)

・ネットワークなどを使ってもどうしても実態が見えない外国人が多く存在し、当初はその人たちも呼び込み交流させることを目指したが、それはできなかった。

「埋もれている人については、諦めるしかないのではないかと思う。実は実態の見えない人たちはかなりの数いる。しかしながら、よく考えれば、日本人も「孤独死」が問題にな

っているように、つながりの希薄は社会全体の問題であり、必ずしも外国人だけの問題ではないかと思う。」

(2) デザインした交流会のデザインについてのコメント

「問題4のようなアイドルの名前で漢字を覚えさせるというのは有効であると思う。日本の歌などに関心がある若者は多く、来日以前から歌詞をインターネットなど通じて覚えている。好きなことには、関心が持てる。」

「クイズ大会の対象を“南米系”としているが、国が違えば、南米同士でも交流しない。南米系と一括りにできない。ブラジル、ペルー、ボリビアそれぞれで教育に関する考え方やコミュニティの在り方が全く違うということを理解しなければならない。例えばブラジル系は「いつか帰国したい」と思っている人が多数。ペルーの人が企画した交流会にはペルーの人しか来ない。2012年度にラウンジと共同で企画した外国人の国際交流会はペルーの人が企画したので、ほぼ100%の参加者がペルーにルーツを持つ人であった。ただ、各コミュニティの「キーパーソン」が呼び掛けると50人程度の人が集まる。」

「家族を1単位にして、全世代を巻き込むような交流会が必要。例えば大人に対しては料理教室や防災訓練、子どもに対しては学習支援など。家族全体を支援できれば、鶴見の多文化共もよい方向に向かうのではないか」

したがって、クイズ大会の対象を大人と子どものグループにしたのはよい。

2013年1月23日 慶應義塾大学法学部 塩原良和教授

(1) 交流会開催に通じて、交流会の意義と課題および限界が明らかになった。しかしながら、目に見える成果がすぐに現れるかどうかで、地域における実践を評価することは近視眼に過ぎる。

・移民法に根本的な原因があることがはっきりと示したことについて

「現行の法制度に問題があることは確かである。ただし、現場で何年も地道に活動している人であれば、自分の活動の限界もよく分かっているもの。外部から突然やってきて、わずか半年間ほど活動した研究者が『現場の活動だけでは限界がある』と指摘しても、学問的にも、社会的にも、あまり意義はない。現場での実践と法制度の改革をどのように結びつけるか、その道筋を示すことが重要であろう。」

・交流会の人集めにはネットワークが必要であることを痛感した。

有名人の講演といった商業的要素があるものは別として、地域での活動の参加者を増やすためには、ただ情報を流せばよいというわけではない。また人数を増やすだけでなく「あの団体がやっているのなら、何か役に立つだろう」「あの人が知らせてくれたのだから、安心できる」といった、地域における顔の見える信頼関係を通じて参加者を増やすことで人的ネットワークを構築していくことも重要である。そのためには、ある程度の時間が必要である。鶴見区の外国人集住地域には大学生・大学院生・研究者が大勢押し寄せる。そういう人たちが『研究のために自分たちを利用し、すぐに去ってしまう人』と思われ、不信感を抱かれることもある。地域のメンバーとして認められるか、地域の「アクター」になりえるかが、活動の成功のカギである」

(2) デザインした交流会のデザインについてのコメント

「やれる範囲内で、最大限のことはやって、がんばったのではないか。修士論文の研究としてはある程度の成果が見られた。ただデザインしたクイズ大会は、地域における実践としては毎年継続して行って、根をはってやらなければいけないものだと思う。修士論文のためなのでそこまでできないのは承知しているが。」

「多文化共生といったテーマにおいて、成果とか成功を定量的に計測することは困難である。漢字テストの結果とかクイズの正答率では不十分である。例え漢字テストの点数がクイズ前後で上がらなかったとしても、失敗ともいいきれない。」

「地域の人と信頼関係を築けたか、その人たちの立場になれていたかは省みる必要はあると思う。」

「山本さん（筆者）は自分が取り組んだことに意味がないのではないかと思ってしまうように感じるが、それは自分がやっていることを地域の人が評価していないと感じてしまっているからだろう。だが、その地域とのつながりが無い人が、半年で、住民に良い影響を及ぼすような活動を企画して実施することは難しい。もう少し長い時間をかけて周りとの信頼関係を築く必要がある。信頼関係ができれば周りも少しずつ耳を傾けて、協力してくれるようになるだろう。協力者がいれば山本さん自身の自己評価も変わってくるはずである。」

「地域における社会的課題の改善のためには、「遊び」や「無駄」が必要。非効率・非合理的な営みに、より良い実践のヒントが隠されていたりする。特に人間関係を築くためには無駄が必要。時間をかけてやらないといけない。」

「システムデザインの手法でこの問題に取り組んだことに一定の成果はあると思う。ただ、交流会の企画や様々な取り組みの成果は計量的に想定できない。成功か否かともいえないが、交流会をやらないことには何も始まらない。こういう活動は必要である。」

2013年1月30日 日本経済新聞社勤務、『移民列島ニッポン』の著者 藤巻秀樹氏

(1) 交流会開催に通じて、交流会には限界があることが分かった。日本の移民問題においては移民法に根本的な原因があることが分かり、論文の中でそれを示した。確かにNPOやボランティア任せにしているところがあり、うまく機能していない面もあるがそれでも民間レベルの交流は不可欠であると思う。

日本政府は必要に迫られると運用方法を変えながら対応していくことが多い。それが日本の知恵なのかもしれない。移民はいるけれども、移民を認めていないことは、自衛隊はあるけれども軍隊はないとしていることに似ている。日系ブラジル人も日系だから大丈夫という理由で受け入れたり、アジアなどからの移民も研修生として3年間限定で受け入れたりしているが、実体は移民である。彼らを安価な労働力として国や企業が受け入れてしまい、定住化が進んでいる以上、もはや後戻りはできない。ニーズがあるから政府は裏口から受け入れている。「安い労働力」として受け入れているのは、フランスもドイツもどこの国も一緒であるが、日本は移民政策のビジョンがない。移民を受け入れた国と企業の責任がある。何も対策を取らないのはおかしい。

政府の移民政策の欠陥を責めることは簡単である。しかし、結局は日本人一人一人の意識を変えていかなければならない。現代の日本社会は均一社会であり、異質なものの、異文化を受け入れたくない。それは居心地がいいものかもしれないが、このままではダメになる。日本人の多くが「移民」という言葉に抵抗感があるから、結局、政府も移民を受け入れに対する政策を取れない。日本人は移民というと犯罪や治安が悪くなることに結びつける。しかし、これからの日本社会は異文化を柔軟に受け入れ、刺激を受けながら成長・発展していかなければならない。そのため非常に個人レベルの交流が非常に重要である。

・「これから優秀な移民を奪取する時代が訪れる。日本がその流れに取り残される」という意見について

日本は高度人材外国人の受け入れは積極的である。しかし、依然、企業は外国人受け入れに消極的であり、積極的に外国人と関わろうとしない日本を魅力的と思うだろうか。日本にすでにいる移民を育てるという感覚も大事である。日本語ができず、教育もほとんど受けていない日系ブラジルの子弟をどうにかしなければいけないと思う。

・南米系外国人移住者子弟の教育について

親の意識に左右される。子どもの教育に関しては親の意識が低い場合が多い。あとは本人のやる気や将来のビジョンを持っているか。

2012年、外国人登録制度を廃止し、住民基本台帳法の適応対応に外国人住民が加わった。そのため今まで把握できていなかった不就学の児童を把握できるようになり、さまざまな政策が取られるようになるだろう。枠組みはできたが、はじまったばかりである。実体はまだまだボランティアやNPO任せのところが多い。また、逆に住民基本台帳法に漏れる不法滞在者が教育や福祉サービスを全く受けることができなくなり、それは倫理的にどうかと言う問題点もある。

・交流会開催にあたって、外国人の日本語能力の低さが露呈した。

完全に閉じられたコミュニティで育つと日本語が全くできなくても問題がない。そのため日本語ができない人が多い。子どものダブル・リミテッドの問題も深刻であり、NPOなどがかなり真剣に取り組んでいる。浜松市など外国人集住地はかなり手厚い支援を行っている。

日本社会では完璧な日本語を使えることにこだわりすぎていて、外国人に求める日本語力も異常に高い。看護福祉士の試験も日本語が難しすぎて外国人がパスできない。本当に大切なことはコミュニケーションを取れるかどうかである。日本人は国際的に通じる語学力がないというのも文法的な正しさに拘泥しすぎているからである。外国語を勉強するうえで恥をかくことへの恐れを無くさなければ日本人の語学力・コミュニケーション力はあがらない。そして、外国人が日本語を完璧に話せないことについても許容しなければならない。

・ネットワークなどを使ってもどうしても実態が見えない外国人が多く存在し、当初はその人たちも呼び込み交流させることを目指したが、それはできなかった。

流動性が高い外国人移住者と親しい付き合いをすることは確かに難しい。でも、一部の人との交流でも価値はあると思う。確かに既存の交流はコミュニティのキーパーソンが参加しているだけで、なかなか浸透していない。点と点との交流であり、これを少しずつ面と面にしなければならない。本研究は地域の様々な人、ブラジル人や日本人に限らず呼び込みクイズ大会を行ったことに価値があり、それはメント面との交流の第一歩である。

皮肉なことにリーマンショックが起きたことで四六時中働いていた日系ブラジル人に生活を省みる余裕ができた。景気がいい時は近所と全く付き合う様子はなかったが、仕事が減ってはじめて地域との付き合いができた。

「ブラジル人と共生は無理だ」と言う人もいる。でも、地道な交流を続けていかなければいけないと思う。それは日本人にとっても南米系外国人移住者にとってもいいことである。(ブラジル人が多く住む)愛知県豊田市保見団地に住み込み取材を行ったとき「保見団地は怖いところですよ」と言われた。しかし、外国人＝怖いというイメージだけが先行していて、実体はそうではないことが多い。それは、実際にブラジル人に接してみないとわ

からないことである。

・ドイツやイギリスの多文化主義やフランスの一元化主義が失敗とされる中で日本は移民問題にどう立ち向かえばいいか

日本が生き残る道は「多文化共生」しかないと思う。多文化主義は交流を考えない。一元化主義は自国の文化を押し付ける。その二つが上手くいっていないので、新たな道を探る必要がある。ドイツもフランスも低賃金で労働力を入れているという意味で日本と変わらないが、移民を受け入れるシステムはしっかりしている。日本もニーズがあるから外国人がやってくるのだから、裏口ではなく、正面からどうどうと移民を受け入れなければいけない。そうしたうえで、相手の文化を認める多文化共生が実現する。日本は歴史的に見ても他国のいいところを巧みに取り入れた国である。日本の発展のためには多文化共生は必須である。

日本人全般に言える、外国人に対してウェルカムではないこと、また、「知らない」こと、無関心でいることは非常によくない。それは国民一人一人が課題に向き合い知らなければいけない。

(2) デザインした交流会についてのコメント

・このような民間レベルの交流は不可欠である。参加者は限定的でも一歩ずつ進めるという意味で、交流会を実施したことは大きな一歩である。一過性で終わってはだめなのでこの活動を進めて、継続していかなければいけない。

外国人支援ではない。支援とは上から線であり、日本人も外国人から学ばなければいけない。ブラジル人がブラジル文化に誇りを持てるよう、ブラジル人がブラジルの文化を紹介する交流会にするとさらにいいと思う。2016年はW杯がブラジルで行われるので、ブラジルにつながる子どもたちも、日本人もブラジルに関心を持つきっかけになるのではないかと思う。

外交など国単位でやるべきこともあるが、やはり民間レベルでお互いの文化に関心を持つことや交流し、共存していくことは非常に大事であるし、多文化共生の第一歩である。

以上の三人の有識者に意見を伺った結果、システムデザインの手法を用いた交流会が、多文化共生を進めるための第一歩となるという評価をいただいた。

また、藤巻氏の「面と面との交流になりえる」という意見や塩原氏の「システムデザインの手法を用いて交流会を行ったことは評価できる」という意見から、以下の2点を将来的には達成できると考えられる。

- ・行政・住民・ボランティア・外国人が協力し合う（マネジメントの視点）
- ・次世代のボランティア（多文化社会コーディネーター）をうみだす

()

●こうりゅうかい（ブラジル人と日本人のこうりゅうかい）にさんかするもくてきは、なにですか？

1. にほんごのじょうたつ 2. あいてのぶんかをしる 3. ブラジルのぶんかをあいてにしってもらう

4. たべものやおみやげ 5. ちいきのなかでしらないひととともだちになる

6. そのほか

()

ブラジル人と日本人がともにたすけあつてくらすためにひつようだとおもうことについておききします

●いままでに、こまったことはなんですか

●つるみくやがっこう、ちいきの人にあなたがもとめていることはなんですか

●そのほか、じゅうにかいてください。

2013 ねん 1 がつ 6 にち じから潮田地区センターで「こうりゅうかい (クイズもあり)」
をひらきます

Obrigada !

わたしはつぎのページにあるような、日本じんおやことにつけいブラジル人おやこのため
のこうりゅう会をおこないたいとかがえています。

このこうりゅう会についてどうおもいますか？

●このこうりゅう会にさんかしたいとおもいますか？ りゅうもおねがいます。

1、はい

2、じかんがあればさんかしたい

3、いいえ

りゅう

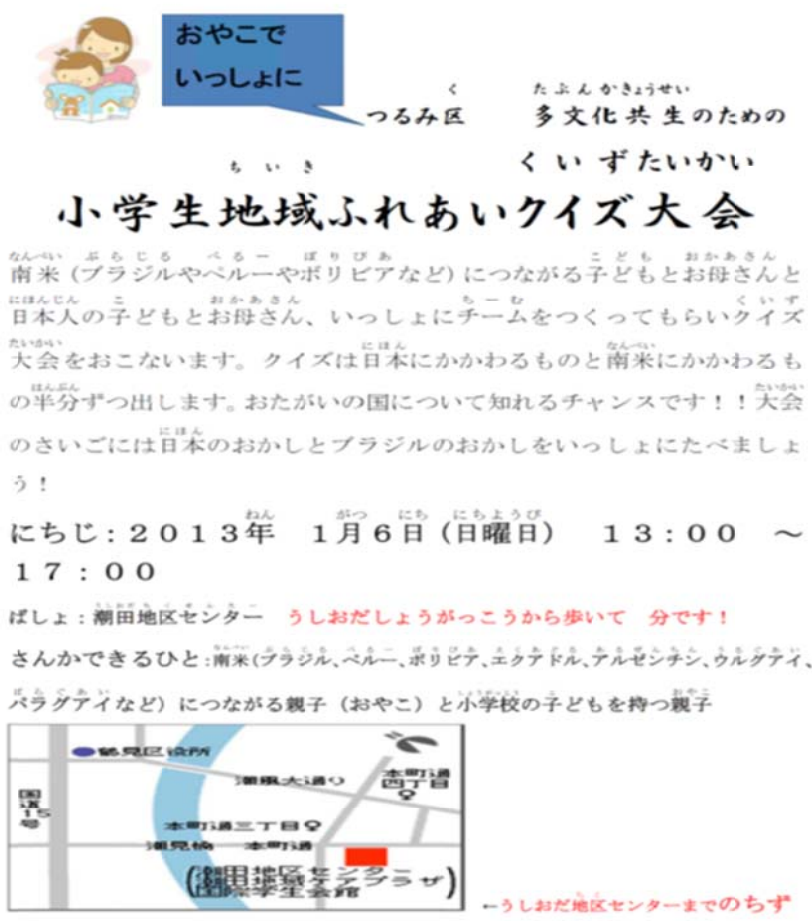
(

)

●よみにくい、りかいしにくいぶんしょうがあったらおしえてください

●こうりゅう会をおこなうじかんはいつがいいですか？

1、ごぜん（9：00～11：00ごろ）2、ごご（12：00～15：00）3、ゆう
がた（16：00～18：00）4、そのほか



おやこで
いっしょに

く たぶんかきょうせい
つるみ区 多文化共生のための

ちいさ くイズたいかい

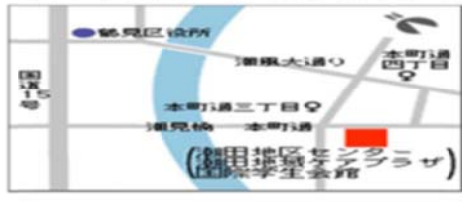
小学生地域ふれあいクイズ大会

なんめい ぶらじる ぺるー ぼりぴあ こども おかあさん
南米（ブラジルやペルーやボリビアなど）につながる子どもとお母さんと
にほんじん こ おかあさん ちーむ くいず
日本人の子どもとお母さん、いっしょにチームをつくってもらいクイズ
たいかい
大会をおこないます。クイズは日本にかかわるものと南米にかかわるも
の半分ずつ出します。おたがいの国について知れるチャンスです！！大会
のさいごには日本のおかしとブラジルのおかしをいっしょにたべましょ
う！

にちじ：2013年 1月6日（日曜日） 13：00 ～
17：00

ばしょ：潮田地区センター うしおだしょうがっこうから歩いて 分です！

さんかできるひと：南米（ブラジル、ペルー、ボリビア、エクアドル、アルゼンチン、ウルグアイ、
パラグアイなど）につながる親子（おやこ）と小学校の子どもを持つ親子



→うしおだ地区センターまでのちず

これでおわりです。ごきょうりよくありがとうございました。

Obrigada！

「プロトタイプに関するアンケート」結果（2012年12月22日実施）

30代～40代の小学生程度の子どもの持つ日系ブラジル人の母親5人へアンケート

年齢

30歳から39歳	1
40歳から49歳	3
無記名	1

性別

女性5名

鶴見国際交流ラウンジを知っているか

はい	5
いいえ	0

ラウンジの交流会参加有無と回数

はい・3回以上	3
はい・2回	1
無回答	1

参加しない理由

全員無回答

それはどんなイベントだったか よかったこと・よくなかったこと

- ・「zairyucard. 言. Capoeira ivent」
- ・「きょうしつ of the べんきょう」
- ・「zairyucard, capoeira, teatro mary, palestra, pl Brasileiro Querem Retornar」

交流会に参加する目的（複数回答）

地域の中で知らない人と友達になる	2
日本語の上達	2
相手の文化を知る	2
無回答	1

- ・「Pra estar reqto de brasileieos pl nai esquecer a cultura brasil」

今までに困った事

- ・「日本語をしゃべらなかつた時にたいへんでした。」
- ・地域の行事などに参加すること（町内会）
- ・かんじ、estation, bus, hospital, prefeituras
- ・おはなしとかんじ
- ・学校、びょういん

区や地域の人に求めている事

- ・今のところないですが culture
- ・地域とのつながり
- ・もっとポルトガル語で駅のかんばんあれば良い
- ・もっとボランティアをふやしたら

地域ふれあいクイズ大会についてどう思うか

- ・おもしろいと思います
- ・いいと思います
- ・とても良い事です
- ・good!!

この交流会に参加したいと思うか

はい	1
時間があつたら参加したい	4
いいえ	0

理由：日本語を覚えたい

理解しにくい文章

- ・「ポルトガル語、スペイン語のパンフレットがあればいいと思います」
- ・ぜんぶむずかしい
- ・No problem

交流会を行う時間

午前	1
午後	1
そのほか	土日 4人

APPENDIX 2

「漢字テスト」2013年1月5日、1月6日、1月12日実施

漢字テスト

(クイズ前・クイズ後)

(なまえ)

1、つぎのかんじのよみかたをかいてください。

- ① 本日 ()
- ② 歩き ()
- ③ 元日 ()
- ④ 金物 ()
- ⑤ 翌日 ()
- ⑥ 一日 ()
- ⑦ 桃 ()
- ⑧ 飽きる ()
- ⑨ 梨 ()
- ⑩ 金平糖 ()
- ⑪ 選手 ()
- ⑫ 水道橋 ()
- ⑬ 予定(よてい)に空きがある ()
- ⑭ 聖火 ()
- ⑮ 金額 ()
- ⑯ 森林 ()
- ⑰ 預金 ()
- ⑱ 税金 ()
- ⑲ 月末 ()
- ⑳ 秋 ()

「漢字テスト」結果 2013年1月5日、1月6日、1月12日実施

漢字テスト 20点満点

外国人（南米系：ブラジル人・ペルー4名、中国人4名）（中学生6名、大人2名）

Aさん 7点→11点（中国・中学生）

Bさん 2点→5点（ブラジル・大人）

Cさん 16点→19点（中国・中学生）

Dさん 7点→10点（中国・中学生）

Eさん 11点→14点（中国・中学生）

Fさん 7点→11点（ブラジル・中学生）

Gさん 3点→5点（ブラジル・大人）

Hさん 6点→9点（ペルー・中学生）

参照データ

日本人（小学生3人）

Aさん 11点→14点

Bさん 12点→14点

Cさん 13点→15点

平均点

ブラジル系平均：4.5 →7.5（平均3点UP）

（参照）日本人平均：12→14.33（約2点UP）

（参照）中国系平均：10.33→13.5（約2点UP）

全体正答率 0%の漢字：「金物」（きんもの、きんぶつ）、「森林」、「元日」（げんじつ）、金平糖（きんべいとう）

ブラジル人正解率 0%の漢字： 本日（にほん：2人とも）、桃（まつ）、飽きる、梨、選手（あくしゅ）、金額、預金、税金、

APPENDIX 3

「クイズ大会 クイズ」2013年1月5日、1月6日、1月12日実施

これからクイズたいかいはじめます！！！！

きょうは、にほんのおともだちだけではなく、
がいこくににつながるおともだちもきています

みんなはじぶんのくにのだいひょうです！

じこしょうかいしよう！

これから、にほんがいこくににつながる
こどもたち、にほんのこどもたちをあ
わせたチームをつくります。

チームのみんなに
なまえどがくねん、
うまれたところを
おしえてあげてね。



当初は混合チームを作る予定で合ったが、当日の流れで、各自、クイズに答えてもらうことになった。

ルールせつめい

① かならず、てをあげてあてられてからこたえてね。

②



このマークはにほんのもんだいです。
にほんだいいひょうがこたえたら1てん
ぶらじろだいいひょうがこたえたら3てん




このマークはなんべいのもんだいです。
なんべいだいいひょうがこたえたら1てん
にほんだいいひょうがこたえたら3てん

③ チームのなかまにヒントをいうのはOK
でも、こたえはぜったいにいっちゃだめだよ！

当初は細かいルールを作ったが、優勝を競わずに楽しむことが重要だと思い、このルールはなしにした。




東京2020オリンピック競技大会
TOKYO 2020
東京オリンピック・パラリンピック競技大会


<p>Question</p> <p>もんだい No.1</p>	<p>日本</p>  <p>はどう読みますか？</p>
<p>Answer</p> <p>せいかい</p>	<p>① にほん</p> <p>② にっぽん</p> <p>③ にっぽん・にほん</p> <p>④ じっぽん</p>

<p>Question</p> <p>もんだい No.2</p>	<p>南米(なんべい)うまれの サッカー選手(せんしゅ)ではないのは？</p>  
<p>Answer</p> <p>せいかい</p>	<p>① ペレ</p> <p>② クリスティアーノ・ロナウド</p> <p>③ 田中マルクス闘莉王</p> <p>④ リオネル・メッシ</p>

<p>Question</p> <p>もんだい No.3</p>	<p>本日 元日 翌日 一日</p> <p>「日」のよみかたがちがうのは？</p>	
<p>Answer</p> <p>せいかい</p>	<p>① 本日</p> <p>② 元日</p> <p>③ 翌日</p> <p>④ 一日</p>	

<p>Question</p> <p>もんだい No.4</p>	<p>くだものの かんじが なまえに はいていない アイドルは？</p>	 <p>TOMOMI ITANO ふいに</p>	
<p>Answer</p> <p>せいかい</p>	<p>① 嗣永桃子</p> <p>② 菅谷梨沙子</p> <p>③ 小嶋陽菜</p> <p>④ 有安杏果</p>		

<p>Question</p> <p>もんだい No.5</p>	<p>2016年 </p> <p>ブラジルでなにがある？</p>
<p>Answer</p> <p>せいかい</p>	<p>① サッカーワールドC</p> <p>② オリンピック</p> <p>③ ワールドベースボールC</p> <p>④ G-30</p>

<p>Question</p> <p>もんだい No.6</p>	<p>ポルトガル語 (ご) </p> <p>からきていることは ではないのは つぎのうちどれか</p>
<p>Answer</p> <p>せいかい</p>	<p>① カフェ</p> <p>② カステラ</p> <p>③ 金平糖(こんぺいとう)</p> <p>④ 天ぷら(てんぷら)</p>

<p>Question</p> <p>もんだい No.7</p>	<p>げっ曜日 (ようび)、 か曜日 (ようび)、 すい曜日 (ようび)、 もく曜日 (ようび) つぎのうち、「げっ」、「か」、 「すい」、「もく」のかんじを 1つもふくんでいないことばはどれ?</p>
<p>Answer</p> <p>せいかい</p>	<p>①水道橋 ②聖火 ③月末 ④森林</p>

<p>Question</p> <p>もんだい No.9</p>	<p>よみかたがち がうのは?</p>
<p>Answer</p> <p>せいかい</p>	<p>①秋 ②飽き ③歩き ④空き</p>

1 チラシを見た 2 面白そうだった 3 人に誘われた 3 ご飯や商品がもらえるから
4 南米の文化に興味を持っていた 5 出会いがあると思ったから 6 その他 ()

●このクイズ大会に対する満足度をおしえてください。

1 とても満足 2 満足 3 やや満足 4 ふつう 5 やや不満 6 不満

●その理由としてあてはまるものにまるをつけてください。

1 南米に対する知識や理解が増した 2 外国につながる人たちと交流できて楽しかった
3 外国につながる人たちがどれくらい日本に対する知識があるかを知れてよかった。 4
クイズの内容が面白かった 5 時間を取られて不満だった 6 その他
()

●今回のクイズ大会での気づきについて自由に記述してください。特にクイズ大会前後で
気持ちの変化がありましたら教えて下さい。

●近くに外国人は住んでいますか？

1、多く住んでいる 2、多少住んでいる 3、住んでいない 4、わからない

●外国人との付き合いはありますか？理由も教えてください。

1、親しく付き合っている 2 あいさつ程度のつきあい 3 ほとんどない 4 まったくな
い

(理由)

●日本に住む外国人が日本で暮らすために求めることはありますか？(あてはまるものに
丸を付けて下さい)

1、日本語を覚えてほしい 2、ルール(ゴミ出しなど)を守ってほしい 3、騒音を出
さないでほしい 4、特になし 5、その他 ()

●クイズ大会以前に、南米系の外国人に親しみをもっていましたか？

1 はい 2 いいえ

●クイズ大会を通して、外国人(とくに南米の方)に親しみを感じましたか？

1、とても親しみが高まった 2、親しみが高まった 3 やや親しみが高まった
4、かわらない(もともと持っていたし、今も持っている) 5、かわらない(もともと持
っていないし、今も持っていない) 6、親しみを感じなかった

●クイズ大会を通じて、外国につながるの方々の日本語の能力がどれくらいであるかわかりましたか？

- 1、わかった・いっしょの地域でくらすなかで、彼らが日本語でこまっていることがあればたすけようとおもった
- 2、わかった・日本語でこまるのは、彼らの責任であると思う
- 3、わからなかった
- 4、そのた

●またクイズ大会にきたいと思いましたが？

- 1、はい
- 2、じかんがあえばきたい
- 3、わからない
- 4、いいえ（なぜですか？）

●どのような交流会であれば参加したいですか？

- 1 日本文化を知ってもらえる
- 2 相手の文化を知ることができる
- 3 言語の上達につながる
- 4 多文化共生について勉強できる
- 5 食べ物や商品がある
- 6 友達や知り合いがくる
- 7 知らない人と友達になれる
- 8 その他

●こんかいのクイズ大会でよかったこともしくは改善点はありましたか？

●その他、感想などを自由に記述してください。

ありがとうございました！！！！

「アンケート」2013年1月 日実施

(外国につながる方へ)

あてはまるすうじにまるをつけてください。

●ねんれいをおしえてください

- 1、20歳未満
 - 2、20代
 - 3、30代
 - 4、40代
 - 5、50代
 - 6、60歳以上
- (しょうがくせい・ちゅうがくせい・こうこうせい・そのた)

●性べつ

- 1 女性(じょせい)
- 2 男性(だんせい)

●こんかいのクイズ大会に対するまんぞく^{たいかい}度^どをおしえてください。

- 1 とてもまんぞく
- 2 ややまんぞく
- 3 ふつう
- 4 ややふまん
- 5 ふまん

●そのりゆうとしてあてはまるものすべてにまるをつけてください。

1 にほんや南米なんべいをするのにやくにたった 2 にほんじんと交流(こうりゅう)できてたのしかった 4 日本語、かんじをべんきょうするのにやくにたった。5 クイズのないようがおもしろかった 6 クイズのないようにふまんがあった 7 クイズのけいひんがよかった 8 時間を取られて不満だった 9 そのた ()

●にほんにたいする親(した)しみ (すきになるきもち・みち^ち かにかんじるきもち) はたかまりましたか?

1 とてもたかまった 2 たかまった 3 ややたかまった 4 かわらない (まえからしたしみがあ、いまもある。) 5 かわらない (まえからしたしみがあ、いまもない) 6 したしみをかんじなかった 7 そのた ()

●クイズは、かんじやにほんごをべんきょうするのにやくにたちましたか?

1 とてもやくにたった 2 やくにたった 3 ややくにたった 4 あまりやくにたたなかった 5 まったくやくにたたなかった

●クイズ大会では日本人とはなしたり、なかよくなったりすることができたとおもいますか?

1 たくさん交流(こうりゅう)できた 2 交流(こうりゅう)できた 3 あまりできなかった 4 ほとんどできなかった

●またクイズ大会(たいかい)にきたいと思(おも)いましたか?

1、はい 2、じかんがあえばきたい 3、わからない 4、いいえ (なぜですか?)

●どのような交流会(こうりゅうかい) (こんかいのクイズ大会(たいかい)のような、にほんじんといっしょにあそぶこと) であればさんかしたいですか?

1 にほんご、かんじのじょうたつにやくにたつ 2 にほんのぶんかをする 3 じぶんのぶんかをしてもらう 4 たべものやおみやげがもらえる 5 しらないひとたちとともだちになる 6 そのた ()

●いままで、にほんじんとこうりゅうするための交流会(こうりゅうかい)にさんかしたことがありますか?

1、はい⇒(かこにさんかしたこうりゅうかいとくらべて、どこがよかったですか。1. くいずのないようがおもしろかった 2. かんじのべんきょうになった 3. ぶらじるやなんべいのもんだいもあった 4. にほんじんとこうりゅうができた 5. にほんのことをしることができた そのほか ()

2、いいえ⇒(さんかしないりゆうにちかいものはどれですか。1. ラウンジがとおい 2. いそがしい 3. きょうみのあるいべんとではない 4. こうりゅうするひつようせいをかんじない)

●こんかいのクイズたいかいについて気付(きづ)いたことおもったことをじゅうにかいてください **Obrigada!!**

「クイズ大会アンケート 日本人用、外国人用」結果 2013年1月5日、1月6日、1月12日実施

クイズ大会 合計参加人数 24人 アンケート回収 22人

●年齢

小学生	中学生	高校生	大人
9	8	5	2

●男女比

男性	12
女性	12

●内訳

日本人	13
南米	8
中国	4

②アンケート結果

日本人アンケート 12人（鶴見区在住 12人）

●満足度（日本人）

満足	8
やや満足	1
ふつう	3
不満	0

●その理由

クイズ大会に来た理由

人に誘われた 13/13 = 100%

●近所に外国人は住んでいますか

多い	2
多少	9

住んでいない	0
わからない	2

●外国人と親しい付き合いの有無

親しい	4
挨拶	1
ほとんどない	2
まったくない	2
無回答	4

親しく付き合っている：「クラスが一緒だから」

無回答：「年が一緒」

親しく付き合っている：学校に外人がいるから

●外国人に求めること

日本語	5
ルール（ゴミだし）	3
騒音	1
特になし	3
無回答	1

●クイズ大会前に南米に親しみを持っていたか

はい	8
いいえ	2
無回答	2

●クイズ大会を通して親しみが高まったか

高まった	5
やや高まった	2
かわらない（もともと持っている）	2
かわらない（持っていない）	1
無回答	2

●クイズ大会を通じて、外国につながる方々の日本語の能力がどれくらいであるかわかり

ましたか？

わかった・困っている人がいれば助けようと思った	10
わかった・彼らの責任	1
わからなかった	1

●またクイズ大会に行きたいと思ったか

はい	7
時間が合えば	1
わからない	4
いいえ	0

●どのような交流会であれば行きたいか

日本文化	5
相手の文化	1
語学	1
多文化共生	1
食べ物や商品	0
友達や知り合いがくる	1
知らない人と友達になれる	1
その他	1 わからない
無回答	1

南米人向けアンケート結果 クイズ参加者 8 人 アンケート回答者 7 人（南米につながる方々） + 4 人（中国人の子ども） 12 人すべて鶴見区在住

来た理由

人に誘われた 7/7

●満足度

満足	2（とても満足 2 人）
やや満足	4
ふつう	1
不満	0

中国 とても満足 4

●その理由

日本や南米を知るのに役立った	2
日本人と交流できた	2
日本語・漢字を勉強するのに役立った	1
クイズの内容が面白かった	1
無回答	1

中国 日本語・漢字を勉強するのに役立った 4

●このクイズ大会は漢字や日本語を勉強するのに役に立ったか

とても役に立った	2
役に立った	
やややくにたった	
あまり	

中国 とても役に立った 4

●クイズ大会を通して日本親しみが高まったか

とても高まった	2
やや高まった	
かわらない（もともと持っている）	
かわらない（持っていない）	

中国 とても高まった 4

●クイズ大会では日本人とはなしたり、なかよくなったりすることができたとおもいますか？

たくさんこうりゅうできた	2
こうりゅうできた	
あまりできなかつた	
ほとんどできなかつた	

中国 たくさん 1 交流できた 1 あまり 2

●またクイズ大会に行きたいと思ったか

はい	1
時間が合えば	1
わからない	
いいえ	

中国 はい 2 時間が合えば 2

●どのような交流会であれば参加したいか

日本語の勉強	2
食べ物やお土産	2
知らない人と友達になる	1
日本の文化を知る	1
自分の文化を知ってもらう	1
その他	1 (「将来の夢につながるような」)

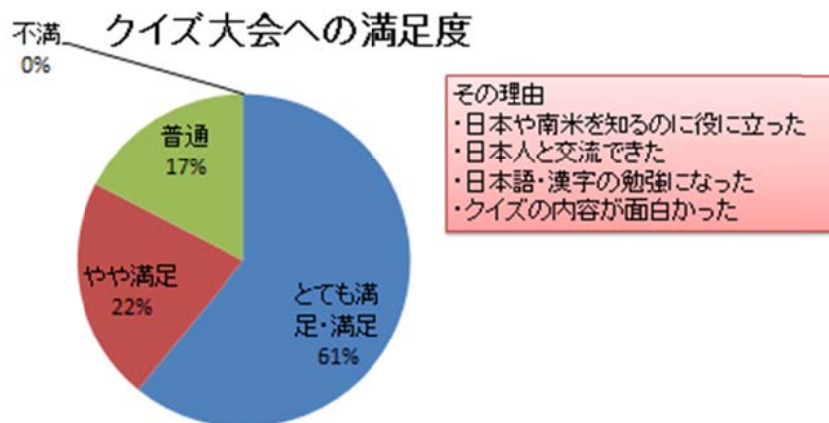
中国 日本語の勉強 3 日本文化を知る 1

自由記述

- ・「南米について知らないことが多いと思った」(60歳以上・女性・日本人)
- ・「いろいろなクイズがあって楽しかったです」「日本の漢字のことが理解できたので楽しかったです。それに、おかしがもらえるなんて最高です」(潮田小学校5年生・男性・日本人)
- ・「クイズをもっとやりたかったです。」「漢字やスポーツのことがいろいろ知れて楽しかったです」(潮田小学校5年生・男性・日本人)
- ・「楽しかった」(潮田小学校5年生・男性・ブラジル)
- ・「結構知らないこともあったので楽しかったです」(高校生・女性・ペルー)
- ・「色々なジャンルがあって楽しかった」(高校生・男性・ペルー)
- ・「楽しかったと思う。意外性、知らなかった知識を得られるクイズがもっとあったらいいと思った」(高校生・女性・ペルー)

-
- ・「クイズの問題は大変工夫されていてよかった」（40代・女性・日本人）
 - ・「南米の方は見た目が日本人なので、びっくりした。漢字が読めないと日本で生活していくことが大変だなあと思いました。」（40代・女性・日本人）
 - ・「非英語圏の人は社会から隔離されているように思う。自国出身者のみと交流していて、日本人と積極的に交流しているとは思えない。」（40代・女性・日本人）

アンケート結果(全体)

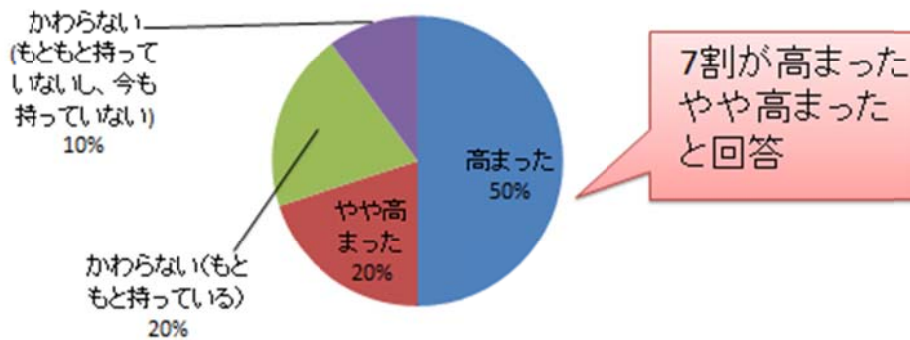


45

およそ8割がクイズ大会の内容に満足と回答。

アンケート結果（日本人）

クイズ大会を
通じて南米に親しみが高まったか

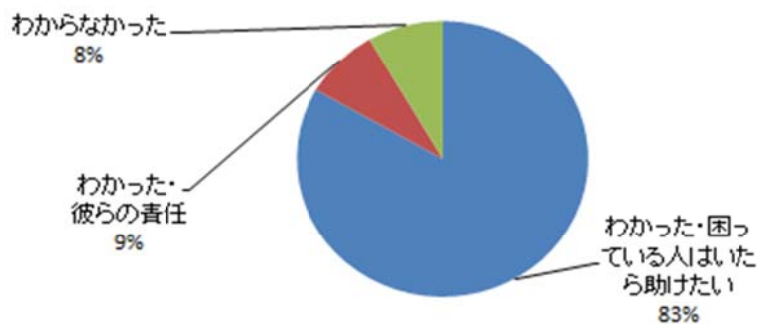


46

およそ 7 割の日本人がクイズ大会によって南米に親しみを持つなど、気持ちに変化が見られた。

アンケート結果（日本人）

外国人の日本語能力が
どれくらいであるかわかったか。

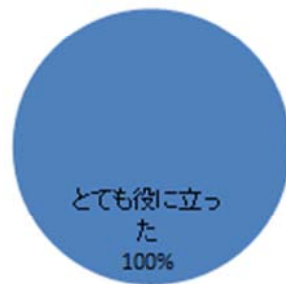


47

クイズ大会を通じて、南米系外国人移住者の日本語能力がどれくらいかわかった人がおよそ 9 割、そのうち 8 割が日本語で困っていることがあれば助けたいと回答。

アンケート結果(南米系)

漢字や日本語を勉強するのに役に立ったか



その理由
・「結構知らないこともあったので楽しかったです」(高校生・女性・ペルー)
・「色々なジャンルがあって楽しかった」(高校生・男性・ペルー)

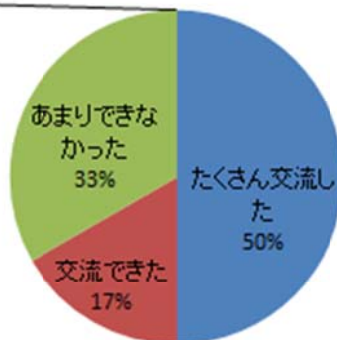
48

クイズ大会は漢字や日本語を勉強するのに役に立ったかを聞いたところ全員 (n=6) が役に立ったと回答。

アンケート結果(南米系)

クイズ大会で日本人と仲良くなれたか

ほとんどできなかった
0%

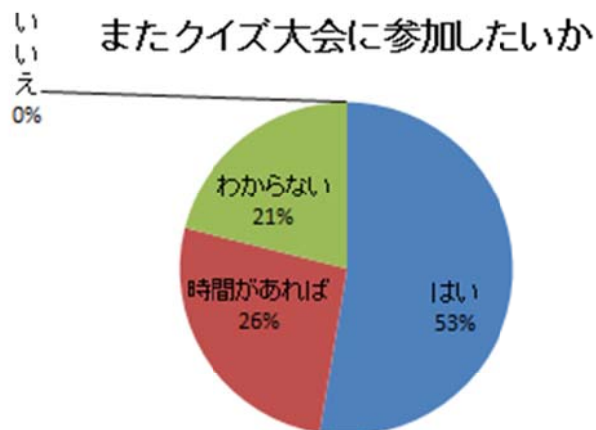


49

交流できた人が約 7 割、あまりできなかった人が約 3 割。最初は日本人と南米系とが混合

のチームを作り、協力してクイズに回答してもらおう形式を考えていたが、個別に回答してもらった。クイズ後にフリートークやお菓子を食べる時間を設けるなどしたが、座る席が日本人と外国人で分かれてしまうなど、あまり交流する時間がなかったことは反省点である。

アンケート結果(全体)



20

クイズ大会に参加したいと答えた人は 53%、時間があれば参加したいと答えた人が 26%、わからないと回答した人が 21%であった。約 8 割が次回も参加してくれる可能性があるという意味では概ね成功と言える。

結論

外国人移住者、特に南米系外国人移住者が置かれている状況は厳しい。特に移民 2 世と呼ぶべき「外国につながる子ども」のダブル・リミテッド問題は将来的に深刻な問題になると予想できる。

序章で述べた通り、日本は「移民」が法律上、存在しないことになっている。それゆえ、移民に対する日本語教育の指針を国が打ち出すことはできない。しかし、移民と呼ぶべき、“移住してきた外国人”や移民 2 世と呼ぶべき“外国につながる子ども”が地域に、学校に存在している。

日本語がわからない外国人の子どもに対して、各々の県や区がおのこの日本語支援の方針を決めている。行政は、各地域の国際交流ラウンジや NPO に支援を委託し、日本語教員やボランティアを派遣している。確かに、このような草の根の部分の支援は必要であると感じるし、筆者自身、外国につながる子どものために活躍する意欲的なボランティアに幾人と会ってきた。それは現段階では緊急措置であるだろう。

フランスの経済学者・思想家のジャック・アタリ氏は「人口問題と国力」という主題の中で移民をうまく吸収するためには言語が最も重要であると述べている。「移民の受け入れではフランスにイタリア人、ポーランド人、旧植民地の国民が流入してきた当初は抵抗があった。だが、その期間は 15 年ほどで、やがて移民は受け入れられる。フランスがうまく移民を吸収するのは、強力な社会統合政策を取ってきたからだ。統合の決め手は言語だ。移民が出身国の言語を使える英国や、スペイン語コミュニティのある米国と違い、フランスではフランス語を話さなければならない。学校教育は仏語で行われ、他の言語で意見を表明するのは認められていない。日本でも長期滞在したい移民は日本語を話せるようにならないと思う。」(毎日新聞 2012 年 7 月 1 日)外国人移住者の目的が出稼ぎであるならば、出稼ぎで働くという立場で甘んじることができる。しかし、日本で教育をうけ、日本で育った 2 世・3 世は、自らの意志で日本に来たわけではない。「親にとっては地理的移動であっても学齢期の子どもにとっては文化的に彷徨うことになる」(三田、2009 p.204) “つながる国”への帰国ももちろんあり得るが、日本で育った外国につながる子どもたちは、これからも日本に留まり、日本社会に参入する可能性が高い人々である。その人たちへの語学教育を怠っていいはずはない。母語も日本語も十分に使うことができないダブル・リミテッドの存在は、日本の移民のシステムの矛盾を最も体現していると思う。

日本ブラジル中央協会常務理事の森和重氏はこう語っている。「優秀な人材を必要とする日本にとり (ママ)、ポルトガル語と日本語のバイリンガルの国際人となりうる日系人子弟は、貴重な人的資源である。豊富な天然資源と巨大マーケットを有するブラジルは、日本にとり重要なパートナーになる。両国の架け橋となり得る日系ブラジル人子弟の教育は貴重な人材育成であり、ブラジル人学校・日本公立学校を問わず日本語と母国語 (ポルトガ

ル語)の教育についてブラジル政府も交え、日本の政府・行政・企業・地域社会が一体となり、連携して取り組む緊急課題と考えている」(森、2009 p.91.)

鶴見での現地調査、そして小規模社会実験として交流会を実施したことで、日本が将来的に立ち向かわなければならない外国人移住者(実態は移民)問題の実態が明らかになった。特に法律で言語取得を義務付けることができないゆえに引き起こる言語の問題と「移民」として受け入れていないゆえに「目に見えない」移民の存在がいることについては、国家がその枠組みを作らなければ根本的な解決しないだろう。筆者は実験を通して交流会の限界を感じた。しかし、有識者レビューを通して、地域の草の根の部分から少しずつでも活動していかなければ、何も変えることができないということがわかった。現在の枠組みで行える、一歩として筆者がデザインした「国際交流会」は意味のあるものであり、またこのような活動を日本人の意識を高めるうえでも、外国人移住者の意識を高めるうえでも進めていかなければいけないと確信している。

参考文献一覧

- 池上重弘『ブラジル人と国際化する地域社会』明石書店 2001 年
- 井上洋「世界同時不況の地域への影響と今後の日本の針路―見直しが迫られる外国人雇用のあり方」『地域日本語教育をめぐる多文化社会コーディネーターの役割と専門性』東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター編 2012 年
- 梶田孝道・丹野清人・樋口直人『顔の見えない定住化』名古屋大学出版会 2005 年
- 川村千鶴子他編『移民政策へのアプローチ』明石書店 2009 年
- 川村千鶴子『多民族共生の街 新宿の底力』明石書店 1998 年
- 北脇保之「自治体外国人政策のフレームワーク―EU の社会統合政策から日本の政策を考える」『地域日本語教育をめぐる多文化社会コーディネーターの役割と専門性』東京外国語大学 多言語多文化教育研究センター編 2012 年
- 久米照元他『ケースで学ぶ異文化コミュニケーション』有斐閣 2007 年
- 小林薫「ドイツの移民政策における「統合の失敗」」『ヨーロッパ研究』第 8 号 2009 年
- 小内透「在日ブラジル人をめぐる現状と母国の対応」『ラテンアメリカ時報』2010 年秋号
- 駒井洋『多文化共生への道』明石書店 2003 年
- 駒井洋『グローバル時代の日本型多文化共生社会』明石書店 2006 年
- 駒井洋『日本の外国人移民』明石書店 1999 年
- 駒井洋編『定住化する外国人』明石書店 1995 年
- 駒井洋編『国際化のなかの移民政策の課題』明石書店 2002 年
- 駒井洋編『移民をめぐる自治体の政策と社会運動』明石書店 2004 年
- 佐久間孝正『外国人の子どもの不就学』勁草書房 2006 年
- 島田謙二監修「フランスの移民政策 CLAIR REPORT No.363」CLAIR 2011 年
- 渋谷努『国境を越える名誉と家族―フランス在住モロッコ移民をめぐる「多現場」民族誌』東北大学出版会 2005 年
- ジョリヴェ、ミュリエル『移民と現代フランス』集英社新書 2003 年
- 新海英史「オランダ・アムステルダム市における移民行政の取り組みとその課題」『トランスナショナル・アイデンティティと多文化共生』明石書店 2007 年
- 竹沢尚一郎『移民のヨーロッパ』明石書店 2011 年
- 田村雄『仏伊西葡基礎語彙辞典』国際語学社 2010 年
- 東京外国語大学 多言語多文化教育研究センター編『多言語多文化 実践と研究 Vol.4』2012 年
- ドット、イマニュエル『移民の運命 隔離か同化か』藤原書房 1999 年
- 内藤正典『ヨーロッパとイスラーム』岩波新書 2004 年
- 二宮康史『ブラジル経済の基礎知識』ジェトロ 2011 年
- 土野賢・ビクター・レオナード「これからの日本 政治責任の構築と地方分権」『時評』2012 年
- 藤代将人「国際交流協会からみた地域連携と共同の可能性」『地域日本語教育をめぐる多文

化社会コーディネーターの役割と専門性』東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター編 2012 年

藤巻秀樹『「移民列島」ニッポン-多文化共生社会に生きる-』藤原書店 2012 年

広田康生編『多文化主義と多文化教育』明石書店 1996 年

三田千代子『「出稼ぎ」から「デカセギ」へ』不二出版 2009 年

村井忠政編『トランスナショナル・アイデンティティと多文化共生』明石書店 2007 年

毛受敏宏『異文化体験入門』明石書店 2003 年

森和重「日系人子弟の教育」『移民政策へのアプローチ』2009 年

宮島喬編『移民の社会的統合と排除』東京大学出版会 2009 年

山田史郎『移民』ミネルヴァ書房 1998 年

渡戸一郎『自治体政策の展開と NGO』明石書店 1996 年

渡辺和行『エトランジェのフランス史』山川出版社 2007 年

和田春樹『日露戦争』岩波書店 2010 年

Noiriel, Gerard., “ *Atlas de l’immigration en France* ”., Autrement Editions., 2008.

Perville, Guy., “ *Atlas de la guerre d’argérie* ”., Autrement Editions., 2003

謝辞

本論文を作成するにあたり、指導教官のヒジノ ケン・ビクターレオナード准教授から2年間におよびご指導を賜りました。ここに感謝の意を表します。本研究科入学以前から有益なアドバイスを下さいました手嶋龍一教授、副審査員としてご指導いただいた高野研一教授、西村秀和教授、フランスとチュニジアで取ったアンケートの作成に全面的に協力して下さいました高野研究室の篠田さん、アンケートおよびインタビューに快く引き受けて下さったすべての方に心より感謝いたします。

私は2年間、テーマを変えることなく、研究に打ち込みました。現実社会に起きている問題、その中でも自分が特に憤りを感じている問題（学部で西洋近代史の研究をしてきた私の場合は、移民問題に行きつきました）の焦点を絞り込み、その解決に向けて何ができるか、真剣に考えぬき、行動し、“中立な立場”で勉強した2年間は非常に有意義でした。そのような学生生活を共有し、助言をくださった先輩方、同期、後輩方、そして支えてくれた家族に感謝いたします。大学院学生生活が終わるとともにフラットにディスカッションできる機会や自由な発想で研究できる時間が格段と少なくなってしまうだろうことに今は寂しさを感じるばかりです。

修士課程2年間のうち、8カ月間を世界でも権威ある2か国の大学院（INSA Toulouse, TU Delft）で勉強させていただく機会を与えて下さり、それに賛同して下さいました本研究科の先生方、留学担当の方々にも心からのお礼を申し上げます。

最後にフランスのトゥールーズで出会った親友であり、本研究のフランスとフランス語に関わることについて、私が納得するまでディスカッションに付き合ってくれた Mlle. Marion Derouinau と M. Thomas Moulard に謝辞を表します。